

奇譚クラス

特大号

11

奇譚クラス

11

定價 百四拾円



鞭打ち3態 (杉 美穂) 制服の女学生 (雲井久子嬢) 野外全裸の縛 (村田那美子嬢) ナイロンの女体 (杉 美穂) 女が女を責める { 第一集 第二集 }

女体…緊縛

◎傑作写真集◎

本誌写真部特写

(全部送料共です)

【キヤビネ版 3枚1組 各200円】

交責め3態 (杉 美穂)

基盤責め3態 (雲井久子嬢)

溪流の飛魚 (村田那美子嬢)

高手小手3態 (木田新子嬢)

坂口利子嬢 股間縛り 5態

キヤビネ版 5枚1組 500円
問答の股間縛り十数態の中から、最も強烈で美しさのある五態を選び出しました

村田那美子嬢 悦虐姿態集

手札型 5枚1組 200円
さるぐつわ 3態
キヤビネ版 3枚1組 300円

伊吹真佐子嬢 梯子責め 3態

キヤビネ版 3枚1組 200円
梯子に縛りつけて吊るにうかす女体に喰い込む縄目。サディスティックの見果てぬ夢の一つ。

磔 (大好評傑作!)

第一組、キヤビネ 2枚1組 200円
台上の殉教者
キヤビネ版 2枚1組 200円

女性切腹擬態

写真シリーズ 8枚
キヤビネ版 8枚1組 600円

急襲

手札型15枚
1組 500円

連続十五枚続きで、女が縛られて、さるぐつわをされるまでの過程を描いた傑作。作。

中富綾子嬢・並川トミニ嬢 二女連縛集

手札型 6枚1組 300円
自分から縛りのモデルを志願してきた二人の乙女の連縛ポーズ

三嬢連縛棒吊り

(杉・坂口・村田の三嬢)
キヤビネ版 3枚1組 200円
これは異に珍妙なプロットである。在りて出来たものでなく、偶然のチャンスが得た面白い作品。

吊り3態特集

(川端多奈子嬢)
キヤビネ版 3枚1組 500円
第一組 第二組
第三組 第四組

血紅使用の 切腹擬態写真

(第一集) (第二集)
各集手札型 6枚1組 300円

川端多奈子嬢 悦虐姿態集

第一集 (手札型) 300円
第二集 (七枚一組)
定評のあるマゾ女性多奈子嬢の悦虐のポーズ

伊吹真佐子嬢 椅子責め 5態

キヤビネ版 5枚1組 500円
十四貫目百の激しい女体を縦横に椅子に縛りつけた

村田那美子嬢 坂口利子嬢

半吊り 2態

キヤビネ版 2枚1組 200円
優美にして変化のある半吊り

男性被縛写真

第三集 手札 5枚1組 300円
第四集 型 5枚1組 300円

男性マゾ写真

第一集 手札 3枚1組 300円
第二集 手札 3枚1組 300円

真刀を用いた

切腹擬態写真

手札型 6枚1組 300円
女性切腹姿態 (第二集)
手札型 6枚1組 300円

●女体緊縛写真優秀作●

各キヤビネ版 3枚1組 300円 (送料共)

縋帯縛りの特選

アメリカ某社の注文によりそのアイデアを活かしたエキゾチックな緊縛のポーズ清新と奇抜を兼ね備えた野心作。

中富綾子嬢 股間縛り 3態

可憐な情の乙女、中富綾子嬢の股間に喰い込んだ縄の顔目、これぞ股間の股しほり。

ローソク責め 3態

責め手の激しい手は、情を誘う燃える蠟燭が柔肌をやく、マゾ女の苦悶の表情と被虐の美しいポーズ。

後手高手小手 2面体

伊吹真佐子嬢
大鏡を利用して、高手小手の緊縛と胸にかかった縄目とを同時に一板の画面におさめたフォトマニア特選の珍品。

浅野末乃嬢 さるぐつわ 3態

ニューフェイス浅野末乃嬢の豊満な姿態にかけた縄とさるぐつわ。

萩 千恵子嬢 海老責め 3態

ヤセ型の柔軟な姿態の千恵子嬢を二つ折りに曲げたエビ責めのポーズ。二本の足だけが宙に浮いている。

萩 千恵子嬢 猪吊り 3態

両手と両足を一つに括って吊り上げた猪吊り、こうして吊られていると、だんだんマゾ的な気持ちになつてくるわ、という萩千恵子嬢。

萩 千恵子嬢 レインコート 3態

レインコートを纏って後手に縛り上げられた美貌の萩嬢の美しい被虐の姿態。

萩 千恵子嬢 腰巻 3態

腰巻マニアの方々是非この3態を味つて下さい。屈曲の多い麗美な純日本的なポーズを取り揃えました。

萩 千恵子嬢 縋帯 3態

白い肌にまといつく縋帯の白さは妖しい倒錯美をかもしている。縋帯による緊縛感と姿態美。

大の折檻 三態
A、芸を仕込まれて
いるワン公
B、女王様を背にし
たワン公
C、さあ、歩くのヨ
(首環とくさりで仕
込まれる)

凌辱 三態
A、男性をケダモノのよ
うに足下に踏みにじ
つて、喜ぶルミ嬢の
得意のポーズの中で
特別にマゾヒストの
喜ぶ凌辱の姿態を揃
えた。

足蹴 三態
A、椅子に腰掛け
たルミ嬢が男の口へ足
を入れて
B、クローズ、アッ
ブ、男が足を踏んで
C、男が足を踏んで
足めようとしている

人間馬 三態
A、乗馬ズボンに
馬鞍の女王を背に拍
車をかけられるとこ
ろ
B、腰を加えられる
C、馬を走らせる

人間椅子 三態
A、胸の上へ尻を
置いて女王様の休息
の椅子となつて
B、人間ソファ
C、うずくまつて、
女王様に背中をかし
ているドレイ

足蹴 三態
A、ハイヒールで頭
を蹴られていると
ころ
B、蹴り倒される男
C、後手に縛られた
男が、思ひまゝに頭
をけられる

新作 マゾ・フォト

春日ルミ嬢・構成
各キヤビネ版 三枚一組 三百円

縛られた女ばかりの豪華アルバム
頒価 一部 五百円 (送料六十円)

各葉解説文句入、コロタイプ印刷

美しき縛しめ 第一集

全部未発表の緊縛女体十六態

容... 猿ぐつわ 紅と白 蠟燭責
雁字搦目 観念 芋 虫
犠牲台 床の置物 鞭 打
内... 目の綾 滑車吊 高小手
荒縄 くさり エビ責

縛られた女体の三十二ポーズ

(九人のモデルを駆使した未発表の秘作)

緊縛三十二態の豪華アルバム

辻村隆成、塚本鉄三撮影

美しき縛しめ 第二集

◇責めの写真はほしいが、印刷紙に焼付けたのは高くて困る、とおっしゃる方は、印刷紙と変らぬ極鮮明コロタイプ印刷の、アルバムを是非お求め下さい。

頒価 一冊 五百円 (送料五十円)

晴雨『美人乱舞』

伊藤晴雨先生著並画菊版和装
美本 定価 四〇〇 千二百四

図版目次

▲人体時計 ▲天国の女 ▲美人燈 ▲島田雷のこわれる迄 ▲丸雷のこわれる迄 ▲美女のなやみ ▲崩れたる女 ▲鉄砲責にされる女 ▲火葬場異聞 ▲狒々に抱かれた美女 ▲死神につかれた女 ▲特別附録、娘風俗年中行事十二月、外特別読物として先人未発の貴重な春画文献五章十九項に亘って詳説す。晴雨ファンに薦む。

月刊 K K 通信 定価 二十円 半年 百円

本誌愛読者を中心にした楽しいグループ

K K 特別会員の機関誌として本誌の誇る K K 通信は、安価な会費と豊富な内容で、アマニアのオアシスとして楽しまれていきます。本誌をお読みの方は是非 K K 通信も併せて御購読下さい。一昨年発行以来、毎月休みなく発行を続けております。記事、挿絵、写真満載の K K 通信をどうぞ。

値か百円の会費で半年間、毎月、会誌 K K 通信 (B 6 十六頁) をお送りします。

客
一、山法師と静御 五、八百屋お七の
二、女スリと岡引き 六、新撰組と芸妓
三、淀君と千姫 七、腰元 十郎左衛門と
四、大公方と侍女 八、小紫と悪旗本

色刷画帖

時代物寶繪卷 XXX

三条春彦・画

各葉説明文句入、横トジ和装美本

特価 三百円 (送料五十円)

図御申込みは、曙書房、代理部へ！
図版重荷造の上急送申し上げます

奇譚クラブ臨時増刊号ノ

サディブラッセイ著、吾妻新譯

アリスの人生学校

定価 百円 (送料共)

美少女に対する折檻と凌辱の世界を描く、サディズム文学の決定版！

第一部 純潔教育 第二部 貞操教育

本誌躍進七十号突破記念 ◇懸賞原稿募集◇

創刊七周年記念の懸賞原稿募集に際しては、多数の方々から御応募を頂き、本誌上に百花燎乱の華を競いました。本誌の躍進を祝し、再び、新人の登場を期待して、広く同好の方々からの傑作を募ります。奮って御投稿あらんことを。

賞金

一席、四万円 一名

二席、二万円 三名
三席、一万円 五名
四席、五千元 十名

佳作

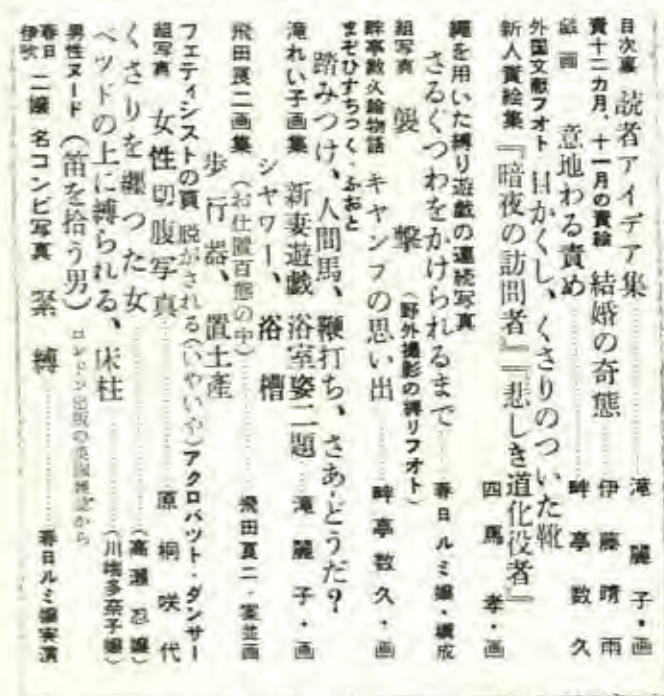
本誌一カ年贈呈 十名
本誌半カ年贈呈 十名
本誌三カ月贈呈 十名

規定

一、内容はアブノーマルな題材を扱い、本誌にふさわしいもの

一、創作、小説、文献、研究、告白、体験、等形式は問わず、
一、枚数は二十枚より百枚迄、
一、必ず未発表のものたること、
一、締切は 九月三十日、
一、入選者発表は本誌十二月号誌上の予定、
一、銓衡は編集部選、
一、封筒に懸賞原稿と朱記の事、
原稿の返戻御希望の方は、返券同封されたし、

曙書房編集部懸賞原稿係



日誌 十一月の記録 結婚の奇態 伊藤 晴雨
 十二月 意地わる責め 畔亭 数久
 外国文庫フォト 目かくし、くさりのついた靴
 新人賞絵案 『暗夜の訪問者』 『悲しき道化役者』
 四馬 幸・画
 繩を用いた縛り遊戯の連続写真
 さるくつわをかけられるまで 春日ルミ・編・構成
 組写真 襲撃 (野外撮影の縛りフォト)
 畔亭数久・絵物語 キヤンフの思い出 畔亭数久・画
 まぞひすちく、ふおと
 踏みつけ、人間馬、鞭打ち、さあ、どうだ？
 滝れい子画集 新妻遊戯 浴室姿二題 滝麗子・画
 シヤワー、浴槽
 飛田夏二画集 (お仕置百態の中) 飛田夏二・案並画
 歩行器、置土産
 フェティシストの眞脱がされる(いやいや)アクロバット・ダンサー
 組写真 女性切腹写真 原 桐咲代
 くさりを纏った女 (高瀬忍編)
 ベッドの上に縛られる、床柱 (川崎多奈子編)
 男性ヌード (笛を拾う男) ロレリン出版の成国雑誌から
 春日ルミ・編・案
 伊吹 二嬢 名コンビ写真 緊縛

日誌 十一月の記録 結婚の奇態 伊藤 晴雨
 十二月 意地わる責め 畔亭 数久
 外国文庫フォト 目かくし、くさりのついた靴
 新人賞絵案 『暗夜の訪問者』 『悲しき道化役者』
 四馬 幸・画
 繩を用いた縛り遊戯の連続写真
 さるくつわをかけられるまで 春日ルミ・編・構成
 組写真 襲撃 (野外撮影の縛りフォト)
 畔亭数久・絵物語 キヤンフの思い出 畔亭数久・画
 まぞひすちく、ふおと
 踏みつけ、人間馬、鞭打ち、さあ、どうだ？
 滝れい子画集 新妻遊戯 浴室姿二題 滝麗子・画
 シヤワー、浴槽
 飛田夏二画集 (お仕置百態の中) 飛田夏二・案並画
 歩行器、置土産
 フェティシストの眞脱がされる(いやいや)アクロバット・ダンサー
 組写真 女性切腹写真 原 桐咲代
 くさりを纏った女 (高瀬忍編)
 ベッドの上に縛られる、床柱 (川崎多奈子編)
 男性ヌード (笛を拾う男) ロレリン出版の成国雑誌から
 春日ルミ・編・案
 伊吹 二嬢 名コンビ写真 緊縛

寄稿家と読者と編集者のページ
編集問答、アブ・ラブ・レター、名作のア
ブ編写、明らか映画と聞、アブ放言集、共



集 俗 都 讀 吟 集

画 子 麗 滝

鶴責め



連絛



逆吊り



首縄



柱背負い



柱抱き



撞木責め



ツルハシ責め



逆十字



表責め



脚棚



賣 十 二 ケ 月 十一月の賣絵 結 婚 の 奇 習

長野県埴科郡の某村では結婚式のあった後、夫婦を村内の鎮守の社に招いて村内の若者が之を裸体にして辱しめる。夫は妻をかばい、妻は夫にすがって、二人は衆人稠座の中で涙を流して愛し合う事を誓う。此風習は永く村内の与論となって永久に離れないまじないであるという。結婚の奇習を少しく誇張して画きました。

〔伊 藤 晴 雨〕



戯 画

責めわる地意



Suk.



今月は九月号「どうしよう」の続篇です。「どうしよう」の六つの絵のうち、五つまでは逃げようと思えば脱出できることに気が付きたったでしょうか。
ではこゝにのせた六つの責め、首尾よく縄を解くことの出来るのは、はてどれとどれでしょう。急所をおさえた意地の悪い責めです。

【読者の皆様へお願い】

新年号の戯画ページは、一つ皆さんのお智恵を拝借して面白いものにしたと思っています。就きましては各地方には郷土色の豊かな家具や容器、装置、道具

具などがありますが、それを本来の用途を離れた責めに使っています。そこでなるべく詳しい見取り図、大きさ、名称、何に使うものか、などをお教え願えれば有難いのです。きつと視野の広い奇想天外なアイディアが生れてくることゝ期待して居ります。掲載した方には原画を送りいたします。

畔亭数久

文・画



目くし

後手はどういう縛り方になっているのか、わからないが、多分、揃えて伸したところを縛っているのだろう。

背後からロープが廻って足首にまきついているのは、珍しい。揃えて前に投げ出した両足の脚線はのびやかに美しい。





くさりの付いた靴

両手首と両腕の肘とを三角形に緊縛した回定の仕方は日本式の高手小手と面白い対照を示しています。

靴のくさは歩幅を制限するだけで歩行の自由は与えているが、両手を拘束されているので、ヨでヨチ歩きしか出来ないところに多分にマゾヒスティックな感興を呼びさまされる。



(Ankle strap shoes)

暗夜の訪問者 のぞいている僕の目の前に、ぼうと白くうかび上るように立木に縛られた女の姿があった。暫く見ていると、黒いソフトに黒背広の男が近づいてくるではないか、僕は探偵映画の一コマでも見るような気持でその不思議なシーンをじっと見つめていた。夢かもしれない、いや、その黒づくめの男こそ、僕自身であるのかもしれないのだ。





悲しき道化役者 華やかな舞台の陰で縁の下の力持となる僕は人生の悲しい道化役者、女の柔肌に鞭をふるったとしても、それは主役を引き立てるはかない引立役。

(新人の責絵をお送り下さい、よいものは誌上に紹介いたします)

新人責絵集……………四シ 万マ 孝画……………

かけられるまで

春日ルミ構成・実演
モデル・伊吹真佐子嬢

片眼の黒マスクに黒手袋、颯爽とあらわれたルミ嬢は今、激しい勢で相手のモデル嬢を押し倒したところ、抵抗しても、しなくても結局は同じことになるのだが。



馬乗りになったルミ嬢は手袋を脱ぎすて、先ず右手首へ紐をまきつけ、左手も捻じ曲げようとしている。真佐子嬢は足をばたくさせてはね起きようとする。

縄をり遊戯の 連続写真 さるぐつわを



シャツをさんぐ破かれた末、後手の高手小手に縛り上げられてしまった。鼻をつまみ入れて、苦悶の口を開ける真佐子嬢とそれを冷然と見下すルミ嬢の残忍な表情



口に巻いた手拭を引きしぼられて、真佐子嬢は観念したように身動きもしない、勝誇ったルミ嬢の端正な顔には、サジストとしての会心の笑をもらしている



ルミ「さあ、ぐずぐずしないで立つのヨ」マサ「だってエ、両手が縛られているので、立てないんですもの」ルミ「早くしないと痛い目をみせるヨ」



ルミ「これだけか上らないの？」マサ「縄が喰い込んで痛いヨ」



「素直にできなかった罰に晒し者にしてやるわ」

カメラマンも顎を出す強行軍の上、密林の中へモデルを引き入れての春日ルミ嬢の熱演、次頁の連続写真と一緒にごらん下さい。

(3) そう、おとなしくするのヨ



(1) ちよいとお待ち！



(4) 先ず両手首を縛ってと……



(2) 騒いじゃ、ためにならないヨ

(7) さるぐつわもしなきやネ



(5) 松の木の方へ来るんだヨ



(8) ざっとこんなもの……



(6) どう？ちっとはこたえた？

① 里子「待ってよ、そんなに早く歩かないでよ」正雄「何あんだ。今汽車から降りたばかりじゃないか」



② 里子「まあ、おそいのねえ。早くいらっしやい」正雄「待ってくれーい」



③ 正雄「あゝ、暑い。つかれた」 里子「あたしもよ。着物脱いで楽な服装になるわ。あんた、リュック持ってね」 正雄「えゝッ」

4 里子「さあ、強力さん。どうぞお先へ」 正雄「……………」



5

里子「お腹がへったね、ごはんにしましょうね」 正雄「キャンプを作ってからだよ。日がくれちまうよ」

6

正雄「よいしょッ」 里子「キヤッ」



7 里子「あたしを逆つるした罰よ。たべる間じっと待ってるのよ」 正雄「腹ペコだよ。殺生がなア」



9

「ナイフの手入れた。里ちゃんはよく眠ってるナ、これで料理してやろうかな」 里子「スースー」



8

里子「早くいらっしやい。あたしのストリップ見せたげる」 正雄「とにかくおれはたべるよ」



10

正雄「おーい、御来光だよーッ」
里子「意地わる！待ってよーッ」



11

11

里子「すばらしい野天風呂だわ。正雄さん、何をぐずぐずしてるのかしら。早く来ればいいのに」
正雄「彼女がこっちを向かないかな」



終 里子「コラッ」 正雄「しまった。」

の ペ ー ジ

待ちに待った十月特大号昨日受取りました。
特大号故、少しはおくれるかと思いましたが、意外に早くお送り下さいまして本当に嬉しうございました。
胸おどらせて聞きましたらグラビアに私の長い間望んでいました美しい切腹の画、夢中で見つめました。恥しいながら私も長い間の女性切腹マニアでございます。
こんな美しい画は初めて、これからは毎号／＼こんな画が載ったらどんなに楽しいことでしょう。私の画い

から送られた写真



本号の「切腹のページ」では、咲子さんからお送り下さったものゝ中で写真の一部を掲載いたしました。絵の一部と全裸での切腹の写真は誌面の都合で割愛のやむなきに至りました事を、切腹マニアの方及びわが／＼多数の写真をお送り下さった咲子さんに詫び致します。どういふ理由か存じませんが、二回に分載は、いけないそうですので本号にて掲載は、打ち切ることに致します。

女体切腹

た絵もお送りしようと思ひます、原画は大きいので、
(新聞一頁大) 写真をお送り致します。全国の切腹フ
アンの方々に見て戴いたり、その方々のも見せて戴け
たらどんなに嬉しいでしょう。この写真、画、KKに
載せ下さるのはかまいませんが、一度だけをお願い致
します。全部でも一度だけならかまいませんが、二度
に分けて下さいますな、勝手なことばかり書いてごめ
ん下さい。(原桐咲代)

原 桐 咲 代 さん



踏
み
つ
け

(女性の足下に踏みつけられた男)

春日ルミ嬢・構成





人 間 馬

(女性の馬にされて走らされる男)

こうしてほしいの？ 奴隷さん！



叩かれ易い姿勢をとるのよ！





ネ ク タ イ

(春日ルミ嬢・構成)

置き土産

粋な泥君が洋服ダンスの中へ残していった置土産に帰ってきた夫君も、キモをつぶすことでしょう



飛田良二・案並画

補 行 器 (四つ車方向自在)

赤ちゃん用の歩行器に乗せてみると一層興味あることになります。縁側をひいて歩くのも楽しいものです。



良ニアイデア集の中より

新妻遊戯浴室姿・・・浴槽・・・

「着物ぐらい、いくらでも買ってやるヨ」事もなげに言い放った夫はすべてを台なしにしようらしい。



新妻遊戯浴室姿・・・シャワー・・・

「あゝあなた！」妻の驚きもよそに、シャワーの栓がひねられると豪華な訪問着は忽ち水に濡らされてゆく。

滝 麗



アクロバティック・ダンサー



脱がされる (フエチシストのページとして)

うら若き女性が着衣から、次第に脱がされて、下着をはがされてゆく過程をカメラにキヤッチした一つです。このあとは次号で掲載することになります。



(男性ヌード)

笛を拾う男

ロンドン出版の英国雑誌より



[天淵盛英氏ヨリ]



美女に御せられた人面馬身の画はマゾヒストの夢を描いて余すところがない。筆力の雄渾、着想の適切さはその情緒の高貴さと共に他の追隨を許さない。

[Webers Hemsckatt]



くさをを纏った女

高瀬忍嬢

川端多奈子嬢二題

床
柱



ベッドの上



春日
伊吹

二嬢名コンビ写真

緊縛



文化人の文献研究誌

奇 譚 ク ラ ブ

1954年 11月号

(第八巻 第十一号 通刊第七十四号)

~~~~~特 別 増 大 号~~~~~

馬  
敬  
礼  
(ドイツのグロテスク誌より)





# 集團心理に現れる

## 「倒錯」の考察

—理論体系への試論—

成 瀬 亮

嗜虐心理乃至被虐心理は、通常、個人の先天的若しくは後天的精神病質傾向として現われるように解釈されやすい。変質者・癡癡・白痴などの劣弱者にしばしば現われるそうした病的傾向はまさしくそれに該当するであろう。だが、もしそうした素朴な原則によってのみ現代人の倒錯心理傾向を理解しようとするとき、往々不可解な謎にぶつかる。なぜなら、現代の倒錯者及び倒錯愛好者のほとんどは、知能的、性格的生活的どの面から検討しても、変質・癡癡

白痴などのように、著しく反社会的であったり、秩序や風紀を紊乱せしめるような劣弱者ではないからである。いやむしろ、社会的、家庭的には、善良で謹厳な敬愛すべき紳士淑女が多いのだし、自己のひそかな倒錯傾向に対しても、絶えざる自制と反省を試み、歓喜に伴なう羞恥と屈辱の苦汁をしたたかに味わっているのである。これが変質・癡癡・白痴ならば、自己の心理と行為についての抑制機能や、羞恥・屈辱の感情は絶対に起こるはずはない。取締当局に

しても、また一般商業ジャーナリスト達にしても、この余りにも明瞭な区別が出来ない。いや、出来ながら、ある政治的圧力のため、わざと同一視し、弾圧せざるを得ないのではないか、と想像されるふしがしばしばあるのだ。

ひどい場合には、ヒロボンの慢性中毒患者の暴行や失態を、「倒錯」と看做し、世人にわざと混同せしめるような表現すら用いている。僕は、いわゆる「倒錯者」「倒錯心理者」「倒錯愛好者」のいずれにも属



さない。むしろきわめて冷徹な批判者の側にあるが、こうした政治的圧力の前に、真実が次第に歪められつゝある情勢に対してはきびしい反撥を感じずにおられない。

僕はきっぱり断言する。現代人の倒錯心理や倒錯愛好の傾向は、個人の病的傾向のなせる業ではなく、原・水爆による人類破壊の恐怖と絶望が拭ききれない限り、なお夥しく激増して行くに違いない。「病める世界」の免がれざる現象であることを！ こうした根本の問題がどうにもならない限り人間の間に、暗い虚無と絶望と不信が巢食っている限り、そして、米ソの際限なき軍備拡大競争が是正されない限り、現代を蔽う、最後の「一人間の逃避口」である倒錯の愛好者は決して後を絶たないであろうことを！ いかなる場合でも、現象の末端を取締る前に、われわれがなさねばならぬことは、その現象を誘発した動機と原因への探究と剔抉である。

これは、外部に対しても云わねばならぬと同時に、内部、すなわち本誌の関係方面に対しても、僕はきびしく要求したのである。整然たる理論体系をまず確立せよ。

技巧の研究と、耽美の礼賛だけでは、外部からの弾圧や暴力に対する果敢な抵抗はなし得ないし、また世の識者達の広く強い同情と理解を獲得することも至難だからである。

### 近江絹糸争議に

#### 現われた倒錯性

人権擁護のために起ち上った近江絹糸争議は、世界の注視を浴びた最も特異な争議である。紡績という産業が、かよいい婦女子の搾取（動物的低賃金と長時間強制労働）によって成立し、繁栄を保持し得るという事実は、すでに二十数年前、細井和喜蔵氏の「女工哀史」でその全貌を露呈しているが、一九五四年の今日もなお、三十年以前と同様あるいはそれ以上の残忍非道な人権蹂躪が、平然として行われていたことは啞然とせざるを得ない。夏川喜久次とその一族の吸血ぶりがさりながら、よくも一万人の婦女労働者がこんなひどい職場で黙々と忍び耐えていたものである。

争議の経過については、日刊新聞その他

に詳細を報道されているから、僕はここで一切重複を避ける。だが、この争議に色濃くまわりつく、最も典型的嗜虐と典型的被害の対照について、社会心理学的考察を加えることは、たしかにこの特異な争議の本質を衝くことになると思われるので、本誌の諸君と共に深く研究したのである。

すなわち、最も封建的、原始的集團においては、独裁者のあくなき嗜虐の精神と、下部大衆の奴隷的被害の精神が、奇妙な調和を保ち、一大精神病院の形相をなす、という深刻な事実の証明である。嗜虐若しくは被害が、縄や紐による緊縛、棒や鞭による殴打、あるいはナイフ、針、鉄などによる刺切などの技巧を辿るのは、一対一の場合であって、一人の嗜虐者と多数の被害者という関係の場合には、その技巧や方法は著しく変化してくる。すなわち、一人の嗜虐者は、直接に自己の手を以てその満足を得るのでなく、自己に直属する幾人かの代理嗜虐者を養成し、さらにその幾人かは、おのおのが代理者を持ち、末端において、被害大衆に直接応待せしめるのである。この方法は、旧日本軍隊の陰惨な病的嗜虐が、

「階級」という段階において行われたことで明瞭である。しかも、各段階においての代理嗜虐者は、一段上級者に対しては「抵抗を禁止された被虐者」の立場であった。被虐者にして嗜虐者である場合、その双方の歓喜を満喫するために、いよいよ性格的変異に陥ってゆく。同性愛の場合「女性」としての受動的愛撫を受けたものは、後日「男性」としての能動的愛撫を必らず「女性」的同性性に向って求めるように……

近江絹糸争議において、この両棲動物的立場に起つものは、第一組合（会社側の御用組合）に所属する課長、係長、寄宿舎々監の連中であつたにちがいない。女子工員宛の封書を数百通、舎監部屋の押入れた陰匿していたことが発覚した某女子舎監などの心理は、単に会社側の命令によるのではなく、年若い同性の私生活の秘密を窺視することによって、倒錯心理の満足に耽けていたに相違あるまいし、亦、男子職員や男子工員にすら結婚することを嫌がったという会社であれば、この女子舎監なども、不自然な独身を守り、「忠勤を励む」ことで会社側に認められた一人であつたに相違あるまい。

旧日本軍隊の内務班生活、あるいは刑務所生活のように、異性との接触をきびしく禁圧された場合、悶える性の突破口が同性に向ふことは必然であり、近江絹糸女子寄宿舎においても、宝塚歌劇同様の、「若き性」の不自然な解決が公認されていたのではないかと疑わざるを得ない。

### 宗教という名の倒錯強制

さらに、近江絹糸争議の要求条件の一つ「仏教の強制反対」に現われた事実こそ最も恐怖すべき、嗜虐と被虐の一致があつたことを指摘しよう。凡そ宗教なるものは、現代人の叡知と逆であり、人間解放と個人の尊厳を叫ぶ近代思想と相容れざるものはない。人間にとつては人間以上の架空の權威や仮設の偶像を認めてはならないはずだ。宗教は、實在せざる「神」や「仏」の信仰を強制する。個人の自由な意志によって、そうした信仰を持つことは、自殺同様、禁止する方法はないが、かりにも、自由意志によらない限り、一方的に宗教を強制し、その權威を認めさせようとする位、危険な暴力はないのである。これは、緊縛や殴打

よりももっと激しく、もっと陰險な嗜虐趣味であろう。僕は、近江絹糸の工場に設けられた広い仏間の板の間に数百人の女子工員が正座せしめられ、経文を刷りこんだ社訓とやらを合唱している写真を一覽したとき、思わずぞっと背に冷汗の流れる戦慄を感じた。これこそ、われわれが、かつての戦場の日、朝夕の点呼に東方に向つて、軍人勅諭とやら、戦陣訓とやらを朗読せしめられたあの陰惨な忌まわしい記憶と一体どこが違うのだ！ われわれの戦友は、「天皇の御為に」と強制され、「軍人勅諭」や「戦陣訓」やで教育されて、その果ては、ビルマやヒリッピンにいまでも骸骨をさらしているのだ。言葉に絶した嗜虐の暴力に打ちのめされて、彼等は万斛の怨みを呑んで死んだのだ！……しかも、それが、表面的には、「兵隊」という最も悲惨な被虐者の歓喜の中において、柔順な羊であつた近江絹糸の女子工員達は、死なない代りに十億の大会社を築く一粒の小石となり果てただけではないか。「今日一日不平不満はいません」これが、典型的被虐の歓喜の言葉でない、と誰がいえようぞ。



繰返している。封建的独裁下においての集團被虐心理ほど恐怖すべき、戦慄すべきものはないのだ。最も悪質な搾取者とは、資本家若しくは経営者にして、嗜虐の満足を味っている連中である。彼等の仮面を引き剥げ！ その下に流れるドロドロした血膿まじりの嗜虐本能こそ、彼等に「利潤」を生ませる原動力であることを、われわれは今こそ知らねばならないのである。

### ◇日患の闘争の被虐性

資本家や政治担当者が、しばしば典型的嗜虐本能を発揮するのと反対に、これに抵抗する労働者や一般国民が、典型的被虐本能を以て斗争することも、社会心理学の上から非常に注視を要する特徴である。

戦後、全国に氾濫した、いわゆる「白衣募金」のそれが、義手や義足を露出し、通行人に一種の恐怖と哀愁と憐憫を与えて、募金の効果を挙げているのは、人間の心理に潜在する被虐本能の苦痛と歓喜に直接感能するからである。肉体の一部を切断することは、やがて進んで、自殺による被虐本能の満足にまで進展する。昔の武士が、一切

腹」による被虐本能の修飾と誇張と美化を行ない、われわれも亦何かしら、憧憬と畏敬に似た感情をおぼえるのは、柔い皮膚を鋭い刃が切り裂き、鮮血が奔るとか、臓腑がドロドロ流れ出すことが、一種の性的官能美につながるためでもあるけれども、実はそれ以上に、共通の被虐本能を強烈に刺戟するためなのである。（僕は本誌において切腹の技巧や文献的報告が多い方面、一番たいせつな社会心理学的な探究論のないことを常に遺憾に考えている。）

すこし脱線したようだが、とにかく一般民衆は、抵抗の戦法として、しばしば被虐本能を武器とし、またこれが嗜虐本能を武器とする為政者をしばしば屈服せしめているのだ。その好い実例が、集團自殺による抗議や、ハンガーストライキであり、さらに、今回の「日患」のすわりこみ戦術であろう。

近來結核患者が全国的に激増しつつありこれを収容すべき結核病床が少いたため、病床利用の回転率を早めるために、入院退院の基準を定め、治癒に近い患者を早く退院させようとする厚生省の通牒に対して、不

完全治癒のまま社会復帰をした場合に、結核菌の伝播、自宅療養の経済的不能、就職の困難などを生じると反対する療養患者の集團「日患」が起ち上ったわけである。この問題は厚生省側にも患者側にも聞くべき理由があり、結局、結核病床の増加を計るなり経済的に療養を可能ならしむる政治が必要なのであるが、本誌に僕がこの問題を探り上げた理由は、日患の斗争方法が、社会心理学的に検討した場合、明らかに、集團自殺と同じコースの被虐本能を根本において斗争している事実である。

厳格な安静と療養に専心すべき結核患者が、炎熱下にデモ行進し、各官庁の玄関や路上において座り込み戦術を採った場合、最も打撃を受けるのは、他の誰でもなくその患者達自身であることはいふ迄もない。病勢はたちまち逆転し、咯血、高熱、卒倒などで倒れるものが続出するのは眼に見える。社会の眼は、たちまち集中するし、そうした自殺的ストを中止せしめようとする動きが起るのは当然である。亦そのためには、こうした事態を起さしめた厚生省に強い反省を要望する世論が起きるに違いない

と、日患の指導者はこう考えているであろう。果して世論が計画通りに動くかどうかはぼくは知らない。しかし、きびしく警告したいことは、たとえ、このストが成功したとしても、その手段として取った行動を僕は支持しない。被虐本能を掻き立て、あたかも殉国者気取りの安易で愚劣な生命軽視の風潮に投ずることは、人間性の破壊であり、被虐の病的症状であるからだ。自己の生命を軽視するものは必ず他人の生命をも軽視する。それは不条理と不合理に従う精神であり、その悲壯感こそ、裏返せば、最も愚かな特攻隊の玉碎精神だからである。これこそまさに人類の敵なる精神である。

### 健康にして正常なるものとは

僕が、現代人の陥りやすい倒錯心理に、十分の同情を示しつつ、しかも共鳴し得ない根本的な考え方は、僕自身の歪め得ないヒューマニティに基づいている。人間はあくまで、眼ざめていなければならぬ。暴風雨がいかにも激しくとも、われわれの冷徹にして理性的な希望を失うまい。倒錯心理を

発生せしめるものが、政治の貧困と不信、社会の不条理と不合理であるならば、まずそれをこそ、われわれの団結によって改善しなければならぬ。僕は倒錯者や倒錯心理者の激増を、前述のように個人の素質や性格において考えず、社会そのものを発生の基盤において考えているのだ。

だから、不安や危機の増大が、倒錯者を派生するのだという。けれども、これは決して憂むべき事柄でなく、われわれの目的は、そうした社会を作り出さないこと、もし危機や不安が増大したなら、死力をつくして阻止することが、真実の平和と幸福を保持することだ、というのである。現代人の精神は、解放と自由を求めてやまぬ。たとえ、遊戯にせよ、趣味にせよ、緊縛・殴打その他肉体に束縛と苦痛を与え、自己あるいは他人を動物亦は奴隷の位置に陥し入れることによって、秘密な悦びや陶醉を味う、ということとは、暴力が権威であった封建的・原始的集團への郷愁を曳きずっておらないだろうか？ 停屯と後退は現代人の採らない所である。「麻薬の最初の一本は、悪魔に魅せられる甘美さだ」というこ

とを僕は聞いている。苦痛激しいときわれわれは、モルヒネの一本によって救われたくなる。現実生活の悩みがきびしいとき倒錯趣味によって救われたくなる。だが、モルヒネは最初の「甘美」な一本では決してすまないのが常識だ。もしも倒錯趣味も同じようなことになっては大変である。

こうした問題をいかに昇華すればいいのか、を僕は考えぬいた。そして到達したのが、現代社会の日々に起きてゆくいろいろな事象の中に必らず漂う人間の倒錯本能の解剖である。フロイドが「精神分析」によって、あらゆる人間の生活現象の中に、否定し切れない性の現象を説明しているように、社会事象の中に潜在する倒錯本能の解説することによって、種々の難しい問題の解決の緒が見えられようである。こゝに到って、遊戯と趣味は影を没するはずだ。（この一篇には、近江絹糸ストと日患の問題を採り上げたが、僕の提言に賛成される同志を得て、いろいろな問題にふれて行くなれば欣快である。）

◎本稿に対する反駁を期待する。

（編集部）



# 浣腸マニヤの手記

花村 恵美子

「浣腸責」こんな言葉が存在するかどうかわかりませんが、サディズムやマゾヒズムの一行為として浣腸が用いられております事は、「KKクラブ」発表の告白記ばかりでなしに、「アリスの人生学校」や、「泣き叫ぶ青春」Whips and Tears等の翻譯物の中にも、見受けられます。

前者は、継母の折檻凌辱として、後者は、女主人公である一少女の伯父及び、その愛人であり少女の家庭教師である中年の女性から、お仕置きとして少女が浣腸されるのであり、更に女学校の寄宿舎に於ける刑罰として、教師から浣腸される事が書かれてあります。

そしてこれ等はいずれも、相手に対して折檻凌辱を行う事に依って色情的快感や淫好の感覚を誘い起し、或は味う為のサディズム的行為である事は、いう迄もないでしょう。そして、こうした行為は、必ずしも行為者のサディズムを満足させるばかりではなく、8月号の浣腸通信の一文や、9月号「露出願望の少女の告白」にありましたように、浣腸されたいというマゾヒズム的心理の存在する事も、否定出来ない事実だと思えます。前述の事柄など今更申す迄もなく、「KKクラブ」愛読者の皆

様ならば衆知のこととでございましょうが、「浣腸」という言葉が、最近の純文学誌の作品中に見られました事を、非常に面白く思いましたので、一寸紹介致し度いと存じます。勿論それはSやMには全く関係のない医業としての浣腸ですが、群像4月号、室生犀星氏の作品に、胃潰瘍の患者が頑固な便秘の苦痛から解放されたくて、看護婦に浣腸を頼む事が書かれ、同じく文芸6月号にも前作よりもっと生々した心理描写と写真描写とで浣腸を受ける事が、例えば、石嶺浣腸のイルリガートルが運ばれると、その浣腸器はごめんだ、石嶺浣腸は嫌いなんだ、子供に用いる浣腸器でして下さい、と駄々をこね、その果二度とも失敗してしまった事、更に看護婦に指でホジッて貰う描写等が簡潔にしかもリアルに書かれてあります。浣腸という言葉を見たり聞いたりしただけで興奮を覚える私には、読んだ時、その場面を想像して胸騒ぎと、そうした文章に魅かれる自分の羞恥の為に、頬赤らめたのでした。又群像8月号の稲垣氏の作品にも、肛門に関したことが書かれてあり、私は私なりに興味深く読んだのです。純文学誌にそれらの事が書かれてある事は珍しい事でありますもので。



フロイドが、肛門色情という事を提唱し、小児性慾の一行為として、肛門の発情性粘膜帯を人工的に興奮させ、出来るだけ多くの快感を獲得しようとして、排泄行為を意識的にうまい具合に調節する事に工夫を凝らすものと、腸管の出口を発情帯だと提示しており、事実、小児が何かの機会に指とか異物を竊かに肛門内に挿入している処を観たことも再三ならずありますし、又子供達が好んで行う所謂「お医者遊び」の時、浣腸の真似をしたりする事が、彼等の快感を唆るものであることが了解されます。こうした肛門色情が高まり肛門礼讃となり、更には浣腸という行為に迄発展するのだと思います。大分前置きが長くなりましたが、ここで私の申したい事も実は浣腸マニヤである私の、(サディズムとしての浣腸の事は、既に発表されておりますので)私のは浣腸されたいいわばM的な体験? を。

私が始めて浣腸されたのは小学校二年生の時、お隣のAさん(当時五年生)から。Aさん独りで留守番をしている時遊びに行つて、Aさんの一番好きな遊びである「お医者さんごっこ」をしようとして、厭がる私を無理に浣腸したのですが、10CCの浣腸器だったとは言え、幼いそして始めての私にとりましては、恥かしいことより恐怖で泣き声すら出せず、トイレへ10分以上も行かせて呉れなかった苦痛だけは今でもはっきり覚えております。Aさんが病気の時浣腸された事を覚えていて、私にしたのだと言いましたが、それから五、六度(グリセリンの時と、単に水だけの時とありました)他言されるの恐しさにされましたけど、思えば私の浣腸マニヤの萌芽は、Aさんが原因のようです。Aさんの家はそのうち移転しましたのでそれなりで

したが、五年生の時、どうしても浣腸のエクスタシーを求めたく、お腹が痛いと言つて母に嘘を言つて浣腸されたことが二、三度ありました。この子つたら、良い氣持そう、と母に言われたことが、私の秘密にこたえましたので、嘘つく事は止めました。それでも三月に一度位の割で、母から蛔虫駆除という名目の元に、食酢の浣腸をされました。これは寝る前に水で薄めた食酢を20CC程注入されるのでしたが、グリセリンと異つて便意を催す事はなく、朝迄なんでもありませんので、別に興味は差程でも有りませんが、浣腸器の見られることと、肛門をいじられる事が矢張り楽しかったようです。直ぐ下の妹も同時にするのですが、その様子を見て、子供心にも妖しい気分になったことを覚えています。ヒョットすると母も、浣腸が好きなのではなからうかとさえ思つた程でした。

女学校入学の年の夏、初潮を迎えた私は、流石に下半身を見られる恥しさから、蛔虫駆除と言つて行う浣腸も、絶対にさせず、苦い駆虫薬を服用しましたが、二年生の時、一年ぶりで、母ならぬ男の先生から強制的に医薬ならぬ浣腸の洗礼を受けたのでした。自分で申しますのもおこがましいようですが、クラスでも目立つ位の容貌だった私は、受持ちの先生にずい分可愛がられ、よく遊びに行つたのですが、その若いB先生のアップトの一室で七夕の夜、ユカタ姿の私を、セーラ服の貴女とは別人のように大人びて見えると言われ、面白いものを見せてあげよう。これ、何するものか知っている? と持ち出したのが、30CCの浣腸器なのでした。途端私は、Aさんの事や蛔虫駆除の浣腸の事が想起され、思わず真赧になつて口が乾いてくるのを





覚えしました。

三年生の時、育児の授業で、浣腸の仕方を説明された事がありますが、浣腸器の写真の出ている教科書を見て、ドウキの激しくなっていくのを友達に知られないようにと、強いて無関心さを装っていましたが、一体お友達はどんな気持ちかしているのだろうか、好奇心を抱いたのは私一人だったでしょうか。いいえ、授業が終ってトイレに行った時、長い間出て来なかった人が数人も居りました。

教科書には、イルリガートルの写真も出ていたのです。こんなので浣腸されたら一体腸はどうなるのだろうかと恐れと期待を抱いた私が、そのイルリガートルで浣腸されたのは、その年の秋、盲腸の手術の時でした。

手術する前に浣腸しましょうね。その看護婦さんに言われた時、同性とは言え、十六才の私は、そんな恥しいこと死んでも厭と駄々をこねてはみたものゝ、それは自分の秘密を知られない為で、内心では期待に歓喜していたのです。石鹼液の充滿されたイルリガートルが連ばれ、流出具合を調べている看護婦さんの手にある、硝子製浣腸器とは比較にならない程太い、長さ10cm程の嘴管を見て、あれだけ挿入されたら痛いに違いないと考えたのですが、ワゼリンが塗ってあるのか、差程の抵抗感もなく挿入され、生暖い石鹼液の注入が全神経に感じられ、自分ではなされている事が見えないだけに、看護婦さんの指の感触や、徐々にお腹の張ってくる感じ、嘴管の硬質物の感触等が私を夢の世界へ導いていくのです。液量は400CC位だったでしょうか。でもこれ迄の事は、浣腸の経験ある人ならば、多かれ

少なかれ感ずることでは別に真新しいことではないでしょう。いわば浣腸マニヤのプレリュウドみたいなものです。

病気でもない限り浣腸の機会はありません。浣腸からどうしても離れなくなった私は、当然の結果として、自分で自分に浣腸を試みるようになっていったのです。

高校三年（十九才）の私は、浣腸マニヤの性癖を充分に味う為に、浣腸器を買集めました。一つだけではないのです。折にふれ買集めたのですが、現在10CCのもの二筒、20CCの三筒、30CCの三筒、他にゴムのスポイト一個に、エネマシリンドリ一個、所有しております。

勉強部屋に鍵を掛けそれらの浣腸器（製作所が異なると、目の盛のつけ方、嘴管部の型はそれぞれ違ってきます）を並べ、楽しみます。それから石鹼液を作り（グリセリンですと、大量に浣腸出来ませんので）一筒ずつ吸引し、机に乗せます。薄青色の硝子浣腸器に充たされた石鹼液の白さの美しいこと。横座りだったり、しゃがんで出来るだけ腰を曲げたりして、一筒ずつ浣腸していきます。液温は、注入がわかるように、冷水を用いたり、かなり温めたりしますが、液の注入感表現出来ません。若しこうした事を、男の人がして下さったらどれ程強烈で——という儚ない願望。

しかし浣腸器は、どうしても、イルリガートルが最高、長く伸びたゴム管の先につけられた、たくました嘴管、一時に大量の注入可能なイルリガートル、とうとう私は、イルリガートルまで買い求め、種々な浣腸法を試みたのですが、それらのことはこの次に書きたいと思っています。



きもののシリーズ (第三話)

## 忘年会奇談

白

金

紅

次

昭和五、六年から十年にかけた頃は、世の中は不景氣風が吹きまくってはいたものゝ、満洲事変からいゆる軍需景氣がようやく芽を吹き初めて、私の勤めている工場も飛行機のプロペラカバーの留め金のピン造りで、下受工場としては忙しい部類に入って行った。しかし夜通しやる程飛行機は飛んではいず、ほんの形許りの残業でお茶を濁す……と云っちゃ当時の言葉で御奉公にならないが、まあ大した事はなかった。これも世の中が暮しよかった為だろう。工場から帰えり途は判で押したように氣晴らしに喫茶店に飛び込んだも

のである。その頃は今と違ってウエイトレスの洋装は銀座位なもので、われ／＼風情の入る処は圧倒的に白エプロンの和服が多かった。上野のガード近くの食堂デパートと云う須田町食堂式の店を覚えてる人は少ないかも知れないが、その女給さんは揃いの無地の紫の着物に、ピンクの長襦袢、無地の朱の帯をお太鼓に結んで、どの娘も若く綺麗でビチ／＼していた……のは今でも印象的で、まぶたの中に残っている。これと反対に、ほんの二、三人しか居らない喫茶店は馴染むのも早く、それこそ女房でもつれて行けば御家庭の

延長で、何時間ねばっても看板にならず、女房は女同志、男は女給さん同志で親しくなれたものである。もっとも、これはうまく行った方で、塩を撒かれて帰るバアも多かった。工場から二丁程西に寄った、ビルの横丁に「鈴らん」と云う喫茶店があって、そこでかると云う女を知ったのは九月の終り頃であった。人を喰ったおきやんな顔に流行の耳かきくし？ を結って肥えた肉付きを紫がかった矢絣の着物で締めつけ、ぼってりと出た下腹をポンとたたいて、

「嫌やあーな人ね……」



つて云うあたりは至極官能的だった。

「こんだの休みは活動（映画）おごってやろうか」と誘うと、洋画は判んないから日本物にしてよと素直について来る。財布の手前どう転んでも二、三流館に入らざるを得ないから、落花生とするめを存分かつて館を出ると、

「筋はよく判んないけど続篇見たいわね。あれから先き、ほら座敷牢でゆわえられてた娘さ、でもあんなに拷問されちゃっちゃ可哀いそうだわ、まるで荷物見たい……聞いてるの……敏さん……」

「うん、聞いているよ……」

「敏さんだっておさむらいだったらあんな事する？」

昔の人は強気ねえ、怖いみたい……」

や殿女中の

お綺麗どころを

いっくくって

折檻でも

してやさん、



「嫌やあーな人……」

と私の肩をたゝいてニンマリと笑った。こんな処が心理学者の摘み処のようだが、講談雑誌で育った私には、若さの勢がまだ女の胸の中までは手が届かなかった。つまり客観性はあっても直観性に欠けていたのだろう。このかを見ると云う女給と私の秘そかなる繰り事は、いずれ稿を改めて発表することとして……

その頃、大ていの工場は工員の慰安と上役職員の親睦をかねて、近郊の温泉巡りが流行っていたが、私の工場も御多聞に洩れず……その時は天下晴れてのやさもっさと景気よく出掛けたものである。会社の社長から

くくって折檻でもして御覧、大抵の男は随喜の涙をこぼして宇頂天になるもんだよ、美人の顔もまた格別ってね……」

「君……や、相当なもんだね、ウム大いに話せる。仕事の上じゃ困るがこんな時にゃ、かまわずつき逢って呉れよ、いや、つきえ逢と

云っちゃ失礼な云い分じゃが……お手伝い願  
い度い、アハッアハッ……以後宜敷しくね……」

の言葉を頂戴したのは生涯の面目につきる  
がとどのつまりは宿屋の階段の下へ押入れみ  
たいな処で、義太夫もじりに女中を口説いて  
た現場を見られた御縁と云うもの……。

処で、毎年の秋の旅行会がどうしたはずみ  
か延び／＼になって、暮れも押しつまった或  
る日、工員の慰安をかねて社長宅で忘年会を  
やるお触れが職場に広まったのは、がっかり  
の助だったが、たんまりボーナスでも出るん  
だろうと、旋盤のヤスリを磨いていたら工場  
長が呼びと云う、工場長は「社長室で社長  
が一寸」と云う……結局。

「会社の都合で秋の温泉行は止めたんだが……  
こりゃ専務の取計いでね、皆んなに相済ま  
んと思ってとるが……その代りわしのうちを  
開放して、うんと飲んで貰おうと計画しとる  
んじやよ。それで多芸の君を……呼んだんだ  
どうだ、何か奇抜な趣向でも考えて見て呉れ  
んか」

「ハア——、趣向と云っても……どうも……」  
「芸者の手踊り、かっぱれ位は組んでもかま  
わん、一つ景気よくやろうじゃないか、費用

の方は心配せんでもいゝ、たゞ、わしのうち  
は芝居小屋じゃないから、舞台がどうのこう  
のつて云われちゃ困るがネ……十畳二間をぶ  
っ放さしや何んとかなるだろう……」

「一つ社長の義太夫でもお入れになっちゃ如  
何です？……」

「いや時と場合によっちゃわしも出るよ、同  
じ社員じゃからのう……」

「じゃ考えて見ます……」

とその場は引下がったものの、いつもの温  
泉宿みたいにとんちゃん騒ぎは近所の手前は  
どかるし、しんみりやっちゃ告別式になりか  
ねまいから、専務や工場長と相談した結果。

社長の義太夫にあわせて劇をやることと、芸  
者の手踊りに、工員の飛入りのど自慢、それ  
に専務の手品、御挨拶をかねて社長令嬢の日  
本舞踊をと云うことに決つた。

処で問題となるのはお芝居で、第一社長の  
義太夫が決まらなければ丸っきり縁もゆかり  
もない出し物をやる訳にはいかないし、色々  
すったもんだのあげく、多少本格がかかるが  
社長一家の後援で、為永太郎兵衛作の院本に  
瀬川如皋が手を入れた歌舞伎台本「播州皿屋  
敷の抜萃篇」を上演することに決り。今思っ  
ても、よくあんなものが練習もろくすっぽせ

ず出来たものと感心しているが、当坐はどう  
せ、ちゃらんぽらんでも酒の上の余興だ、か  
まうものかと度胸をきめて仕度に取りかか  
た。さて衣裳や舞台の造作は社長が取り持  
つと云ったからいゝようなものゝ、肝心かなめ  
な登場人物になりてがない。もともと、当日  
まで催物の内容は極秘にしようとして呉れと口止  
めされているから、なおのこと話しの渡りを  
つけるのは苦労だ。

「観るのは好きよ、だけど出るのは嫌や……」

と云う女工員から

「よせよ、俺れがちゃん鬚結ったら彼女がこ  
れでボンさ……」

と肘鉄砲の恰好をして断る同僚達で手がつ  
けられない。これも結局、語り手社長、三味  
線と道具方は商売人、国家老浅山鉄山を係長  
の大石さん、岩淵忠太は工場長、下部仲間二  
人は女がいゝだろうと云うことになって臨時  
雇のかをると包装係のおしげ婆さん、扱で主  
役腰元お菊は……とう／＼女房の敏江が、私  
に散々口説かれて勤めることになったのであ  
る。（何しろ生れて初めて芝居をしようと云  
う連中だけに、当日まで漕ぎつけるのは並大  
抵じゃなかった。第一台本のせりふが憶えら  
れんからじゃん／＼抜いて、社長の義太夫を



本位に、あとはだんまりのパントマイムであって演技のまずい処は写真で補えば沢山だ……と高をくぐり、今憶い出してもぞっとする素人歌舞伎が出来上った次第……

私は当日の模様を、否準備するまでの一週間の出来事を逐一こゝで多くの読者に御披露したいとは思ふが、あまり長くなるので、またいづれ稿を改めて他日御紹介する外に手があるまい。たゞ芝居の他では万籟飾の社長令嬢が慣れない裾に足を奪われ、急ごしらえの舞台から真逆様にすってんとどうと転り落ちて工員諸君から割れん計りの同情ある拍手喝采を浴びた事だけを付けたして置く……

扨て、愈々大詰め、の社長大張切りの義太夫劇「皿屋敷」の段が開幕と相成った。私は催物の責任者として、舞台全般を指揮しなければならぬ。別に権威のある玄人筋の演出者じゃないから見よう見真似の出たため指図、十畳の間の横っちょの六畳部屋からはすに花道を作り、正面床の間を入れて奥行五尺の超小型舞台。本当の背景は木挽町の歌舞伎座で御覧と、形ばかりの黒幕が垂がり、それに燈籠だの網代堀や竹笹がボール紙に画かれて留めてある。たゞどうしても要る古井戸は、蜜柑箱に紫の風呂敷を四五枚かぶせて下手に置

かれ、天井から借り物の赤黒い縄をぶるさげ……とまあこう云う処で準備は出来たが、役者の衣裳は大変だ。社長のきも入りもさりながら、そうそう万端揃う訳もなくお花見恰好の仮装物、乃至はお披露目のちんどんや、さした両刀ボール紙と云った風景……だが当日のヒロインは何んと云っても腰元お菊だから敏江の着付は念が入った。濃くどろりと溶いた白粉を、首から胸、足のつまさきからふともみの処まで塗ると、口紅、頬紅、手足の爪へは紅をさし、さらりと腰に緋縮緬の蹴出しを巻かせ、白絹の細襟とった肌襦袢、その上に緋紋縮緬、金糸銀糸で木の葉の吹き寄せを裾に縫いとった長襦袢をはおり、衣紋を抜いてその上から黒に秋草の裾模様の衣裳を、裾を引くように着せる。そして文金高島田のかつらの鬘（びん）のはつれも、潤（うる）れ氣にうつむく腰元菊を促し

「辛抱しろよ……」

と両腕取って思い切り後手に捻じ上げ、用意の黄ろい細縄で嚴重に縛り上げた……

「大丈夫ですか……」

不安氣に覗く社長奥さんの顔を見上げて、「いや大丈夫です。家内は慣れますから」と答えた、私の手は震るえていたらしい。

「え、と、万事いゝかい」

「じゃ始めますよ」

……でお芝居が、いや社長の義太夫がでんでんと鳴る音と共に、滑り出した。

へ播磨がた、名さえなまめく姫路の城下、

五軒屋敷の一と構え、国家老浅山鉄山が下館（しもやがた）故ありげなる住居なり……

と、で出しが語られると、上手で謡曲の見たに台本を置いた社長の顔からハラリと汗がこぼれ落ちた。可哀そうなのは臨時にやれよやれよと連れて来たかを見ると、おしげ婆さん紺看板の仲間野郎で手桶だの席など持ち、慣れぬものを抱えて神妙に腰を降ろしてげんな顔……

処で黒幕の割れ目から

へ忠太大声……で、工場長の上野さんが太ちちよの顔をゆがめて、袴の股立取り「ヤイヤイかしましいやい……」と出て来たが、ションとしているので大笑い。

「……して今日は、是非とも手ひどく責めて罪に落せばお菊は死罪……いや斯くなる時は鉄山殿の煩惱のきずなも切れて一安心と申すもの……」

一杯ひっかけた工員席から、

「いよう！ 千両役者！」

と声がかかる。

「合点行かぬあの飛石、いで実正を……」

と大みえ切って身構える処は台本から省略してゐるから、例の毒を飲んで死ぬる蟻助の段はすっ飛んで、時計の音で思い入れする鉄山のと……

「あの時計は未の刻……罪人これへ呼び出せッ……」

「心得ました」

で、愈々腰元お菊詮議の場へ急行……

「ヤアヤア者共、申し附けたる囚人菊、キリキリこれへ、曳き出せ」

「ハア……」

とかをるとおしげ婆さん、こちらを向いてニヤリと歯を出し、花道通って六帖の間にそくさと姿を消した。

「うき事も、よるべの浪に漂ふる舟瀬

三平武経が娘のお菊も……」

社長も落ちついたと見えて、声が澄んで来た。もともとこれ位の芸がなければ社長の椅子はつとまらんかも知れない。俄かごしらえの揚げ幕が左右にパツと開くと、腰元お菊の哀れな姿がしょんぼりと現われた……

こゝで芸の細かい処が本職の役者衆と

素人の分れ道なのだが、奇ク好みに申せば、お菊が痛々しいまでに本当に後手に縛られて御丁寧に胴縄まで掛けられている点だ。

「本当にたゞくかも知れないから我慢おし」と、予め敏江に申渡してあるからいゝような

ものゝ、少くとも女工員の観客席から、「あら、本当にゆわえられて出て来たわ……誰あれーあの人……」

は、つや消した。

「初しものにしおれ、しおるる縛り縄……」





で、お菊が思わすうしろをふりかえると、仲間の一人が割竹で一突き二突き、よろめき崩折れんとすれば、今一人が縄尻をかなぐりたぐる。裾が乱れて緋縮緬の蹴出しが艶にまめかしく火のように出た。

「キリキリあゆめ……」

とかをる先生仲々の名調子、やっぱり三流館の活動を見た甲斐だけあってうまいッ」とほめたら、例の下腹をボンとたたいた。

「追い立てられて是非なくも……庭の戸近くあゆみくる……敏江は背中の方まで捻じ上げられた縄尻を曳かれ、押されてしおしおと舞台の中央につれていかれると、おしげ婆さんの手で荒席の上へ坐らされた。

「御意に従い腰元お菊」

「召連れましてござりまする」

と仲間二人手を仕える。

食卓の上に緋もうせん敷いて、小高い処に坐った係長の鉄山居士は……シロリとお菊を見て、また天井の方を見る。

「コリヤ菊、その方予の秘蔵し居れる献上唐画の皿、扮失なすとは不屈きな奴、その一枚はいずれにやった。白状せずば命がないぞッ」

「言われてお菊は顔ふり上げ……」

で、会社のカメラマンがマグネシウムをたいてカメラに撮る、仲々忙しい。一枚隠くしたんではない。いや偽りを申す。もしや盗人のせいでは。だまれだまれ。大方せりふも怪しかったが、ともかく菊詮議の場は凄惨な責檻の場に移っていく……

「情客赦も荒くれ男、お菊を土壇に引据えて、

「きりきり白状申し上げい」

「これでもか、これでもか」

で、仲間二人あせだくの熱演。結局一枚二枚三枚と皿を勘定させるが、道具方の不行届きで二枚足りない。

「馬鹿め、二枚も不足するとは怪しからん奴……」

と鉄山先生、これまたあせだくの気転振りそのうち狭い舞台とて、一暴れ二暴れするにつれて、荒縄付のお菊の衣紋も相当乱れて、古井戸のつるべ縄に縛られる時は帯が解け、前ははだけて白い脛にすり落ちんばかりの緋の蹴出しがからみついて、公開の席とは云え飛んで行って直してやり度い位……

斯くして、熱演すること二時間余りで、夕方遅く慰安会は無事終了したのであるが、そのあとで社長の心づくしの茶の接待を受け、

諸々の話に花が咲いた。

「いや、わたしは本当にお上手なのでびっくりしましたわ、痛かったでしょう、こちらさんのお仕込みがいゝから、貴女の腰元は本当の役者以上……」

は社長夫人の言葉。

「やっぱりあゝまで無惨な恰好をせにや真に迫った顔付は出来やせんよ。若い女御はたまには縛られて見なけや……アハッアハッ」

「社長も昔は浅草芸者でも泣かせたんではありませんか？」

「わしや日本趣味でいう、今日の衣裳も実は家内の若い頃の物じゃよ」

「大分暑かったものですから、下着から長襦袢にかけてあせがしみ込んで申訳けありません……」

「いやかまわんかまわん、何んなら今日の記念に進呈しようか……アハッアハッ……」

（つづく）

# あるマゾヒストの手帖から

## 第七十二 女性の乗馬

この頃各地の乗馬クラブでは女性の利用者が非常に多いということだ。私などには嬉しいニュースである。西洋の文学や映画で知る風俗の中、羨ましいものの一つに上流の婦人には皆乗馬の心得があることがあった。

職業として馬に乗る向きは別として、スポーツとしての乗馬は、本来貴族的な娯楽である。自分で馬を持つものの特権的なスポーツである。日本でも徳川時代には農工商には馬術が禁ぜられていた。明治になって武士はなくなったが、乗馬はやはり馬を持ちうる特権階級の娯楽でしかなかった。欧化の風潮から、貴族階級の女性で乗馬を嗜む人も現れた。……しかし、欧化は完全でなかった。西洋において貴婦人が乗馬を嗜むのは、女性が社会生活に公的に進出しているからである。女権が伸張しているからである。（この辺の云い方は少々雑で、又吾妻氏に叱られそうであるが）そういう社会的基

沼

正

三

盤のない日本では、到底乗馬を以て貴婦人の必須的教養とする迄の欧化には達しなかった。良妻賢母的女性観は女性を家庭に押し込めようとし、乗馬などは「淑かさ」と両立しないと教えた。——結局中流以下の女性には始めから問題にならず、嗜む余裕のある上流の女性は、お転婆といわれ、縁談の妨げとなるのをいやがって学ぼうとしない、というのが、従来までの日本の女性と乗馬との関係だったのである。

終戦後の女権拡張は、そういう偏見の抵抗力を減少させた。そこで女性群は乗馬の趣味へと進出をはじめた。尤も持馬のある人は少いから、クラブを利用するというわけだ。借り馬では本当の意味での貴婦人といえぬのが残念だが、乗馬クラブでも恒常的に利用するのは相当に余裕ある階級に属することを必要とするから、一応貴婦人的に見てよいだろう。

偏見を破って乗って見ると、思いの外乗馬が婦人のスポーツとして適していることが分って来た。——これが恐らく経験ある女性の



一致した感想であるらしい。事実女性の方が男性よりも一般に乗馬術には巧みで、女性の方が上達も早いし、上手になるということを遊佐幸平翁が明言している。翁の書かれたものによると今迄は女性にハンディキャップがついていたからそれが分らなかったというわけだ。遊佐翁は遊佐馬術の創始者で、その言だからこれは権威あることばであるが、疑う人は、今年ドイツのアーヘンで行われた世界純馬術選手権大会の成績を見るが良い。デンマークのリス・ハルテル夫人は並み居る男子選手を破って堂々優勝しているし、スエーデンのローリン嬢は五位に入賞している(七月七日附各紙)。なんと現



在世界一の馬乗りは男でなく女なのである。スポーツの全分野を通じて男より女の方が成績が良いという種目は乗馬しかないであろう。考えて見れば納得の行くことだが、乗馬においては、女性の男性よりも体格体力において劣っているという缺點が問題にならぬので、男女は全く対等に斗えるのであるが、他の種目ではこの缺點は致命的なのである。乗馬は正に新時代の女性スポーツといわねばならない。乗馬クラブが女性で賑うのも宜なる哉。

そしてマゾヒストとして私がこの新傾向を喜ぶのは、これによって日本の女性が従来よりもずっと私達を喜ばすような資質を獲得するに至ると思われるからである。乗馬の心得のあった女性について私の観察したところなどから、次のようなことがいえよう。

第一に貴族的になる。貴族的といって語弊があれば、嬌慢になるというのか。伏目勝ちにしか男の顔も見ない淑かさなどは全く異質な、自信たっぷり人に人を見下すといった態度が出てくる。これは乗馬自体のもつ貴族的な伝統、例えば、馬丁によるサービスといったものが招来せしめる向きもあるうし、又馬上豊かに跨って歩行者を見下した時の特権的な意識から来た面もあるう。

第二に男性的になる。これはいうまでもないことで、昔のように

横乗りの女鞍に乗るわけでないから、恰好だって乗馬ズボンで男同様に装うのだし、第一馬の方では乗手が女だからといって遠慮はしないのだから、他の人間共に接する時のように「私は女だから」という意識に甘えていられない。男達と同じ様に振舞わねばならぬ。

第三に支配的になる。乗馬とは支配の技術である。感情と意志と判断とを有する本来独立の高等動物の一匹を自分の意志に隷属させる技術である。轡と手綱によって馬の自発的意志を奪ってしまうのであり、鞭と拍車とによって、乗手の意志を強制的に加えるのである。全生物界を通じて生物の一個体の他の一個体に対する支配にしてこれほど徹底的に完璧なものはあるまい。支配階級が乗馬の楽しみを独占したのも無理はない。乗馬は支配の技術を教えると共に支配の喜びをも教え、要するに乗手を支配的にするのだ。

第四に専制的にする、或は暴力的にする。その支配は説得によるものではなく、鞭と拍車による絶対的服従の強制なのである。これはサディズムといえる。ヴルフエンは乗馬のサディズム性を指摘している。女性は乗馬の経験によって、強大な体軀体力を有する個体も一定の道具を彼女が準備する、ことによって、専制的に支配しうることを充分に学ぶだろう。

こういった資質は西洋の貴婦人が目下の者に対する場合には充分観察されたことであるが、従来の日本女性には缺けていたといわねばならぬ。それらが乗馬によって少しでもプラスされてくることはそれだけ女主人の適格者が増すことであって、私などには喜ばしい限りなのである。

尚、本誌今年一月号五月号乗杉女史の「ダイアナ夫人」や、K通信第十四号R子女史の一文等は、女性自身の観察による乗

馬心理を説明して注目すべきである。これらは改めて一項として扱うことにする。

### 第七十三 うま年の初夢

こういう婦人乗馬熱は男女関係にも一の変革をもたらした。その例証を一つあげておこう。

十一月号でこんなことを書くといさゝか時期おくれたが、今年の元旦の新聞は、うま年に因んだ記事が多かった。朝日新聞には「新



## 初夢

女房の馬になった夢を見た……(東京・あつし)



春は馬上に開く。手綱さばきもあざやかに」と題して、神宮外苑を散策する馬上の令嬢三人の写真を掲げていた。馬の横腹の長靴、その拍車、……昂奮させられる情景の写真だった。

そしてそれと符節を合わせるかのような漫画が「初夢」として描かれていた。「女房の馬になった夢をみた……」というのである。

(挿絵参照)

私はつくづく時勢の変化ということを考えざるを得なかった。新聞というものが日本に発祥して以来、うま年元旦の漫画頁に、こんな絵が載せられたことは、今年がはじめてであろう。私の保存している昭和十七年元旦の新聞は大東亜戦争開戦直後で、戦果に湧き立ちハワイ大空襲の写真が紙面を占領して、漫画どころでない。

長い間、日本では女性の乗馬は一般的承認を得ることができなかった。馬に乗るのは男だけだった。それを反映して、長い間、男女関係を乗馬にたとえる時、馬というのは女の方を指すにきまっていた。沙翁の名作の戯訳以前から「じゃじゃ馬」とは悍妻を指すことばであって、悍夫を指すことはなかった。「天井を男の見るは不甲斐なし」と川柳子は下になる男を嘲笑したが、この一般的承認を得られぬ姿勢は、乗馬にたとえられず、茶臼にたとえられた。乗馬にたとえられたのは男が上にいる時のみである。頭山満が浜の家に流連して、新春早々若い妓を御していた時(この御すという表現がすでに女を馬と見ているのだが)。ある政客が年始に来て知らずにガリと襖を開けたら、彼は少しも慌てず「馬上御免」と云い捨て、そのまま御しつづけた。という逸話を平山蘆江氏が伝えているが、全くそのような乗馬感覚のみが人々を支配していたのだ。

所が戦後になって事情は変って来た。乗馬クラブは女性のクラブ

員で賑うようになった。福島県では馬術大会で入賞した乗馬好きの芸妓が現れた。女も馬に乗れるのだ、乗っておかしくないのだ。この新しい認識を反映して、男女関係においては、馬といえば男のことなのだ。ということを入々教えるのに、あずかって力あったものは、ヴァン・デ・ヴェルデの「完全な結婚」であろう。騎乗位(乗馬位)とは女が男に跨るのであるということは、もはや若い人々の間では常識化したことである。男は女の馬となるのを恥じる必要はない。「天井を男の見るは深い仲」なのだ。この新しい思想が徹底した所に、十二年前には見られなかったこういう初夢漫画が描かれるに至ったのである。

時勢の進歩である。この進歩を私はマゾヒストとして喜ばずにはいられない。そしてひそかに期待するのである、近い将来には、女上位こそが正常位とされ、「天井を女を見るは不甲斐なし」といわれるようにまで、時勢が進歩することを。

## 第七十四 青山光子

独立の一項目にするほどのことではないかも知れないが、婦人の乗馬に関連して、青山光子の名を思い出したから、こゝで書いておく。恐らく大抵の諸君はこの名を知らぬであろう。

明治二十四年鹿鳴館華やかなりし頃、東京駐劄のオーストリア公使が美しい日本娘と恋をした。男はクーデンホフ伯爵とて故国での名門(日本でいえば近衛家、松平家などのように皇室と姻戚関係のある高い家柄)の御曹子、女は青山光子として代々の江戸町人の娘であった。女の一族に毛唐に対する偏見があって、彼女は勘当されたが、同様に、男の故国にも、封建貴族的な身分結婚観からす

る強い反対が予想された。

然し相互の愛情は万難を排して、光子は遂に伯爵夫人として中欧なる夫の国に渡ることとなった。平民の娘がシンデレラのような玉の輿である。然し真の万難は実はその後にあった。玉の輿はまた茨の輿でもあったのだ。

当時名もない東洋の一小国の生れであるということは、まず夫の家族、召使達に尊敬よりも軽蔑感を起させた。私達がエチオピアの女と結婚して帰った人をどう思うかを考えれば推察できよう。然し光子は氣位を高く持って先ずこれに耐えた。

夫は美貌の貴公子である。沢山の貴族の令嬢が伯爵夫人の地位をねらっていたのだ、彼女等は、出し抜いた異人種の小娘を嫉視羨望した。光子を見る眼は好意よりも悪意が多かった。

それでも日本であつたら、夫の愛のみをたよりに、奥深くたれこめて暮すこともできたろう。然しオーストリア・ハンガリーの宮廷と、ウィーンの社交界は、歐洲で最も伝統に富むものの一つである。貴族たり外交官たる人の妻となつて社交界に出入せぬわけにはゆかない。クーデンホーフ家は皇室との交際もある。この間に処して伯爵夫人らしい振舞をなし得なければ、良い妻とはいえないのである。彼女はいわゆる *accomplished lady* (才芸ある貴婦人) とならねばならぬ。

純日本娘から西洋貴婦人への転身が始まる。これは全く容易ならぬ努力を要求したであろうこと想像に難からぬ。ドイツ語を語びフランス語を學び、英語を學んだ。語學に次いで歴史を學び、更に文學、音楽、美術の方面まで教養を積んだ。東京で生れた長男リヒヤルトから或る時何か聞かれて答えられず、これでは教育はできぬ

と發奮して、家庭教師について子供より先に習い、何をきかれても答えられるようにした。子供が學校にいつてからも、これを中學でも、高等學校でも続けて、數學や物理化學まで勉強した。日本では小學校も満足に終えていなかった彼女が伯爵夫人として恥かしからぬ教養を身につけるに至った。

教養とは知識ばかりでない。勿論茶、生花、琴といった江戸娘らしい遊芸のたしなみはあったが、西洋の貴婦人として通るにはそれでは足りない。ダンスなどは何でもないとして、紳士達と一緒に狩猟にいくこともできなければならぬ。乗馬や射撃が貴婦人のたしなみである。光子は早朝に起きて乗馬や射撃を習った。毎朝の馬場通い、初の中は落馬した(その時の骨折が老年になってから痛んで困ったという)が、やがて一人前に乗り廻せるようになった。鞭、拍車、鉄砲の使用にも慣れた……。

くどくどと書くのは止めよう。とにかくここで見事な転身が、むしろ西洋貴婦人の創成がなされた。日本生れの小娘は、伯爵夫人としての才氣と威厳とを備えて、オーストリアの社交界の名花となった。映画「たそがれの維納」の仮装舞踏会、あの雰囲気になさわしい女性として生れ変わったのだ。

この話はこれで終つてもいいのだ。日本女性の持つ可能性を教える西洋貴婦人を身近く感じさせ、「私もそんな馬を習おうかしら……」と思う女性の方が一人でも出れば良い位の目的だったのだから。が、もう少しつけ加えておく方が読者に親切かも知れない。

伯爵夫人は嚴格であつた、長男がイタ・ローランという年上の女優と恋愛すると、家名を傷けるとして勘当してしまつた位である。(こういう氣象の烈しさは、召使達への態度をも推測させる。罰と



して鞭ったりすることもしたであろう。男装して戦線を慰問したという位勝気の女性だった。夫の死亡後遺産をめぐって夫の親族達から排斥されそうになった時弁護士を頼りに法廷で争った態度を長男が感心して書いているが、とにかく伯爵未亡人として堂々と門戸を張り、時には皇族とスキャンダルを起す位の活躍ぶりであった。

勘当された長男リヒャルトは、ギリシャ人だった祖父カレルギの姓を襲ってクーデンホーフエ・カレルギと名乗り、第一次大戦後「汎ヨーロッパ主義」を唱道して、一流の思想家となり、ノーベル平和賞の候補にもなった。この人の「人間対全対主義国家」という本を政治家の鳩山一郎氏が訳したものが「自由と人生」と題して刊行されているし、又「思想は世界を結ぶ」という自伝も大崎正二氏の訳で二冊になって出ている。前者の跋文として木村毅氏の青山光子に関する一文があり、後者の上巻にはリヒャルトの見た母の傍が詳細に画かれている。彼女に興味を抱かれた方は、これらについて見られるがよいであろう。彼女は昭和十六年に六十九で死んだ。

## 第七十五 手紙（その五）

慈悲深い御女主人様！（あゝ、かようにお呼び掛け致すことが何と私の心を喜ばせますことか）。恭順な奴隷たる私は、自分の教育がまだまだ不十分未成熟なことを承知し、そのことを謹んで認容致します。又御女主人様の仰せには絶対服従致すことを約束申し上げます。御女主人様が、私というものをば主人の命令にこれ従う奴隷に作り上げようといわれます場合、私がもう既に扱い易い柔軟な材料にまで達していることにお気付きになるでしょうが、それは私の（奴隷的）天分が、今迄長い間の奴隷的奉仕作業の結果、充分に発達さ

せられて来たためなのです。これは私には嬉しいことでございます。

慈悲深い支配者よ！ 奴隷は御女主人たる貴方様の前に土下座して跪き、どうぞ手綱と鞭とお握りになって、奴隷めをお仕込み下さいまし、とお願ひ致します。私は貴方様に無条件に盲目的服従をお誓いします。御命令を問い返すこともしません、まして反抗など思いもありません。恐れおののきながらも楽しい期待に満ちて、すらりとした白い奴隷の肉体をば、どうぞ貴方様の気まぐれのまゝになさって下さいと、厳しい御女主人の前に差出すのです。私は三十三才六ヶ月で、御あつらえ通りの年輩でございますが、経験においてはもっとずっと老熟しております。私の感情、思考、情念のすべては、既に私が長い間捜して漸く求め得た御女主人様の御傍に行っております。唇を開いて待ちこがれつつ私は近づいて来られる御女主人の身体の芳香をすすり込みます——御女主人が奴隷に対してその素晴らしい御膝を開かれます時、その鞭の下で唇を震わせながら、黄金色の神酒を貪り飲みたいと私は望むのです。

おお、慈悲深き支配者よ！ 一体私は自分の慾望のすべてを貴方様に一々説明すべきなのでしょう？ 私のあこがれている御女主人はどんな方ということをお申し上げるべきなのでしょう？——御自分の空想的な思いつきを奴隷の身上に試みられる方、御自分の淫欲の満足に役立つよう奴隷を御仕込みになる方、気の滅入る時のつれづれのまゝに奴隷に対して隷属の烙印を焼きつけるような方、……そんな方なのだと——素晴らしい御女主人様、私は知っています。世には乗馬専門女主人のあることを。彼女等は自分の馬である男に固く馬銜をはませ手綱をつけ、さて彼の堂々たる背中の中にひらりと飛び乗り、彼がその天分を最高限度に發揮するまで彼



を激励すべく、太腿に拍車を打込むのです。——その肉体もその心も、高貴な女支配者に捧げ渡してしまったこの奴隷たる男と、彼がただ四足になってのみその身近かにあることができる女支配者たる女性と、果してどちらがこの際より大きな快楽を享受してるのでしょうか？——

慈悲深い御女主人様！ 奴隷が恭しく一の提案を致しますのをお許し戴けましょうか？——私はガルテンハウスの二階に全く一人きりで住んでおります。何時か適当な日の午後——土曜日の三時過ぎ位——に、御女主人様に私の所へお越し戴けますでしょうか。ベルが二度鳴りました時にだけドアを開けますから、お入りになったら

すぐ左手にある私の部屋にお進み下さい。もし私が裸で長椅子の上に寝ているのがお望みでしたら、それも結構です。何でも御女主人様の御命令の通りに、遺漏なく準備致します。私は質問は致しません。口をききません。……御女主人様がもし奴隷の目に顔を見せたくないとお思いでしたら、部屋にお入りになる前に覆面をなさっても構いません。いずれにせよ、御女主人様は奴隷の許でお過しになる間ほんの少しでも煩わしい思いをなさることはありません。このことをお誓い致します。

その際奴隷がどんな恰好をしているのがお望みか、この試練の一刻をどんな風に過す御計画か、これらは一切御女主人様におまかせ致します。支配者の御定めになるところに奴隷は黙って服従します。——私には土曜日の午後が都合がよろしいのです、正確な時刻はどうぞ御女主人様の思召しで御定め下さいませ。——

慈悲深い御女主人様！ 私の宛名先は別に書留便でお知らせ致します。私は高貴な慈悲深い支配者の忠実な奴隷でございます。

追伸 (略)

出典はヒルシュフェルトで、珍らしいものではないが、馬になりたくてたまらぬ氣持の良く現れた文であるので、前項までとの関係から、ここに出してみた。

この男は相当マゾ遍歴を重ね、数多くの女主人に仕えて来たらしいことが自信ありげな書き方でよく分る。ウロラグニーの修行も六分したと見えて、神酒云々の条りは想像



ながら甚だ実感のある文章である。渴きに口を開いて近づいてくる女主人の体臭を吸うというのは、特に神酒カミサケに対する渴きとも読めるけれども、私はかつての体験などに徴して、一般的な水分缺乏による渴きとしてここを読んでいい。つまり、便器にされて部屋の一隅に繋縛されたまま水分を与えられぬので渴き切っている。そこへ漸やく女主人が放尿しに近づいてくる。待ちこがれた男はもう口を開いて期待に震える……そういう場面だと思う。

アマゾンについては一項を予定しているが、ここでは意味をとって乗馬専門の女主人と訳しておいた。この手紙を受けた職業的プロ女主人がこういうアマゾンの一人だったわけであるが、この種の女性と呼び名でそれと分るようになっていたらしい。シュスターの「苦痛と性欲」にはその例として「拍車のエッテ」*Sporen-Jette*という女があげてある。森本愛造氏や乗杉喜代子女史の紹介で本誌の読者は、「人体用馬具」というものが存在することは先刻御承知であろう。アマゾン達はこの馬具一式を具え、自分の部屋に招いたり自分から出張したりして、マゾヒスト達を乗り廻して、乗り賃を稼いでいたのである。(凡そ乗り賃を払うのでなく、乗り賃を貰うというのは古今東西彼女等に限るであろう。逆に見れば、その稼ぎで喰ってゆける位、人間馬達ヒトウマが沢山いたのである。これは一つには西欧建築がこういう秘密の場面を構成しやすいことに助成されたものであるが、根本的には、やはり、前項までに述べたような婦人乗馬の風俗があるからであろう。

この男がいかに人間馬として理想的な精神状態かということとは、タレントの語の用い方からも分る。天分と訳したが、要するに個人の持つ材能、技倆である。彼は拍車を加えられることによってのみ

最大限に發揮しうるものをタレントと考えて、それ以外の人間的な種々の精神的素質は全く無視している。完全に馬になり切っているのである。

土曜日の午後彼の部屋でどんなことが行われたか、は想像に難くないが、参考のため、ヒルシエフェルトがこの手紙と同時に書中に紹介している写真を挿入しておく。

訳文はかなり意識した箇所もある。追伸として短い詩が付してあるが、これは省略した。

### 読者ハガキ通信

○貴誌を読み初めてから、もう一年半になりますが、最近殊に女腹切に興味を抱き初め、先ず女腹切のものに目を通す始末です。これが少いと一寸がっかりします。特大号も昨日買い求め読みましたが、瀬川さん、川合さんの記事大変面白く読ませて頂きました。(東京都・内山生)

○十月号奇巧巻頭の畔亭さんの戯画「舞妓」の画は大いに我が意を得ました。また藤本仙治さんの「たのしきかな時代劇」の画と文ともに頗る共鳴しました。御両人共今後この種の取材と画をドシ／＼御寄稿下さるようお願いすると同時に期待しております。(和歌山、岸本青柳)

○貴誌の内容の充実ぶりには唯々感嘆するばかりです。飛田良二氏の「アイディア」は全く素晴らしい、殊に「乳母車」の(オムツを忘れぬように)と(オムツが汚れるとムズカルものです)という画には耐らなくなる程魅せられました。このような記事をドシ／＼発表下さるようお願い致します。(T・O生)

○私は奇巧を読みはじめてから半年になりますが表紙のデザインは嫌味がなく、持ち歩きにも体裁がよく助かります。口絵写真は充実しています。少年の同性愛、若くは少年と大人の少年と女との組合せが写真になった事はないように思います。例えば九月号九七頁、八八頁、八九頁特に一二三頁等の少年版を巻頭写真として掲載して頂けないでしょうか。(輝久生)

## 非 小 説

性

液

(十)

伊 藤 晴 雨

大日本雄弁会講談社発行「人肉の市」は重版又重版、現代の被縛文芸の先驅を為すもので植民地にある人肉市場の内面を描写したるもので、当時にあつては官能刺戟の強烈な読物として異常なショックを与えたもので、之れを採り上げて舞台上に上せて大衆を擲もうとした曾我廼家五九郎の頭脳は凡ならず、大物と見た。

舞台は一面の地下室で半裸体の女が鎖で手足を縛られて、客を取れといつて雇主から打たれ叩かれ、悲鳴を挙げて引摺り廻される場面を展開しない前に原本の面を其儘に借用に及んだ引幕がまず人の眼を驚かした。

高サ一五尺、横八間の観音劇場の舞台に一杯に張られた引幕には女の全裸体が赤地に白く浮き出して女の急所には一匹の大蜘蛛が毛だらけの足を拡げて喰ひ附いて居る。その蜘蛛の尻から引幕一杯に蜘蛛の巣が拡げられて居る。而して女の身体に黒く人肉の市と染め出されて居る丈けでも観客の心に既に暗い暗示を与えないでは置かない。

観音劇場の五九郎の部屋で五九郎は重ねた座蒲団の上に木魚の様な形で大胡座をかいいて座って居る。其前に座っているのはカフエーライオンに居た君子と称する石原美都夫であ

る。

「君のからだはえゝからだやな、一寸肌をぬいで見なはれ」

五九郎は美都男の裸体を眺め乍ら、

「君やったら女に見えまっしやる、君一つ逆さになれまっかいな」

「エゝ、なれますとも。逆立ちをしますの」  
「違ふ、縛られて逆さまになつて叩かれるんや」

「縛られて逆さまになりますの？」

「そうや、宙吊りにされて責められる女になつて貰いたいのや」

「そんな事訳はありませんや」

「左様か、ほならそれあんたの役や、狂言の永井君呼んでや」

五九郎は大きな鼻の穴を更に大きくして其頃流行した吸入器を鼻の穴へ押し込んだ。

「へエ御呼びでしたか」

近眼鏡をかけた狂言方の永井さんは「人肉の市」の台本を片手に這入つて来た。

「君、地下室の場やな、あこで君、女の子を責める処でやな逆吊しを見せようと思うのやが警察の方はどうやるかな」

「そうですね、余り慘酷にしなければならい、だらうとは思いますが」



「その処をやな、君の考えであんじよう書いてんか」

「ハア」

狂言方の永井君は太った石原の身体を眺め乍らそういった。

「アノ、私は逆さに吊されたって平気なんです、思い切って責められる芝居が大好きなんですから遠慮なく責める様にして下さっても構いませんよ」

「どやね、此人はんまの女に見えるやろ」

五九郎は美都夫の顔を見てニツコリ笑った。永井さんはくすぐったい様な顔をして又始まったと云わない斗りにクスリと笑った。

「先生、逆吊しはいゝんですが逆さに吊すといつもの頭(鬘)では間に合いませんがどう致しましょう」

「なんで間に合いませんのや」

「鬘が抜けてしまうので新規に合せて打たせなけりやあなるまいと思ひますが」

「さよか、ほしたらそういう新規にしていな」

「へエ承知しました」

永井狂言方は楽屋暖簾を潜って廊下へ出るとペロリと舌を出した。新規に鬘を打たせると髪屋から割返し来る事と五九郎が五人も

女優を玩んで居乍ら又此変生男子に何かするんだと思うと其偉大なる精力に驚かざるを得ないからである。

「ナアに新規にしくったって(有り)とこで何とかかなりまさあね、どうせ夜の光線でしょうし、縛って吊されて居る時間だって永くは無いでしよう、新規にするがものありませんや」

「だってオン大が新規にしろと」

「永井さん、君はまだ新まいの文芸部だね、そんな事を一々真に受けて居ちやあ芝居道の飯は食えるもんじやあねえや、ハッハッハ」

「そんなら」

「どうするものかね、生え際の古くなった奴を、台金を切りつめてオツかぶせりあ沢山だア」

「それで逆さまになって大丈夫かね」

「大丈夫だとも、台金の耳の処から元結をかけて腮を押えておけば抜ける様な事ありあしねえよ」

床山の淀与四郎はそういつて胸を叩いて見せた。

「其代りにオン大には内々だよ、新規に入つた石原にも内々、それで新規に打った事にしておいて山といこう。いゝかい、ナニ知れ

こはありあしねえよ」

「初日が明後日だよ、いゝかい」

「万事はこれだ」

床山の淀は胸をたゝいて見せた。此男は矢鱈に胸を叩く癖がある。

「廻りまアす」

「明後十一日午前十時開演、近時読書界を騒がしたる人肉の市七場いよく公開」という俗にフンドシ旗と云われている長広い旗が劇場の屋上から下げられ、裸体の美女が縛られて腰の辺に纏った衣が透き通って何物かを示唆する様な切り抜き看板が座の正面に掲げられた。象潟署から来た巡査が靴の儘舞台へ飛び上って来た。

「五九郎というのは君かね、署長がね、どうもあの看板はあまり刺戟が強すぎて面白くないというので撤回する様にといいんだ、甚だお気の毒ではあるがあれを出さない様にくれませんか」

「そらどもならん事でござすな、そやよって最初にお届けしてありまんやがな、もうあんた見物も木戸の前に一杯たかつて居りますサカイに今日一日丈け此儘にしておく様にあんたからあんじようして貰えまへんやろか」

「それは困るね、君の処だけそういう事を聞

き届けていると今度は富士館や三友館でも何をするか判らん、既に芝居や活動の看板は六尺以上のものは許可せんと云い渡してある筈じゃがね」

巡査は五九郎の顔を見乍ら何か意味有りげに云った。五九郎が狂言方の永井さんに一寸耳打ちをすると永井さんは心得たと斗りに仕切場の会計から何やら紙に包んだものを持って来て五九郎に渡すと五九郎は又これを巡査のズボンの隠しに押し込んだ。巡査は其儘黙って裏木戸から出て行ってしまった。

どうなる事かと思つて居た役者達は、表看板が無事に納まったと決ると揃つて稽古にかゝった。

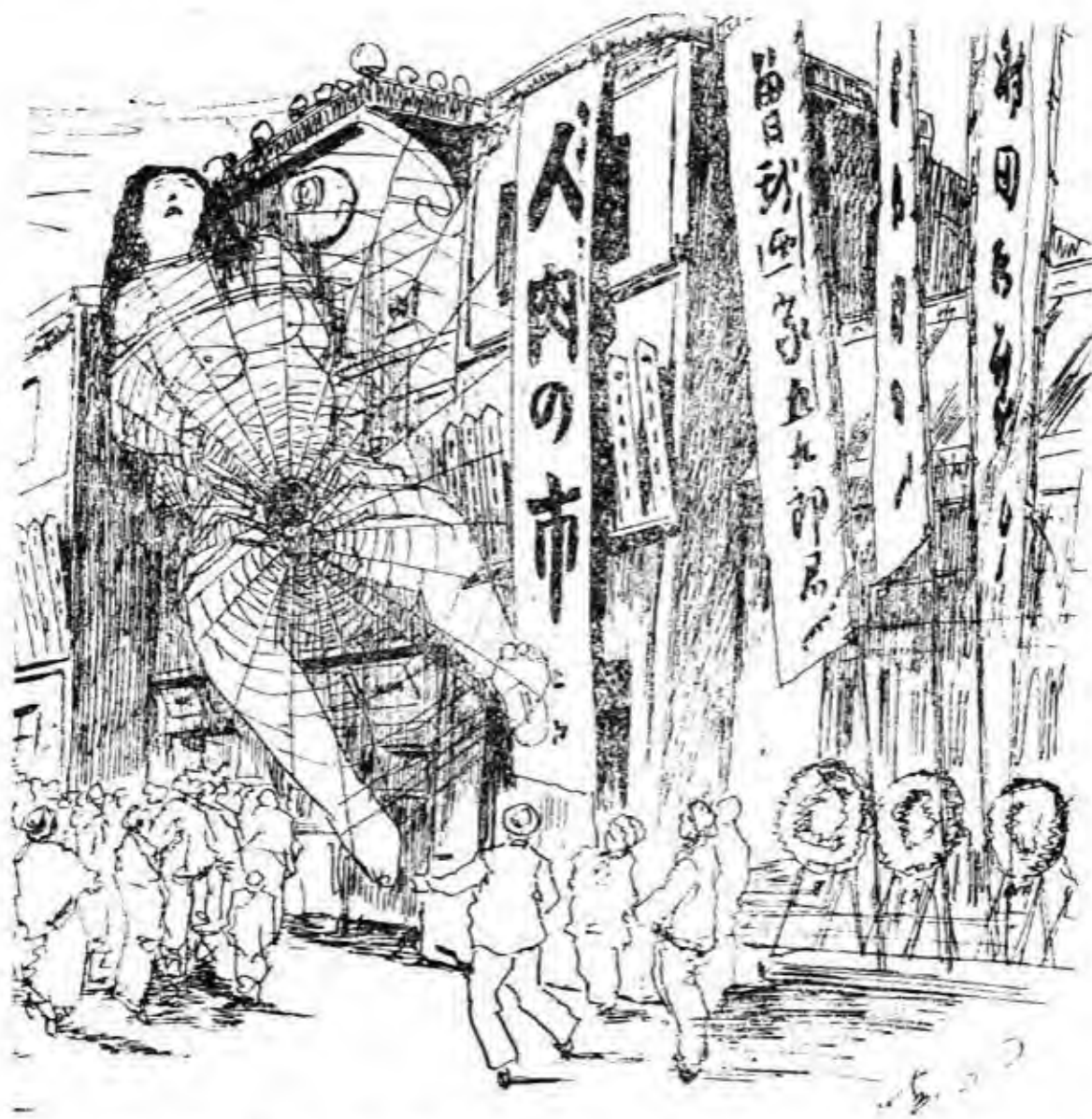
舞台には常式と専門的に云つてはいる畳表を長く継ぎ合せたものを二側程布いて中央に粗末な机を置き、狂言方の永井さんが脚本を鹿爪らしく持つて控えて居る。其隣りに五九郎が五、六人の女優に盛装させて我が世の

春と斗りに座つて居る。其左右に居流れて居るのは一座の俳優凡三〇余人、ズラリと居並んで本読みを初めるのか待っている。明後日初日というのに今日の本読みでは全くの急稽古ではあるが一日二回の浅草の興行では当り

前の事になつて居る。本読みが始まつた時に舞台装置をやった尾竹々波先生も這入つて来た。本読みを一通り了つて衣裳調べ、今日は特に一日休場したので夜は立稽古という事になった。

大体の組立てはフランスで演つて居るグランギニョール式で筋の運びよりも演出の方法と役者の技巧で見物を引きつけようとするので、舞台監督兼狂言方の永井さんの苦勞は並大抵では無い。

第一景は上海、四馬路の街頭で新聞には舞台へ自動車を出すと宣傳して実は切り出しの自動車を出して此上へ夜会帰りの盛装した令嬢を乗せて帰る途中、淫売窟の主人が部下の悪漢を連れて自動車を襲い、令嬢を誘拐するといふ筋で四馬路を遠く望んだ背景を中央に左右には支那建築の一部を見せ料理屋の招牌やら飯店の看板やらを切り出し、下手にはこれも支那風の家屋の横を見せた深夜の道具、木なしで落が聞くと仕出しの悪漢が二人出て来て英国の租界へ行つ





た日本の豪商某の令嬢をこれから引繼って行けば優美の金は望み次第だというような事をいって左右へ別れて這入ると上手から切り出しの自動車を押し出されて来た。自動車の上には新加入石原美都夫の扮する令嬢桜子が高島田のかつらに振袖の盛装で其父の工藤某という紳商と二人で乗って居て、急に車に故障が起ったといって運転手が下りてエンジンを検べる事などがあって、下手から顔を出した二人の悪漢と一寸合図をする事よろしく車に故障が出来たから別の車を見附けて来るというて這入ると下手でピストルの首が響いて車上の紳士に当って倒れる。二人の悪漢は驚く桜子に猿轡を嚙ませて麻縄で縛り上げて担いで行く処で第一幕は了っている。

「一寸待って呉れ給え」

と永井さんがいった。

「小返しだ」

、といふ乍ら悪漢が二人出て来た。

「ねえ君、折角自動車に乗って来てだね、此自動車を放りっぱなしにするのは変だぜ。機械の故障ってえのも嘘なんだから運転手も悪漢なんだ。其つもりで書いてあるんだ、それ



をいつもの手で女を担いで這入るナア智慧が無さ過ぎるぜ」

「そうですなあ、じゃあどうします」

「こうしてくれ給え、村田君の紳士が倒れる其死骸を二人で運んで下手へ這入る、少し間を置いてからだね、死骸を隠した心持ちで一寸間を持ってから二人が出て来て貰いたいんだ」

「すると其間に令嬢の方はどうしましょう」

「ゴーツト、それでは運転手の木村君、君は二人が這入った後で石原君の令嬢を縛ってくれ給え、それから二人とよろしくあって一同乗り込む、一寸やって見てくれ給え」

一同は永井さんの指揮に従って小返しをして演り直した。

「どうも面白くないね、これじゃあまるで旧派の芝居だ、舞台は上海なんだよ諸君、女は日本服を着て居るが他の諸君は皆ソナ洋服を

着て居るんだよ、モツト現代的な動きをして貰いたいんだがなあ、もう一度小返しだ」

何回かの小返しの結果どうにか納まった。

「此自動車をもう少し下手乗りにする事は出来ないかね、大道具屋が全然出て来ないよ、君上手から只スーツと出した丈けじゃ駄目だよ、下手迄行く様にしてくれなきやあ」

「最初からそういう註文じゃあなかったんで道具帖を見た時にコリヤ少してこいなって云ったんだ、大体こんな大きなものを切り出しにするのが間違ってるでさあ」

「いくら照明を暗くしたって切り出しと本物とは違いますからね、而したらいっそ本物を出したらいいじゃありませんか」

「困ったなあ、オン大どうしましょう」

「そやナア、此処が芝居の急所やさかいに、エライこっちゃなあア」

(つづく)

×

×

×

# 愛は被虐とともに



(a)  
私が入つか九つの頃。

一人で六区に遊びに行くことを、私は母から禁じられていた。私の家から六区までは十分もあれば行けたが、途中に大きな電卓通り

|   |     |   |   |   |
|---|-----|---|---|---|
| 夫 | 二   | 不 | 木 | 眞 |
| オ | ジ   | フ | キ | マ |
| 画 | 孝   | 万 | 四 |   |
|   | タカシ | マ | シ |   |



が二つもあって諸車の交通がはげしく、子供の足では危険だった。しかし、六区の魅力は大きかった。極彩色の映画の看板がゴテゴテと並び、劇場の剣劇の絵看板は幼ない眼にも刺激的だった。

にぎやかなサーカスのジンタ。天幕が風に吹かれてまくられると中の舞台が一部見えて、白いタイツを穿いた女が転がる大きな球の上で逆立ちをしていた。

浅草公園を六区に分けて、一区が観音様、二区を仁天門、三区が伝法院、四区が最近埋められたひょうたん池、五区が花屋敷で今の楽天地、そして六区を興行街。

映画という言葉が既にもう出来ていたにもかゝらず、私の幼い頃はまだカッドウと呼んで親しんでいた。私はチャンバラが好きだった。写真や看板をみるだけでも小さな胸がときめいた。母にくれて毎日でも遊びに行きたかったのだが、流石に一人では不安だった。

その私を物陰に呼んで、

「カッドウの看板みに行こうよ」

そっと誘惑するのが、隣りの家具屋の娘の美貴子だった。私の家は松乃園という茶舗。隣りの丸兼家具店とは親同志も仲良く交際している間だった。

私の親が美貴子の母親に向って、

「うちの京一とお宅の美貴ちゃんと年令が逆ならば、あと十年もたつと似合いの夫婦が出来るんだけどねえ……」

と、冗談まじりに云った時、私は子供心になんとも恥しい思いがした。美貴子は私より三つ年上だった。幼年時代の三つ年上ということは成年に達してからと違って、馬鹿にへだたりがある

ような気がする。まして早熟な美貴子は何を遊ぶにしても私に対して姉のように振舞った。時には赤ん坊扱いすることさえあった。

「弱虫！ 泣虫！ あたい京ちゃんのような泣虫きらいッ！」

近所の餓鬼大将に苛められてすぐ泣きべそをかく私を、美貴子はよく叱咤した。そして自分よりも年上の男の子に向って猛然と突っかかっていくのだった。

気の強い美貴子は、私の顔をみるとよく意地の悪い言葉を浴びせたり、私が寄って行こうとすると急にそしらぬ顔で無視して、私が泣き顔になるのを喜んでいるらしかった。気まぐれな性格で、誰も居ない所ではやさしく親切に自分の菓子などを分けてくれたりした。

「京ちゃん、カッドウの看板みに行こうよ。今日変ったばかりよ」  
そっと路次へ呼んで耳もとで囁やかれると、私は母に禁じられているのも忘れて、電車通りを二つ越え、興行街へと足を運ぶのであった。

或る時、私と美貴子は浅草で迷子になった。映画や芝居の看板だけでは物足らなくなって観音様へ行ってみようと話し合い、仁王門をくぐって周囲の参詣人の真似をして神妙に手を合わせて拝んだ。そこ迄はよかったが、その帰り、公園の中で方角がわからなくなってしまった。繁華街のはずれで、木立の間其処此処に人相見、手相見のテント張りの店が建っていた。

あたりは夕暮でもう薄暗く、私は急に心細くなって美貴子の手を握った。

「ミキちゃん、大丈夫かい？ 家に帰れるかい？」

私はもう泣き声を出していた。浅草は夜になると怖い人さらい

が出て、子供を遠い所へ連れて行くという話を母から聞いていた。

「大丈夫よ、京ちゃん。泣いたら承知しないから」

美貴子は氣丈に云うと、私の手をぐいと引っ張った。が、いくら歩いても見覚えのある通りにぶつからなかった。街にあかりがつきはじめ、空腹が心細さに拍車をかけて、私は立ち止まるとシクシク泣き出した。

「バカ！ なに泣くのよ。泣いたって家へ着かないわよ」

「だって、だっておなか空いたよ……」

「もう少し我慢しなよ。泣くと置いていくよ」

私は泣き止まなかった。すると、いきなり美貴子は私の頬を平手で打った。

「ビシヤリ！」私はびっくりして一瞬泣き止んだ。夕闇に美貴子の顔が白い鬼のように見えた。「フフフ……」と唇を曲げてわらったような気がした。

「泣いたら、またぶつよ」

美貴子は、私の二の腕をギュッとつねった。

「さ、ついておいで」

腕をつねったまま、美貴子は私をひいて歩き出した。つねられて引っ張られる腕は、ひどく痛かった。が、私は黙って唇を噛み、つねられたまま美貴子にひかれて歩いた。今度泣いて、本当に美貴子に置いて行かれたらと思うと、それが怖しかった。彼女の気性ならそれも嘘とは思えなかった。こゝで美貴子に置いて行かれたら……それを思うと幼ない私の胸に底なしの恐怖が湧いた。

痛さを耐えながら、私は疲れた足を必死に動かした。美貴子に引かれたまま……。今は美貴子だけが頼りだった。……思えばこの時

の事が、私の将来の運命を象徴していたのかも知れない。

b

私は小学校へ入った。

おとなしくて、弱気で悪戯など少しもせず、成績もよかった。教師には可愛がられたが、活潑な遊びの仲間に入らない私は、級友達に煙たがられ、あぐくに苛められた。

遊び時間でも、いつも校庭の片隅で雑誌を読んでいる静かな生徒だった。遊び廻っている他の生徒達の中に、ふと美貴子の姿を見つけてこちらに視線を投げるものがあつたが、すぐ眼をそらし、私が微笑みかけても知らぬ顔で向うへ離れて行くのだった。私は微笑みかけた顔をどうしようもなく、そのままこわばらせてしまう。

やがて美貴子は女学校へ進学した。女学生になると急に大人びて見え、私には美貴子がもう一人前の娘のように思えた。然し、学校から戻ればやはり隣り同志の遊び相手で、相変らずの気まゝに悩まされながらも、よく遊んだ。

自分の家同様の丸兼家具店の裏口から、

「ミキちゃん、居るかい？」

私は勝手に二階へ上って美貴子の部屋の戸を開ける。美貴子の部屋は、四畳半で、表通りの店から離れて一番奥の方にあり、やゝ暗かったが静かだった。

朱塗りの人形棚が美しく、大きな「道成寺」の舞踊人形が飾ってあった。姫鏡台の引き出しには、もう白粉だのクリームだの香水だのが這入っていて、そっと開けるといゝ匂いがした。

或る日、雑誌にも読み飽きたので、私は何時ものように美貴子の部屋をのぞいた。美貴子は服を着替えているところだった。シユミ



―ズの下に真白い二本の足が出ていた。

「あら、いやよ。今着替えているのだから。女の着替えしている時に、男はみるものじゃないわ」

「どうして？」

十才の私に、そんな事は判らない。

「どうしてって、バカねえ、この子」

美貴子はさげすむように云うと、服を着る手を休めて私の顔をみた。自分の年上を誇示したい彼女は、私のことを意識的に「この子」と呼んだ。

「女はね、男の人に肌をみせるものじゃないのよ」

「ふーん……」

下町の子供はみんな早熟だった。幼ない時から器量よしと賞められ乍ら育った美貴子は、その美貌をもう自覚していた。

「向うむいてよ」

命令口調で云った。

「いや」

私は何故か反抗した。私には珍らしい意固地な態度だった。その上、もっと美貴子のいやがるのがしてみたくなった。

ふと、美貴子のシユミーズの胸のところが小さく二つ盛り上っているのに気がついた。ひよいと手をのばして、それをつまんだ。

「きやあッ！」

美貴子が悲鳴をあげた。私はびっくりして手を引っこめた。

「スゴイのねえ、この子、びっくりしたア」

美貴子は眼をまるくして私をみた。思わぬ反響に私はもう



オドオドしていた。

「何するの、女に対して。最大のブジョクなのよ。あやまりなさいさ、あやまりなさい」

威猛高になって美貴子は私を小突いた。私は黙って俯向いていた。グイグイと私の胸を突いて彼女は詰め寄ってきた。私は壁際に押しつけられたが、それでも黙っていた。

「あやまれ！」

美貴子は足をからませて私を畳の上に倒した。私は人形のように無抵抗に転がった。仰向けに倒れた私の腹の上に、美貴子はすかさず馬乗りになった。細い指が私の咽喉にかゝると、シワシワとしめつけて来た。

「ウ、ウ、ウ……」

苦しくて、耐えていた涙が一度に私の頬を流れた。

「ご、ごめんよウ……」

泣きながら云った。私の泣き虫はまだなおって居なかった。美貴子はやっと私の腹の上から離れた。彼女もハアハア息をついて顔を紅潮させている。私は起き直って坐った。

「まだダメよ。ちゃんと手をついて謝りなさい」

立ったまゝ美貴子が云った。私は両手をついて、頭を下げた。

「ごめんなさい」頭を下げようとすると、彼女の足が私の首筋を踏まえた。私は額を畳に押しつけられた。

「まだ、まだよ。これから私の云うことを後から云うのよ」

私の頭を踏んだまゝ美貴子が云う。

「痛い、背中が曲って折れそうだよ」

私は悲鳴をあげた。

「我慢するのよ、いい？」

私はうなずくより仕方がなかった。

「京一は……」威厳をもたせて美貴子が云う。

「京一は……」私は苦しくて声も出ない。

「ダメダメ、もっとハッキリした声で」

「京一は」私はまた泣きたくなるのを耐えて復唱する。美貴子は得意に続ける。

「もう決して」

「……もう決して」

「美貴子さまに」

「ミキちゃんに」

「ダメ！ 美貴子さまに」

踏まえた足に力が入って、私の額はギューギュー畳に押しつけられた。

「美貴子さまに」

「悪戯をしません」

「悪戯をしません」

「それから……」

「それから」

「……」美貴子は少し考えるふうに首をかしげていたが、

「京一は」

「……京一は」

「美貴子さまの」

「美貴子さまの」

「召使いです」



「召使いです」

「下男です」

「下男です」

私はもう一刻も早くこの責苦から逃れたかった。

「なんでも云うことをききます」

「なんでも云うことをききます」

「よろしい」

やっと美貴子の足が、私の首から離れた。私は折れ曲った身体を起した。そして恨みをこめて彼女をみた。

「フフフ……」

と、美貴子の眼が悪戯そうにわらった。私もつられて笑おうとしたが、顔がこわばってわらえなかった。

「フフフ……ハハハ……」

美貴子は男の子のように、口をあけて笑い出した。

「京ちゃん、あんたって、本当におとなしいのね。あんた、こんなことされて口惜しくないの？ フフフ……ハハハ……」

今まで緊張して怖しい顔つきだった美貴子の、まるで人が変わったような笑い方だった。

c

昭和二十年三月九日夜、東京下町一帯を襲ったアメリカB二九の大編隊。悪魔の翼がひるがえる下に地獄の火は燃え続けた。観音様も焼けた。六区も焼けた。

老舗松乃園も焼けた。のみならず私の父も母も、逃げ遅れて焼け死んだ。

丸兼家具店も勿論焼けた。私が隅田公園まで逃げた時、美貴子の

一家と出遇った。美貴子はセーラー服に緑色の小さなトランクをさげ、髪を乱していた。すぐ又、バラバラに離れて逃げ、その後の消息はきかない。

私は母の姉にあたる叔母の家に寄宿することになった。十五才になつていた。

叔母の家は竜泉寺町にあった。浅草にも近かった。通っていた中学校も焼けてしまった。一度にすべてを失い。私は一時本気になって死ぬことを考えた。

叔母の夫、つまり私には叔父に当たる人が世渡りの達者な男で、戦後早速衣服の闇ブローカーで飛び廻り、急激なインフレの中に人並以上の生活を守っていた。おかげで私も程飢えを覚えずに戦後の混乱期を過すことができた。

私の身体に次第に大人らしい筋肉が付きはじめた。十八才、父母亡き後、不自由なく育てもらった恩を感じ、私は叔父の仕事を積極的に手伝うようになった。

私はまじめに、よく働いた、叔父にも叔母にも喜ばれ、感謝された。商売仲間にも評判はよかった。商売をする者にしては少しおとなし過ぎるのが欠点だと云われたが、私には一生を商人で暮す気はなかった。

叔父は店をもち、次第に手広く商売するようになっていた。

若い娘が眼につく年頃になると、私は美貴子を想った。今までにも何かにつけて美貴子を思い出しては、せつないような不思議な胸苦しさを覚えていたが、異性の美しさに心惹かれるようになってからは、私の胸の美貴子の面影は一層濃くなつていった。

丁度その頃、丸兼家具店一家は無事に青森の田舎に生活している

という噂が私の耳に入った。青森。遠過ぎる。美貴子もう年頃、結婚しているかも知れない。たとえ、まだ娘だったとしても、私にはどうにもならない相手ではあるが。

d

昭和二十五年の暮、商売仲間の忘年会があった。その二次会で私は叔父や仲間達五、六人に連れられ、浅草の「ギンネコ」というキヤバレーに足を運んだ。

無理に飲まされた酒で私はかなり酔っていた。私はアルコールは全くダメな体質だった。

「ギンネコ」に入ると、すぐ私は女に囲まれた。仲間の一人が私を指さして、

「おいおい、こいつはね、もうハタチにもなってまだ女を知らねえんだよ。しかも吉原の前に住んでいやがって。どうだい、可愛い顔をしているだろ、童貞の顔というのはこういう顔だ、ありがたく拝見しろ」

酔ったまぎれに大声で云った。私は恥しさに顔もあげられなかった。嬌声が乱れてみるみるうちに私の前に酒の入ったコップが並び女の一人は私の肩を抱きかゝえるようにして無理矢理私の口に酒を注いだ。

私は急に気持が悪くなり、吐気がしてきた。トイレットに駆けこむと顔を前に突き出した。突き出すのと咽喉元からこみ上げるのと同時だった。

やっとおさまってホツとすると、背中をさすってくれる女の手に気がついた。

「どうも済みません。もういいです。飲めないのに、無理に飲ま

れたものですから」

酔いも覚めた思いで、ふとその女の顔をみると見覚えがあった。細くやや吊り上った眉、切れ長の眼、形よく伶俐を思わせる鼻、男のようにひき締った唇。他の女給のように濃い化粧で顔を被っていないだったので、よけいに記憶を呼び戻し易かった。

「美貴ちゃん?……」

返事はなかったが、不審気に私の顔をみつめる女の眼に、やはり美貴子の面影があった。

「ぼく、京一だよ、松乃園の……」

「ああ……」

「しばらくだねえ……」

女の唇が開いた。

「京ちゃん……大きくなったのねえ……」

私を交えていた彼女の手に力が入った。

「京ちゃんだわ、ほんとうに大きくなったのねえ……」

同じようなことを云って、しげしげと私をみた。

「でも、こんな所で逢うなんて、あたし恥しいわ」

「うん、そりやア、そりやア色々事情はあるだろうから……」

「でも、あんた無事でよかったわ。あたし、松乃園さんの家は全滅ときいていたの」

話はいくらでもあったが、ここで出来るわけはなかった。再会を約してその夜は別れた。

思いもかけぬ遭遇の興奮に、私はその夜眠ることができなかった。

私は「ギンネコ」に繁々と通うようになった。ドアを押すと、もう顔みしりの女給が、



「ユメちゃん、彼氏来たわよ」

と、美貴子に声をかけた。美貴子は此処でメ子と呼ばれていた。

「彼氏だなんて云わないでよ。こんな坊やを。幼な馴染というだけよ」

そんな口調も幼い頃の美貴子と同じだった。

美貴子の一家は、身体一つで無事猛火の中をくぐりぬけて、縁故先の青森の小都市に落着いたが、東京へ復帰しそこなって未だに不本意の田舎暮らしをしていること。その田舎の生活に耐え切れなくなつて、美貴子一人東京へ飛び出てきた。しかし、戦後のきびしい世相の中に女一人なか／＼生きていくのは難かしく、結局このような所で働くようになってしまったこと。美貴子は私の問いに、ぼつぼつとそんな過去を語った。

「丸兼の娘ともあろうものが、しかも生れ育った土地で、こんな商売なんかしたくないんだけど、これも生きていく為には仕様ががないのよ」生活の不規則不健全からくる頹廢の薄わらいを浮かべながら、さびしげに美貴子は云った。

「でもいいよ美貴子さんなんか。ぼくなんか一人ぼっちなんだぜ」  
「そりやアそうね。でもね京ちゃん、こんな生活でもけっこう毎日面白いわ。あたしね、本当を云うとこんな商売好きなのよ。さ、湿っぽくなってきたから飲みなさいよ、グーツと……」



さびし気な表情をみせているかと思うと、次の瞬間もう明るい屈托のない顔で笑ったりする美貴子だった。(小さい時と変らないな)私は思った。泣いたり笑ったり怒ったり、そんな感情のはげしい変化も、美貴子の場合それが魅力となつてこのキヤバレーでの人気を

呼んでいるらしい。

その美貌は都会的に洗練されて、歩き方や一寸した動作にまで男の眼を惹いた。

「銀座の一流のキャバレーへ出しても立派なもんさ」

客がそんなことを云うのも私は聞いた。美貴子目当てでくる男達も多く、私が逢いに行っても話すどころか、同じテーブルに坐るひまもない程に売れっ子だった。といって私の乏しい小遣いでは無理に美貴子を自分のテーブルに呼ぶこともできない。

油ぎった中年の男に抱かれて笑いさぐめく美貴子の姿を、ネオンの光りもよく届かない片隅のテーブルで眺めていると、小学校の頃、私には眼もかけずに遊び戯れていたセーラー服の美貴子の姿が思い出される。

（こういう女なのだ。そのくせ決して私のことを忘れているわけではない。意識して知らぬ顔をしているのだ。私を虐めることが好きなのだ……）

いやらしい男の手がうごめいて執拗に美貴子を迫る。柄の悪い客が多かった。人工的な光線の中で、半裸の女を抱いて踊り狂う男達。嬌声、脂粉、紫煙がとび交う。デブブリ肥った卑猥な男の顔が、美貴子の顔に強引に掩い被さるのを、私は悲しい気持でみていた。

（可哀想な俺。愛慕する女性と他の男との痴態を、黙ってみていなければならぬ、意気地ない可哀想な俺……）

胸を押しつぶされるような悲しみの底に、被虐感があった。私のすぐ向いのテーブルに、男の膝に抱かれた美貴子が、いやらしく這いまわる男の指先になんの抵抗もなく酔い痴れている。そんな時、私は拷問にあっていような気がした。ムチはなく縛られているわ

けでもないのに、それ以上の苦痛があった。精神的な拷問であった。被虐感がひし／＼と胸にせまった。私は悲しみを耐えながら、いつかその被虐に酔っていた。

e

叔父甥とはいえ、金銭の自由は店員同様でしかない私に『ギンネコ』へ通う金が何時迄続く筈がなかった。しかし、一ヶ月美貴子の顔をみないと私は気が狂いそうだった。どんなに仕事忙しい時でも、美貴子の面影は私の脳裏に灼きついていった。叔父もうす／＼私のそんな気持を知っていた。

「京一、おとなしいお前のことだから大丈夫だとは思うが、用心しなよ。女という奴は魔物だからなア。ことにあの『ギンネコ』のユメ子というのは、お前より年上だって云うじやねえか。お前みたいな純情な男をだますのは、年上の女にとっちゃ、わけねえことだからな、気をつけなよ」

苦労人の叔父はそれ以上は云わなかったが、私は身にこたえて頭をさげた。が、美貴子を愛慕する情は反対にかきたてられるように燃えた。

私は遂に店の帳尻をゴマカすことを覚えた。その金で『ギンネコ』のいがい酒を飲み、相変らずの冷たい仕打ちの美貴子を眺めた。

店の出納を偽わる不正はズルズルと続いた。良心の苛責は、飲めない酒のにがさで消した。（もしかすると、俺はあの女の為に一生を台無しにしてしまうかも知れない。こんな悪事を犯してまで、俺はあの美貴子が慕わしいのだ……）

みじめな自分の将来の姿が酒の酔いの中に幻想されて、私は次第に自分で自分を責める自虐の快感に浸っていくのだった。



そして、当然のこととは云え、私の悪事は発覚した。叔父叔母の怒り。私は居たたまれなくなって叔父の家を飛び出した。が、行く当はなかった。

私は思いきって、というよりも吸われるように、かねて聞き知っていた美貴子の居る河童橋のアパートを訪ねた。私は此処より他に行く所はなかった。

「ぼく、行く所が無くなってしまったんだ。お願いします、泊めて下さい」

美貴子は呆れた顔で私をみていた。この願いの無理で無謀なことは知っている。私はすべてを美貴子の前に告白した。

たとえば、口をきいてくれなくとも美貴子のそばに居るだけで幸福だと云った。その為については店の金までも持ち出したと云った。

「お願いです。美貴子さん、僕と結婚してくれなどと大それたことは云いません。置いてくれるだけで結構です。何でもします。洗濯

でも、炊事でも、走り使いでも、なんでも……」

私は思い出した。幼ない頃、この美貴子の前に這いつくばって、私の首は足で踏まれ、恥かしい誓いをとなえさせられたことを。

——召使いになります——

——下男になります——

ああ、あの時の遊び半分の言葉を、成長した今日、このように真剣に、必死の思いで云わなければならないとは……。

「お願いします、置いて下さい……」

嗚咽がこみあげ、私は涙と共に頭をさげた。

「……いいわ。でも周囲がうるさいから弟ということにしてね」  
私は夢かと思った。意外にあっさりと美貴子が承知したのだ。張

りつめた気持が、ふいに崩れた。

「あ、ありがとう……」

私はポタポタと畳の上に涙をこぼした。

「でも誤解しないでね。たゞ此処へ置いてあげるといっただけよ。幼な友達の京ちゃん頼みじやねえ。まるきり他人というわけじやないし……」

声音は冷たかったが、私には天使のように響いた。

美貴子の部屋は三畳と六畳。その三畳は物置がわりに使っていた。

乱雑に詰め込んである品物を片付けると、一人ねるだけの余裕ができた。間のふすまを閉めると真暗になった。かび臭いような異様な匂いがした。しかし、この匂いの中には美貴子の体臭も混っているわけだ。そう思うと臭気もなつかしい。(ああ、俺はついに幸せをつかんだ。美貴子とふすま一枚の生活。あの美しい美貴子と。ああ……)

せまい真暗な三畳の部屋が、私には天国に思えた。夢ではないかと、私は暗闇の中で自分の足をつねってみるのである。

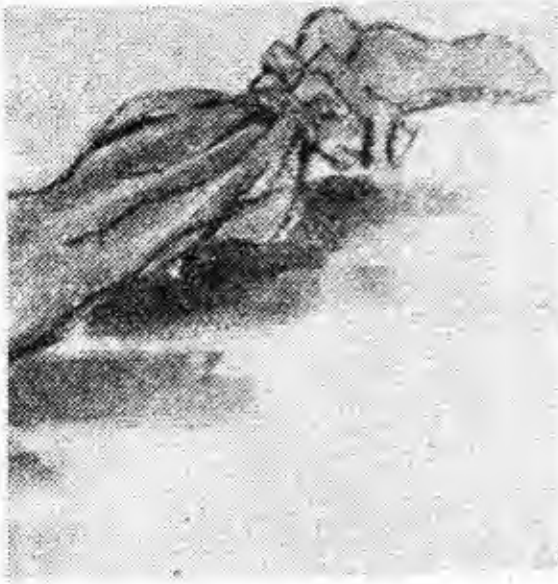
f

美貴子の気まぐれが、私の同居を許したのか。それとも、彼女は私を愛していたのだろうか。複雑微妙な女の心理は私には判らない。

美貴子は私に「姉さん」と呼ばせた。

「姉さん……」私は心からもったいないと思った。姉さんなどと呼べる間ではない。松乃園の一人息子の時代ならいざ知らず、今は犬猫同然の身ではないか。私は、姉さんなどと思いついた呼称を極力使わないように努めた。

美貴子は職業柄、眼を覚ますのが昼過ぎだった。それ以前に私が



眼を覚まして物音でもたてようものなら、きびしい叱声がとんだ。眼が覚めてからトーストと牛乳の食事。うまくパンを焼くのが大変だった。牛乳の沸かし加減にさえ罵声がとんだ。靴を磨いてアハートの玄関まで持っていく。揃えて置く。あとから美貴子が下りてくる。出勤。私は彼女の後姿を見えなくなるまで見送る。

美貴子の出掛けの後で私は朝飯をたべる。それから食時の後片付け、部屋の掃除、洗濯。

三畳の部屋を掃除して私は驚いた。異様な臭気があるのも当然、くしゃくしゃになった衣類が山と出てきた、汚れた靴下やシミーズのまるめたのや、ズロースが三つも四つも固まって出てきた。私はその汚れるものを山に積みあげて呆然とした。澱んでいた臭気が、かきまわされて立ちのぼるように部屋中に満ちた。

だが、この汚れた靴下、ハンカチ、ズロース、シユミーズ。みんな、みんな美貴子のものなのだ。みんな美貴子の肌につけていたものなのだ。この汚れはこのシミはみんな美貴子の肌から滲み出た分泌物なのだ。感激が私の背筋を走った。私はその汚れるものの山に身を投げた。靴下を顔に押しあてた。ズロースをひろげ、その真ん中のところに鼻と口を押しつけた。口をあけてそこを嚙んだ。唾液でベトベト濡れた。

それを又、吸った。犬が骨をしやぶるように、咽喉を鳴らしながら吸った。

(ああ、ああ、もう死んでもいい……) 愛しい、愛しい美貴子。今私はその美貴子の体臭の中に居る。誰にも妨げられない、誰にも見つかからない。私一人の幸福、私一人の美貴子……。

私は何時迄も美貴子のズロースを顔に押しあてていた。

# 8

私が美貴子の部屋で生活するようになってから一週間程たった。その夜更け、十二時を過ぎてから美貴子は一人の男に送られて帰ってきた。酔っている美貴子を男は肩にかつぐようにして部屋に這入ってきた。質のよい背広を着た四十年配の男だった。私が部屋に坐っているのを見ると、男はギョッとしたように見直した。

「誰だ君は、君はいったい誰だ」

私は美貴子に教えられた通り、悪びれず云った。

「弟です。この間田舎から出て来たのです」

美貴子がすぐあとを引き取って云った。

「大丈夫よ。この子は少し頭がおかしいんだから平気よ。女中代りに使っているの。そのうち田舎へ帰えしてしまおうわ」

男は疑わしそうな表情で私をみていたが、

「じゃ君、姉さんはすぐねるから、布団を敷いてくれ」

「はい」

私はすぐ立って布団を敷いた。枕を二つ出して並べた。一つはこの男の為に。私の胸にまた自虐のひそかな快感が生れた。

「お休みなさい。ぼく隣りの部屋でねます。水はその水さしに入っています」





私は男に向って云った。男は呆れたように私の顔をみた。  
「へええ。バカじゃないね、君の弟さんは……。リコウ過ぎて気味  
が悪いよ。ワッハ、ハ、ハ」

男は満足気にわらい乍ら、背広を脱いだ。

私は一礼すると三畳の部屋に引き退った。暗くせまい部屋。  
私は横になると眼をつぶった。

隣室では二人共すぐ布団に入る気配がした。低い話声が何時  
迄も続いた。「ウフフフ」という忍び笑いが洩れる。やがてそ  
れも静まった。私は暗闇の中で眼を開いた。胸に手をあてると  
ドキンドキンと血が鳴っていた。つらかった。苦しかった。こ  
れ程の苦しみが又とあるうか。私の頭の中にあらゆる妄想が入  
り乱れた。嫉妬、そんな生やさしい言葉で表現できる感情では  
ない。地獄の業火に焼かれるとは、このことを云うのか。

ウソのようにとめどなく涙が溢れた。頬を流れ、耳を伝い、  
枕を濡らした。できれば声をあげたかった。幼ない時のように  
声をあげて泣きたかった。

……しかし、泣いて苦しさが増えるということ自体、そ  
の苦しみにはまだ余裕があるのだ。泣いて甘えられる余裕があ  
るのだ。そうだ、私はこの悲しみの中に被虐の快感を、ひそか  
に、自分でも無意識のうちに愉しんでいたのかも知れないのだ。

h

しかし、私にとって甘美な日が続いた。夢のようだった。こ  
の生活を破壊されることを私は怖れた。美貴子にとっても私が  
来たら随分便利になったことだろう。私は奴隷のように彼女  
につかえた。彼女の眼の色でその命令を読みわけた。犬が主人  
の顔色をうかがって機嫌をとるように、私も気まぐれで嬌慢な彼女  
の為に重宝な道具になった。それが嬉しくたのしかった。このま  
ゝの生活が一生続いたらどんなに幸せなことだろう。私はひたすらに  
それを願った。彼女が他の男と結婚しても、私は恥を忘れ犬のよう

に従っていくだろう。

そんな私に、或る日美貴子は私にとって死の宣告に等しい言葉を吐いた。

「この間此処へ泊った男の人ね、あの人があたしとどんな関係にあるか、あんただって察しがつくだろうけど、あの人が矢張りあんたが居ては嫌だっていうのよ。いくら弟だって隣りに居られちゃ、安心してナニも出来ないって云うのよ。悪いけどあんた此処を出て行ってくれない」

私は息がつまる程驚いた。

「そ、そんな……」

「あたし、今あの人とマズくなったら、ちょっと困るのよ……」

私はあわててさえぎった。

「そんなこと。おねがいです、そんなこと云わないで下さい」

私は懸命だった。この危機を逃れる策を必死になって考えた。私の脳裏に一つの案が電光のようにひらめいた。一寸逃れにもこの場を乗り越えねばならない。

「ぼくが姿をみせなければいいのでしょうか？ ぼくが居ないように見せればいいのでしょうか？ あの男の人が来る時には、ぼくは三畳にかくれたまま絶対に出ません……」

美貴子はセセラ笑った。

「ダメよ。そんなこと出来やしないわよ。手足がある限り動かずに居られるものか。ガタリとでも音たてたら終りよ。そんなせまい部屋に生身の人間が動かずに居られるのですか。もし見つかったらそれこそ大変よ。それでなくても疑われているのに。あの人って、あんたが寝返り一つうっても神経たてているのよ」

「縛って下さい」

「え？」

「ぼくの手も足も、ギリギリに縛って転がして、その上に布団をかけたら、もう荷物も同然です。居るんだか居ないんだかわかりやしません」

「フウン……」

美貴子の眼が、キラリと光った。

「ちょっと面白いわね」

「そうして下さい。……貴女のためなら、貴女から離れることを思ったら、ぼくはどんな事をされても平気です……」

「やってみようかしら。あたし、そういうスリル大好き」

「お願いです。この通りです」

私は手をつくと、蛙のように畳に頭をつけた。

そして、その日はすぐに来た。

美貴子が出勤する前から、私は縛られて三畳に押し込められる手筈だった。いろいろ考えた末、それが一番確実な方法だった。私は買って来た細引の束を美貴子に渡した。

「あんたもバカねえ。まったく呆れちゃうわ。今から縛られたんじや丁度一昼夜よ」

「かまいません」

私は彼女に背を向けて、両腕を後ろに廻した。

「きつく縛って下さい」

「でもどうやって縛ったらいいか、あたしには判らないわ」

「しっかり強く巻いて下さい、大丈夫です」

美貴子の、やわらかくしなやかな手指が私の手に触れ、縄の一端



が遂に私の手首にからんだ。一瞬、私の背筋に電光のようなものが走った。白状しよう。私ははじめから美貴子に縛られたかったのだ。その機会を狙っていたのだ。それが私の、長い間のひたすら願っていたのだ。ああ、それが今実現する……。私は感動にふるえた。感動の余り、肩が小刻みにふるえた。

「フフフ……あんたふるえているの。怖いね。面白いわ。あたしこういうこと好きよ」

美貴子は不馴れな手つきで、しかし着々と私を縛っていった。美貴子はこの作業が楽しくてたまらぬように頬を赤くして続けた。美貴子の髪が私の顔に触れる。美貴子の吐く息が、私の鼻口に甘く吹きかゝる。ああ、何年ぶり……。このように身近く、このように熱心に、彼女が私の身体に触れるのは。

意外に強い力だった。ひしひしと私の肌に縄目が喰いこんだ。力をこめて縄を引く時、美貴子の眼に加虐の興奮があった。

「今度は足ね」

「お願いします」私は自分から寝転がって両足を揃えた。両足首がくぐられた。芋虫のような姿で私は畳の上に転がった。

「フフフ、いいさまね。もう絶対無抵抗ね。なにか悪戯してみたくなったわ」

美貴子は足をあげて私の顔を踏んだ。左右に揺って踏みにじった。

「面白いわ、一寸いい気持ちだわ」

美貴子は私の顔の前にしやがむと、一休みといったように煙草に火をつけた。美貴子のスカートが割れて、白いブローズと薄桃色の肉づきのいい太股がみえた。

「ピシヤリ！」私の頬が鳴った。美貴子が平手で打ったのだ。

「のぞいているのね、いやらしい」

「ピシヤリ！ ピシヤリ！」と私の頬が鳴った。

「フン、松乃園の若旦那も、こうなっちゃおしまいね」

蹴とばされた。殴られた。痛い、たしかに痛い。が、にじみ出るようなこの快感も、たしかに私の身内をかけめぐるのだ。

「隣の部屋まで引きずっていくわよ」

腕を縛った縄に手をかけると、彼女は一気にズズズーと私を三畳へ運び入れた。私は身をよじりながら片隅へ這った。

「美貴子さん、口もきけないように、猿ぐつわをして下さい」私の最後の念願。

「そこまでは気がつかなかったわ。いいわ、やってあげるわ」

美貴子は手拭で私の口を縛った。遂に私は一個の物体と化した。私の上に布団が被せられ、その周囲に雑多な品物がバリケードのように置かれた。

「なる程ね、こうすれば全然わからないわ。おまけに暗いし、気配さえ無いわ。おシヤカ様でも気がつくめえって所ね。……じゃ、あたしはもう出掛けるわよ」

ドアには鍵が掛り、美貴子の足音が遠退いた。さあ、これから長い忍耐の時間がはじまる。自ら求めた、長い長い苦しみの時間が。

一時間、二時間、肉体の苦痛が増してくると、私はひたすら美貴子の姿を幻に追った。幼ない頃の、小学生の頃の、女学生の頃の、一緒に遊び、苛められ、泣かされた数々の思い出。その一つ一つの場面が、眼ぶたに甦える。そしてあの『ギンネコ』での孔雀のような艶姿。外国女優のように美しくのびきった四肢。奔放で嬌慢なクインに慕い寄る男達。美貴子を思えば苦痛も喜びに変わっていった。

# 鉾山の少年思春期録

## 二 木

## 良 雄

### 一

本州の西部、周防灘に面した小さな炭坑町  
O市は、炭坑だけで持っているような街だっ  
た。全市至る処、大小の炭坑で埋っている。

このO市の外れ、蛇王山の麓にあるA小学校  
は、ほとんど全学童が炭坑関係者の子弟で占  
められていて、教員も炭坑出身者が多い。

六年一組の俵雄吉はS炭坑の納屋頭の子だ  
った。学業は余り香しい方ではなかったが、  
体格が良いのと、常に数十名の輩下を擁して  
山のボス的存在となっている父親の顔とで、  
鉾山の子供達の間では相当な顔役だった。こ

の鉾夫組の子供に対して役員組の子供達があ  
り、常に反目していた。これは、俵雄吉の少  
年期の物語りである。

### 二

最上級に進級した雄吉は日頃、目の上のこ  
ぶだった役員組の山本達夫が、U市の中学に  
入ったので、最早恐れるものはなかった。学  
校から帰ると、父親は今日も輩下の鉾夫達を  
集めて酒を飲んでいた。雄吉はカバンを上り  
框へ投げ上げておいて、鈴木を進太郎の処へ  
行った。学校の帰りに気になる事を聞いたか  
らであった。鈴木は、雄吉の父親の右

手と頼む若衆頭だった。その関係で子供同志  
も仲が良かった。

「進ちゃん、帰ったかい？」

表から声をかけると、

「あゝ、俵の坊ちゃんですかい、進は帰りま  
したけど」

進太郎の母親は雄吉にそう答えると、奥へ  
向って、

「進や、進や、俵の坊ちゃんだよ」

と呼びかけておいて、雄吉に、

「進は誰と喧嘩したんですか、大きなこぶを  
作って、いくら聞いても言いませんがな」

「俺も知らねえんだよ、帰り道に三浦の三ち



やんが、鈴木と近松がやってると聞いたから来てみたんだ」

雄吉が言う、鈴木は母親は、

「まあ、まあ、事務所の近松の坊ちゃんでしたかい」と唇をかみ、

「相手が近松の坊ちゃんだったら、仕方がありません」と呟いた。

其処へ出て来た進太郎の顔は見事だった。

突き出たおでこの上に、大きなこぶが二ツ三ツ、その一つは切れて血がにじんで居り、目の下が青くふくれ、唇は紫色に腫れ上って居る。その化物のみたいな顔を、今にも泣き出しそうに歪めて出て来たので、

「ワッ、なんだ、その顔はお前負けたのか」

雄吉がびくくりして言うのに、

「雄ちゃん、俺口惜しいよ、近松の奴、木剣で殴りやがった」

進太郎はポロ／＼涙をこぼした。

「よしッ、俺が仇をとってやる」

雄吉は自分の家の簞笥の上にほり上げてあった、此の辺の警察で使っている朱房の十手を持ち出すと、鉾夫の納屋街を飛び出し、丘の上にある、役員の社宅街に向って走り出した。だが敵もさるもの、かくあるべしと悟っていたのか、四、五人の輩下の少年を引き連

れ、木剣をかざして、役員社宅街の前の松原に布陣していたのだった。雄吉は朱房のついた十手をふり上げ、

「やい近松、出る、鈴木をよくも殴ったな」

「何をッ、鉾夫の子のくせに役員の子供に手向いする気か、生意気だぞ」

そう言うなり近松は松林から躍り出た。何しろ公休毎に酒を飲んで、切った張ったの血生臭い風の吹く炭坑街に育った子供達。鉾夫の子も、役員の子供も、威勢がよかった。たちまち砂をけ散らして乱闘となった。入り乱れて雄吉と喚声とが交錯し、それに悲鳴と泣声がコーラスした。ようやく近松を捕え、子分の少年達を追い散らした時は、雄吉は背中と肩に木剣を受けて、身の屈伸が出来ず棒立の儘であり、竹切れで勇敢に戦った進太郎は、更に手首や首筋に血ぶくれをつくっていた。有りあわせの荒縄で、泣いている近松をぐる／＼巻きにして、雄吉は十手の先で背をついた。

### 三

福勝寺の裏山だった。此処なら誰も来ない。「これから、ゆっくりいじめてやるから、そう思え」

雄吉が言う、進太郎も、

「お前の親父は事務所で威張ってやがる、髭を生やして生意気だ。今日はお父に変わって仇をとってやるぞ」

とおどした。近松を杉の木に縛りつけ、二人は平手で顔を殴りはじめた。「ビシッ、ビシッ」音は裏山中にひびいた。近松は更に声を大きくして泣きだした。

「泣くなッ、泣くとひどいぞ」

次にシャツ迄ぬがせて、手首を杉の木の枝から吊り下げ、雄吉が十手で、進太郎は近松の木剣で、背中や腰や胸等を叩きすえたのだ。鉾夫の子だけにやる事が荒っぽい。氣息奄々として、泣き声も出せないでいる近松を再び地上にころがし、

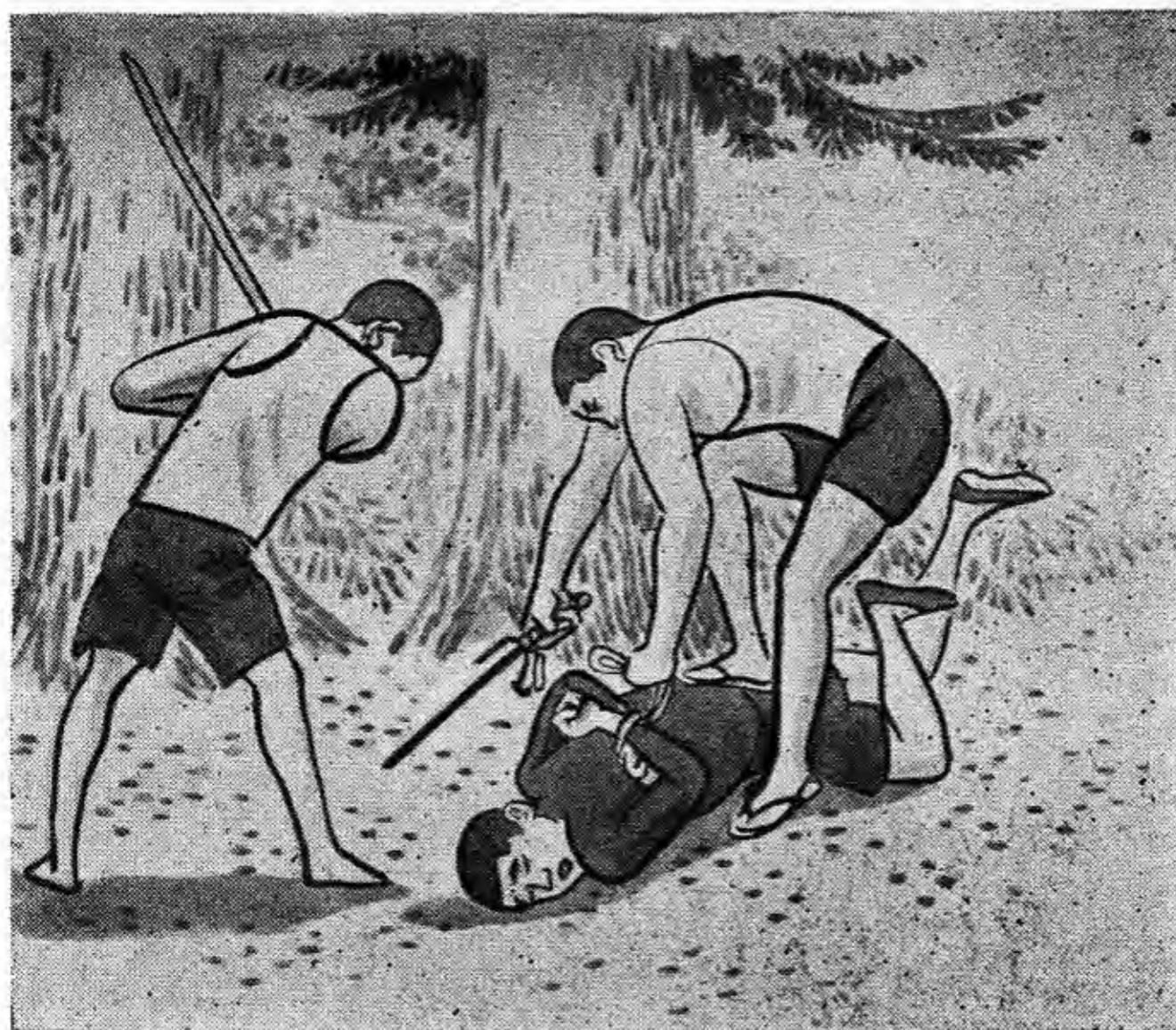
「顔を踏んでやれ」

雄吉は下駄で、進太郎は素足で、更／＼近松の顔を跡がつく程踏みつけるのだった。そして近松の顔と云わず、胸と云わず、唾を吐きかけた上、頭上から二人の少年は小便を引掛けてしまった。縄を解いてやった雄吉と進太郎は、至極気嫌良く、

「此処はお国の何百里、離れて遠き……」と軍歌を唄い乍ら帰ったが、さあ後が大変である。

四

その晩のうちに委細を知った近松の父親が



カン／＼になり、若い労務係や棒頭等を集めていると聞いた、雄吉と進太郎の父親は酒の酔もさめ果て、役員社宅に駆けつけて、相当

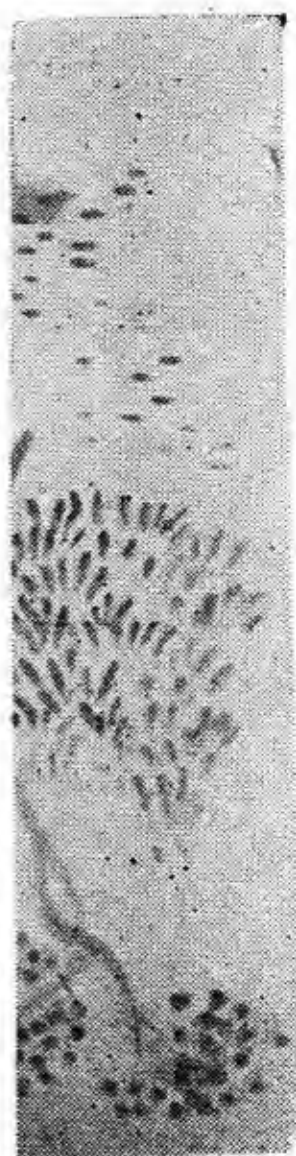
な音物をつんで詫を入れて、頭取にも仲介を頼むなどして、夜おそく親達は帰って来た。すでに日本刀や、ツルハシ、村田銃迄持出して集っていた鉾夫達の前で「こらっ、雄吉っ、進っ、貴様達、人もあろうに、役員の子を殴るとはなんだっもし怪我でもしたらどうするんじゃっ、何んと申し訳するかっ、馬鹿タレメ」

二人は、さすがに蒼くなつて声もない此の親達からみるとあの程度の怪我は怪我のうちに入らぬらしい。寝る時、父親は雄吉に、  
「雄吉や、お父うさんはな、今日叱ったがな本当は怒ってなぞおらんぞ、お前仲々強いらしいな、生意気な奴はどし／＼殴っちゃれ」  
慰める様に言ってくれた。雄吉はにっこりと、  
「進ちゃんが可哀想じやったんだよ、お父ちゃん」  
「うん、鈴木のお父さんも喜んでいたぞ、雄吉は親父の気性を受継いでいるってのう。えゝ組長になれよ」  
父親は雄吉を抱いて寝てくれた。母のない雄吉は大概の夜は一人で寝る習慣だったが、父親は何か雄吉が不憫だと思ふ事があるときはよく抱いて寝てくれるのだった。

五

それから二、三日した日曜日、雄吉は進太郎と、三浦の三千男をつれて昼から校庭に遊びに行った。校庭での遊びにあきて進太郎が帰った後、雄吉は三千男を誘って蛇王山に行った。罫鉢形のこの山は、頂上迄どの道も三十度位の傾斜をもっているの、大人はめったに来ない処だ。それだけに子供達の天国だった。





とお尻をゆさぶっ

た。三千男は雄吉の

お尻に鼻口をふさが

れ、夢中であばれは

じめた。膝で手を踏

と脊骨をふって、徳田を殴る真似をしてみ  
せた。

## 六

あくる日、学校へ行くと午前中、徳田の情  
勢をうかがった後、果し状を送った。場所は  
福勝寺の裏山の杉林の中で、時間は放課後す  
ぐ米いと言う事を下手な字で書いて、徳田の  
居る三組男女組の千代に、誰にも内証だぞと  
念を押して持たせてやったのだった。

勝負の結果に対する判断が、雄吉には未だ  
つかなかったし、結果の如何によっては重大  
な事になるので、進太郎にも三千男にも知ら  
れたくなかった。井上の千代は、雄吉の父親  
の部下の探炭夫の子で、雄吉に対して臣節を  
とる一人なのである。千代のもたらした返事  
は、承知と言う意味の事が書いてあった。彼  
も、何時かは一組の雄吉と雌雄を決する時が  
来ると、覚悟していたのだろう。

「俵、なんで、あんな手紙をくれたんじや」  
福勝寺の裏山で雄吉をみると、徳田文吉は  
すぐそう言った。

「お前いが余り三千男をいじめるからじや」  
雄吉はぶるっと身ぶるいした、武者ぶるい  
だ、闘志が満々としてわいた。

「やあ、軍艦だ、軍艦だあい」

三千男が叫んだ。頂上について、寒い位の  
風に汗をさらしていた雄吉は、眼下の海を見  
下しながら、

「違わあい、汽船だい」

「軍艦じやい、父ちゃんに教えてもらたぞ」

「軍艦であるもんか、大砲がないじやない  
か」

「あるよう」

「ないぞお」

「ようし」

三千男は雄吉に組みついて来た。

「来たな、負けるなよ」

犬ころの様に草の中を転げて、やがて雄吉  
は三千男を押し伏せて、

「やい、降参か」

「なあに、降参などするかい」

「ようし、こうしちやる」

雄吉は三千男の顔の上に馬乗りになって、  
「やい、どうじやい」

み押え、バタ／＼する足をつかんで、三千男

の行動を押え乍ら、雄吉は自分の尻の下で動

いている三千男の顔を想像しているうちに、

ぞっとするような異様な感覚が身内をめぐり

雄吉は思わず身ぶるいをした。

「降参／＼／＼」

三千男は重圧に絶えかねて手を叩いた。

「乾分になれ」

「うん」顔をみ乍ら起きあがると三千男は、

「雄ちゃん、乾分になるから、徳田の奴、泣

かしちゃってくれい」

三千男は甘ったれた。

「泣かしちやる」

雄吉は親分らしく胸を張って、

「徳田の奴、学校でいつも俺を泣かしやがる

んだ、彼奴柔道を知つちよるから、俺いつも

負けるんや」

と三千男の訴えるのに、

「あんな奴、なんでもない、見ちよれ、明日  
学校で殴っちゃるから」

「三浦の奴は、いつも俺の組の女<sup>おな</sup>ごをいじめるからじゃ、お前いは三浦の味方か」

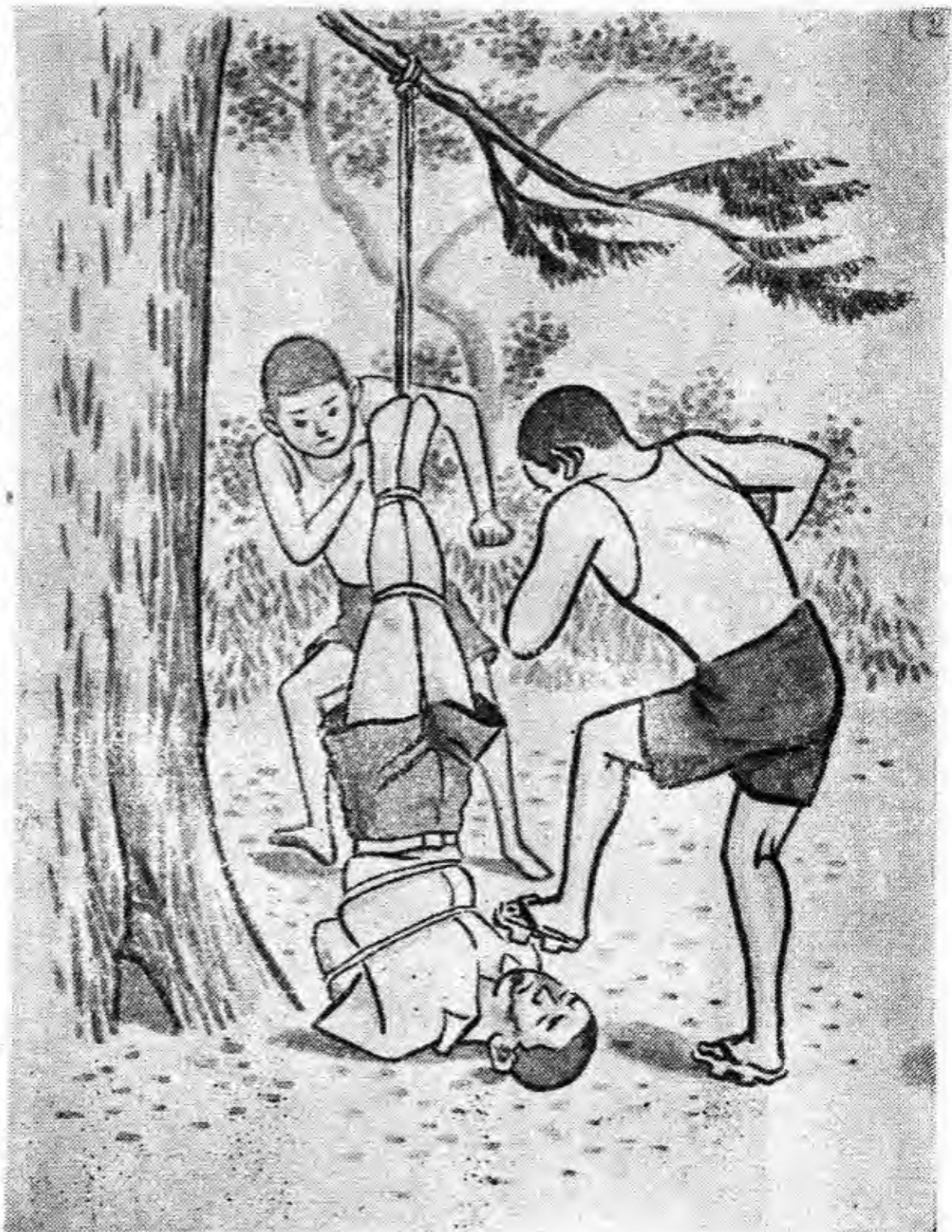
徳田の簡潔な言葉に雄吉はぐっと詰って三千男が女の子をよくいじめるのも知っていたし、女のような顔をした三千男を、雄吉の仲間の少年達さえ（女ごくされ）と呼んで、軽蔑しているからである。

「なんでもええ、とにかく三浦を泣かさんと言え」

「いやだ、三浦の味方をするんなら、お前も泣かすぞ」

徳田の顔が紅潮して来た。両雄はシリッと相寄った。最早問答無用、いきなり平手打をとばした雄吉は、見事に外されてよろめき、綺麗な腰車でとばされた。土をつかみ乍ら、雄吉は恥辱感で目がくらめき、「ちいっ」土を徳田の顔にたきつけ、ひるむところをはね起きざまに激しい頭突をくれた。徳田はゆっくり傾いて、仰向に棒をたおす様にひっくり返って、失神したらしく暫くは動かなかった。雄吉は下駄を片手に息をととのえ乍ら徳田の起き上るのを待った。山の子供はこんな場合、攻撃しないのが常識だった。

やがて勝負はすんで、「ころせっ」鼻血で



満面を朱に染めて絶叫する徳田を、彼の帯でこの前、近松を縛りつけた老杉の高い下枝に苦心して逆吊りにして了った。徳田の顔をさんとく踏みつけた時、足の裏についた血を草にこし／＼すりつけ乍ら、雄吉は、

「やい、これからあ、生意氣をするな、乾分になるなら可愛いがっちゃんぞ」

「ちっ」  
徳田は目尻からこめかみに涙を流し乍ら、低く嗚咽していた。一かどの雄として自任し



ている徳田としては、この敗亡は死にも勝る屈辱だったろう。

## 七

進太郎の家へ行ってこの話をしていると、縁側に持出した古い小机で、鉾夫の勘定伝票をきっていた鈴木が父親が顔をあげて、

「木に吊したと、さかきにかや」と聞いて、

「ウン、面白かったど」

雄吉が答えるのに、あわてゝ地下足袋に足をつゝこみ乍ら、

「死んでしまふぞ、早く降さんか」

そして、「何処じや」と場所を聞いて駆け出して行った。心配になる雄吉と進太郎が再び来た時は、もう徳田は居らず、福勝寺の和尚と鈴木が父親が何か話しているだけだった。和尚は雄吉を見ると、

「こら、俵のガキ、何んと言う事をするのじや、ワシが来るのがおそかったら、あの子は死んでいるぞい。みい、此の血を」

と杉の木の下を示した。雄吉が立去る時はまだなかった血のかたまりが、絵の具をといった様な綺麗な紅の色がふくれた感じで、三、四ヶ所にあった。

雄吉は父親に知られる事を恐れた。それで今日は、父親が入坑する三時頃迄家に帰らなかった。ちなみに納屋頭である雄吉の父親は一日に一度、午前か午後に入坑内見廻りの為、入坑するキマリだった。

## 八

井上の千代がいつの間にか来ていて、雄吉の少年クラブを読んでいた。千代は腹這いになって、咽喉のあたりで「クツクツ」と笑い乍ら見ている。色白でどちらかと言うと派手な顔立の千代を雄吉は好きだった。幼い時、雄吉とでなければ風呂に入らないと駄々をこねて、雄吉を困らした千代。見ているうちに雄吉は青白い首筋にお茶せん止でまどめられた長い髪を握ってみたい衝動にかられた。千代のくせのない髪はつやゝかに光っていた。母親や姉妹を持たない雄吉は、女の子のそうしたものに郷愁を感じるのだった。

「黙って人の本を読んじや、イケンじやないか」

言い乍ら、千代の背中に馬乗りになった。「でも、誰も居らんじやったから、読んでもえゝじやろう」

と、千代が笑い乍ら見上げるのに、

「見せられんよ」

素早く本をとり上げた。

「見せてエ」

千代は足をバタ／＼させた。

「見せん」

千代は本を奪い取ろうと伸び上って来たので、雄吉は髪を掴みたいと思ったが、何かやましい気がして、どうしても目の前の髪を握る事が出来なかった。しばらく争って、

「今度黙って読んだら、ひどいぞ」

本を投げ渡した。

雄吉は、前の月の或る日の事を思い出していた。事務所前の広場で千代を加えた皆で、「子とろお」をして遊んだとき、鬼になった鈴木が、捕えた千代の髪をつかんで連れて行った時、雄吉は息がとまる程の衝撃を覚えた。妬ましさで体中を駆けめぐった。千代は「キヤッキヤツ」笑い乍ら、髪を引張られて行ったが、雄吉は千代の髪を握ってみたいと思う様になったのは、それからだった。その時、鈴木と三浦がやって来て、

「雄ちゃん、鬼がいるぞ」

と三千男が言った。

「兎が、本当かい、嘘じやろう」

「嘘じやないぞ、六年二組の奴等が追ってる

ぞい」

鈴木も、

「早よう行かんと二組の奴等に取りられるぞ、嘘だったら三っちゃんを殴っちやろうや」

鈴木も三浦から聞いて、一緒に来たものらしかった。

「ようし」

雄吉は小躍りした。もう千代の事など念頭になかった。三人はかねて用意しておいた、先をササラのように割った三尺位の竹と麻縄、それに肥後守を持ってとび出した。場所は御台場。一気に駆け登ると、先ず二組の連中を偵察した。いない。然し御台場から蛇王山に続く棧道のあたりで子供の声がする。



「二組の奴等はあっちや」

進太郎が叫んだ。雄吉は、

「よし、俺達は狐穴の方を探してみよう」

麻縄の一方を、わきにして切つて来た六尺位の女竹の先に取付け、いつでも引掛けられる様にして、三人は三方から一点に向つて、割竹で草を叩き乍ら進んだ。

「山に入つたら捕まるもんか。御台場から出したら駄目じゃぞ」

雄吉は二人に注意した。それから夕暮迄探したが、兎は姿も見せず。そのうち二組の子供達が来ている／＼論議したあげく、嘘と決まった。二組の者が引上げた後、雄吉と、進太郎は相談して、責任者として三千男を処罰する事にした。兎を縛る筈だった麻縄で三千男を縛り上げ、此の付近松にした様に、先ず顔を踏みにじった。進太郎は腹を踏んだ。

「イタアイ」

三千男は声をあげたが、雄吉はかまわず、三千男の顔の上に草履をはいたまゝ、更に両

足で踏み上った。そして「うーっ」とうめく三千男の目鼻を草履の裏で踏みこすった。余り痛がるので、後日、罰の続きを受ける事を約束させて、その日は釈放した。

雄吉はようやく家に帰った時は、もう日が暮れていた。鈴木は母親が待っていて、

「今日は、親方も組子もあがるのは十時頃になりますけん、御飯は持つて来ませんけに、うちに来て喰べて、つかあさい」

「お父っさんが帰る迄、一人で寝るんか」と雄吉が不平そうに言うのと、

「なんなら、うちで進と寝て、つかあさい」進太郎の母親が笑い乍ら答えた。進太郎と一緒に寝るのは一寸嬉しかったので、

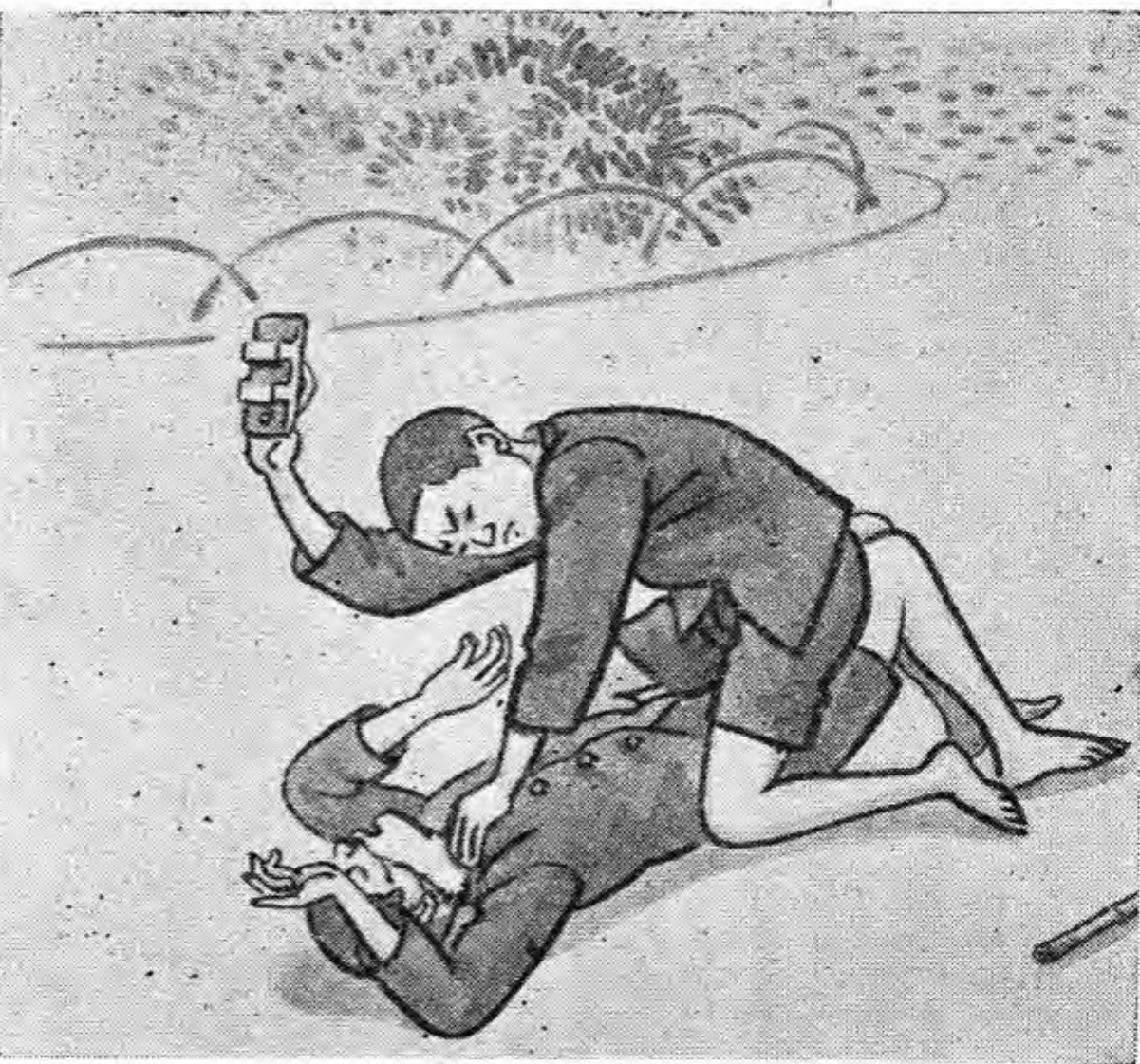
「そんなら、風呂から帰ったらすぐ行くで、進ちゃんに、すぐ風呂へ来いって言うちよいで」

雄吉は勢よく上り框の障子をあけて、はたと息をのんだ。千代が昼寝の腹這いの儘、少年クラブの上に片頬をあて、眠っているのだった。

雄吉の胸の中には、始めて経験する、理解の出来ない感情が渦巻いた。みずおちのあたりがじいんとする衝撃だった。雄吉は思わず唾をぐくりと飲み込んだ。あわてゝ振り返え



ると、もう鈴木之母親はいなかった。千代は本当に良く眠っている様だった。長い髪毛は背をすべって可愛い顔の処でドグロを巻いている。雄吉はそろりと上って障子を閉め、千代の頭の処へそっと立った。胸がどき／＼し



顔が赤くなっているのが自分でも良く分るのだった。

雄吉は考えた。早く風呂に行かないといけんぞ、進ちゃんが待ちちよるだろう、それに腹がへちよるし。又別の思いが雄吉の頭脳を駆けめぐる。でも今してみんともう出来んかもしれん。雄吉は此の機会を逃がすと、永久に千代の髪にふれる事が出来なくなる様な気がして、頭がガンガン鳴り始めて来た。

膝をつき、雄吉は夢中で千代の髪毛を握っていた。「あゝ」吐息

が出る。あれ程悩んだ事もやってみれば恐れる事もなかった。千代は依然として眠っている。そろ／＼と指を動かして雄吉は、千代の髪毛を頭と肩の間から引上げ、両手でしっかりとつかみしめた。冷いじっとりとした感触、

手の平を少し開けばそれだけ弾力をもって手の平一杯に広がる。雄吉は千代の横顔を凝視しつつ、千代の髪毛を心ゆく迄楽しんだ。足の指にからませてもみた。束にしておいて、足でふんでもみた。手に巻いて、千代の頭が少し動く程引張ってもみた。又口の中に入れてかみしめてもみた。どれをしても、雄吉は異常な喜びが感じられるのだった。

雄吉があれだけ憧れ、悩んだ美しい髪毛は今、雄吉の自由であり、彼の蹂躪にまかせられている。雄吉は鈴木之母親との約束も忘れていた。たゞ夢中だった。千代はまだ眠っている。雄吉の願望はまた一つふえた。机の抽出しから紙切りばさみを持って来て、雄吉は左手で千代の髪の束を握った。そして、幾度も躊躇した後、一部を根元から切り取り抽出しにしまった。その日から当分、雄吉は千代を見ると罪悪感におそわれ、激しい自己嫌惡にゆううつになるのだった。

## 九

その日、雄吉は校庭の掃除当番だった。先に帰る三千男を見ると、「おい三ちゃん、後から蛇王山に登ろうや」と言った。

「うん、上で遊ぶ、此の間は面白かったなあ」と三千男の応ずるのに、

「二時頃、宮の登り口で待ちよれよ」

と笑って手を振り、竹箒を持って片隅からはき始めた。その時、誰かが足早に背後に近づき、「倭」と呼びかけられ、右の後肩に冷いものを感じ、続いて鋭い痛みを覚えた。

「誰じやい」

雄吉はその時、何が起ったのか分らなかった。後へ向こうとするのだが、何か抵抗している様で向けなかった。首だけまげて見ると、徳田の文吉の真青な顔があり、目ばかりがキラ／＼していた。肩を見ると、大形の肥後守が突き刺って居り、徳田の手がその柄を握っていた。雄吉は不思議に冷静だった。竹箒を取落し徳田に向き合い、左手を着物の衿から差入れてみた。手に肥後守が触れ、指がぬる／＼して来て出て見ると、血で真赤に染っている。ようやく雄吉にも事態が了解されて来た。やられたと思い、

「切ったなあ」

と言ったが、その頃から痛みはじめ、創口と覚しい辺りが何か特別の器械で強く締めつけられた様な、きつい痛みを覚え始めると共に、右腕全体にわたって棒で／＼も差込まれた

様に硬直を感じてだるくなった。早や背中を見せて、足早に逃げようとしている徳田の後衿に手をかけ、

「此奴、逃げるのかや」

パリ／＼とボタンの千切れとぶ音がして、雄吉は片膝をついた。逃げ様とする徳田の前に、泣き乍ら立塞がったのは鈴木進太郎だった。

「よくも、雄ちゃんをやりやがったなあ」

自分のした行為の恐しさに、今更の如く仰天している徳田は、難なく鈴木に組伏せられた。

「こいつ、殺してやる」

泣き乍ら鈴木は、下駄を振りあげて一撃二撃。徳田の額は切れて血がとび。

「徳田を逃がすなや」

雄吉は叫んで、ついに両膝と片手を大地についてくずれた。

学校の玄関から何か叫び乍ら、三、四人の先生達が走り出ると、教員室の窓から落ちんばかりに半身を乗り出して、何か叫び乍ら拳を振っている校長先生の姿とが、同時に雄吉の目の隅に写った。何か遠いものでも見ている感じだった。俺死ぬのかしら、雄吉はやはり冷静だったが、ガタ／＼ふるいが来て困

った。そして無性に眠くなって来た。肩の創口がますます痛んで来た。「畜生」無理に目を開いて、鈴木と徳田の組打ちを覗んだ。先生達は雄吉を抱き上げ、一人の先生が肥後守をいち早く肩から抜いて、ハンカチを当て、手の平で押え乍ら、

「看護室へ」

と叫び、外の先生達も、

「医者早く」

とか、

「喧嘩はやめろ」

とか口々に短く叫び乍ら一緒に走った。先生方の手の中で一瞬間、雄吉は青空を眺めていた。父親の顔が浮んだ。何故か無性に逢いたいと思った。体が宙に浮いている様でうっとりとなって、何時迄もこうして居たいと思いつつ、やがて堪えられなくなって目を閉じた。

「おい、しっかりしないか」

「倭」

と呼び声が、次第に遠くなって行った。

(この項終り)

× × ×



# 川柳に見るサジズム

蒲 原 文 世



花魁といえバマゾの代表の様に言われ、確かに彼女達はヤリテや楼主達から虐げられていたと思われまふし、又、誌にもその様に記されて居ります。

しかし花魁達の世界を眺めて見ますと、彼女達は彼女達で、一桜だけでも数十人からの団体であり、上は大夫から下はカムロに至るまで、全くの女の世界であります。然も、松の位の大夫ともなれば、新造、見習遊女、カムロ等、少くとも十数人の侍女に侍かれ、その日常生活は大名の側室等遠く及ばぬ豪華さです。そして、これらの侍女達は女主人である花魁には絶対服従であり、彼女達は女主人の気嫌をそこねたら絶対に一本になることは不可能でした。そこに

女同志の残忍なサジが行われることが当然予想されますし、楼主に對してはマゾの立場の花魁が、自分の召使達に對しては完全なサジであったことが、江戸川柳にもしるされて、我々にも予見出来ることです。

次にその代表的なものをあげて見ます。

## ○愛想もセツカンもする長煙管

自らは打掛を着、脇息を用いる花魁は、お客に對しても常に傲慢です。唯一つの愛想はお客に自分の一服すった煙管を与えることです。ところが、その愛想の煙管も一度遊女達に向けられると、セツカンの鞭となり、灸の道具となるのです。

## ○妓の首をふまえて花魁尻を打ち

花魁は自分付きの妓を全裸にしてその首を踏みすえ、弓の折で尻を打っている処、絢爛たる打掛を着、胸の前に大きな帯を結んだ、気高い程美しい花魁の鞭を振る孔雀の様な姿が眼に浮びます。

## ○浴(ユアミ)して花魁部屋へ妓を渡り

花魁が入浴して、せっかく綺麗になった足が冷い床にふれるのを嫌い、侍女達を浴室から自分の部屋まで、飛石の様に伏せさせその上を渡って行く処です。大夫の入浴となると大変なもので、絹ごしの十数回も行ったお湯に七、八人の供付で入ったという事です。

## ○仕置部屋いけにえのいない時はなく

楼には何処にも遊女を責める部屋があり、これをセツカン部屋と呼びました。ところが大夫ともなると特別に自分専用のセツカン部

屋を持ち、これを特に仕置部屋と呼びました。セツカン部屋は時々使われる程度でしたが、仕置部屋の方はいけにえの絶えまがないと言ったもので、花魁のサジの激しさがよく表われています。

### ○ゴバン責にえは主の足をなめ

### ○なめ方が悪いと花魁弓をくれ

説明するまでもなくサジの場面、二番目の句は一番の続きの様ですが、これは犬の糞をなめさせられている句で、その様な註と絵がついております。

### ○花魁の間夫を盗んで片毛ぞり

片毛ぞりとは、全身の毛を片側だけそってしまうことです。勿論、恥毛もです。間夫とは花魁の情夫です。自分の女主人の間夫と密会している処をみつけれ、片毛ぞりの刑にされたもの、これは全部生え揃うまで、全裸にしておかれました。

### ○やわ肌の鞭目に遊女目をつむり

楼内の風呂に一本になった遊女が入っていると、大夫付きの妓が入って来ました。見ると背や股の処に太い幾本ものみずばれ、セツカンの跡です。思わず目をつぶって昔を思い出したところ。

### ○坊主にしやと花魁にえに涼み顔

粗相をした侍女を坊主にしろと、脇息によりかゝり乍ら花魁が涼しい顔で命じているところ、黒髪は女の生命、最も残酷な刑です。

### ○カムロ等はやがて打たる、鞭洗い

セツカン用の弓の折は激しい使用で、いけにえ達の血と脂でまみれています。それをカムロ等が洗い清めているところ、その洗われた鞭が何時自分の背に落ちてくるか分らないのに、哀れな風景です。

### ○客かえし花魁すぐに仕置部屋

### ○花魁は閑さえあればセツカンし

### ○お仕置の遊女は梁に月眺め

何れも花魁のサジの激しさを物語っている。これから考えると、仕置を受けるものは何日も仕置部屋に吊



粗相をした侍女を坊主にしろと、脇息によ

されていることが分る。

愛想も折檻もする

長髪





○間夫が来てセツカンしぱし閑になり

女主人の情夫が来た為、絶えまない鞭の音がハタと止んだ。その静かな光景と、ホッとした妓達の姿がよく分る。

○あんま一つするにも侍女は生命がけ

○オイランのみ一匹で仕置され

前句は女主人はあんまの仕方一つにも弓を唸らすことを言ったもの、後の句はオイランの寝床にのみがいた為、その晩の寢室係の侍女が死ぬ様な目にあわされているところ。

○うつとりと花魁侍女に灸をすえ

上座に坐る花魁の前には罪を犯した侍女が全裸でひきすえられ、そのやわ肌には幾つとなく灸がすえられ、侍女はさっきから苦悶の声をあげている。それを大夫はウツトリと眺めているというもの。

○ありがたく押し載いて尿をのみ

○粗相して侍女花魁の尿尿なめ

昔は貴婦人達が用を足す時は数人の侍女が控え、女主人の着衣の裾を捧げ持ち、小さな桶にしたもの、終れば侍女が清拭した。これらの事は奇クのマゾ小説に現代物としてサジ

の一つの方法となっているが、昔の貴婦人の生活では当り前のことであった。然し、当り前としてもやはりサジの一つというのが適当かもしれない。この句のサジは花魁のナグサミものになった情景と尻のふき方が悪かった為に命ぜられたものを詠んである。

○ろうたくも力み給うてふきやいのう

女主人の花魁が排便後彼女に尻をふけと命じているところ。女主人の尻をふかせるところがサジというところであろう。当然、いじめるつもりなら彼女の舌でふかせたかも知れない。色々の場面が想像される。

以上は、小生の知人のある料亭の女将の持っている小冊子の写しです。句と説明と絵が入っており、正式の出版ではないもので誰か画家に描いて貰ったらしく、大分古い巻物のかっこうになっています。中には小生の知っている句も二、三ありますが、大部分は分りません。奇クは仲々の力作揃いですが、どういふものか時代物の女性サジの物が少い様です。口絵等にも時代物の女性サジを出来るだけ載せて、しかもこの例の様な絵巻物式にして貰えたらと思います。

女官、御殿女中、花魁等、女性サジの場面は数限りなくあると思います。(終)

# 「學童相撲教練」

山 口 幸 一

學童相撲教練

私達が少年の頃は丁度支那事変が始まった昭和十二、三年頃でした。その頃の子供達は学校の体操の時間には全員強制的に相撲をやらせられました。それも規則正しい訓練として。

私が小学校を卒業致しました当時は、身体つきが華奢で弱々しかかったので、両親は、どうせ商人になるのだから無理に上の学校に急ぐ事もあるまいというので、高等科の一年に入り、それから商業学校に進むことにしました。両親は一人息子の私を非常に可愛がって居りましたので、勉強より身体と考えたのは無理もない事でしよう。

それは丁度、私が高等小学校の一年の時の出来事です。当時、日本の大陸に於ける侵略戦争は次第に拡大して、英米諸国の日本に対する悪感情はいよいよ露骨になって参りました。遠からず日本も英米を相手に、乾坤一擲、乗るか反るかの雌雄を決しなければならぬだろうという緊迫した空気が、国民感情の中に次第に強く浸み込んで参りました。

従って、当時の学校教育にもそれが反映して、英米思想の排斥、健民強兵の教育が強化されて来ましたことは当然です。つまり少年という少年を全部兵隊に仕上げる為の予備教育が行われ始めたのです。スポーツの面で云

いますと、野球とかバレーとか庭球とかは、外来スポーツとして排斥されました。もっとも、ゴムや革が軍需品として使用される為、用具も充分製造出来なくなったせいもあるでしょう。

その代りに、健全な精神と肉体を養成する為に、一番適当しているとされて、日本の国技である相撲が学童スポーツとして奨励され私が高等小学校に入る年からとうとう正課となって全員に課せられる事になりました。

私は女性的な少年でしたし、それに内気な性質で、人の前で裸体になることが何だか恥しくてたまりませんので、今迄一度も相撲に



出た事はありませんでした。

中学や商業学校では相撲は未だ正課になっていないのですから、やらなくても済む訳ですが、私一人高等小学校に行ったばかりに、新学期から相撲教練を受けなければならぬ事になりました。

私はその頃、同じ年位の少年が身に着けている衣服に何かしら性的な魅力を感じて居りました。それは久留米紆の着物、無地の袴、黒いメリンスの帯、日本手拭、褌、という様なもので、そんなものを身につけた少年を見ると、何かしらその子が非常に可愛らしく見えました。又、自分でその様な衣服を身につける事を想像すると、堪らない嬉しさと羞しさがこみ上げて来て興奮してくるのでした。

中でも褌に対する魅力は一番強烈なものでした。相撲をするには必ず褌を着けさせられるだろうと思うと、私はあたかも専制君主に捕われた死刑囚が刑の執行日を待つ様な気持ちで、只、うつら／＼と毎日を過すばかりでした。

やがて新学期が始まり、体操の時間が参りました。若い体格の良い体操の先生は教壇に上りますと、私達に向かって厳かに「自分は今日からお前達の体育を担当する事となった」

と前置してから、非常

時下の学校教育のあり方について、大いに国粹主義を鼓吹した後、

「自分は学生時代相撲の選手であつたが、本年から文部省令に依つて小学校教授要目に相撲が正課として採り上げられた事は、大いに欣快に耐えぬ事だ。日本男子は一度は真裸で褌一本になって土俵の上に立った時の気持を味わなければならぬ。

自分はお前達の中で弱い者が、一人も居なくなる迄、大いに鍛えて健全な精神、肉体を持った立派な兵隊になれる様に、今後指導して行く。今日は廻しを各自に渡して締め方を教える。廻しは今後二年間使うのだから、めい／＼自分用のものを購入して名前を書いて、

各自保管する」

と云われました。先生に連れられて四五人



の生徒が教員室に廻しを取りに行きました。やがて、めい／＼黒い廻しを五、六本宛ついで教室に入ってきて来ると、皆に配って歩きまわした。渡された廻しを恐る／＼手に取って見ますと、巾は一尺五、六寸で、長さは十二、三尺の丈夫な黒いズック製で、それを縦にきちんと四つに折って、四寸位の幅にして畳んでありました。

こんな固いものが、どうして私の華奢な腰に締められるだろうかと思うと恐ろしくなりました。

先生は少しも構わず、

「では今から廻しの締め方を行う。皆裸体になって廻しを持って集合」

と号令を掛けました。やがて私等は服を脱ぎ、先生の前に二列に整列致しました。先生はすらすらと皆を見渡し、

「何だ、まだ猿股をはいている者が居るが、猿股は英米の女がはくものだ」

私は猿股をはいて居ましたので、恐る恐るあたりを見廻しますと、大概の少年は大人の使う白い越中褌をして居りまして、猿股は五人より居りません。それで私も次の日からとうとう越中褌をしなければならぬ事になりました。

先生は大きな声で号令を掛けました。

「前列一步前」

前列の列と後の列の間が三尺位開きました。

先生は一人の生徒を教壇に呼んで、皆の方にお尻を向けて後向に立たせました。そして、「今先生がゆっくり締めるから、その通りに後列の人は前列の人に締めてやる。終ったら前後列交代してもう一度やる。それから、廻しは相撲に於ける唯一の武器であり、防禦具である。だから廻しを締める時は虚心担懐、一味清風の気持で、固からずゆるからず締め心持の良い様に締めなければならぬ。初めは仲々よく締まらないが、そのうち馴れれば具合よくなる。猿股の上から締めるなんてのはだらしがなく、見苦しいから必ずじかに締める。廻しが固い人は初め越中褌の上から締めて、馴れたらじかに締める」

先生は少年の廻しを取り上げると、「では後列の人は廻しを前の人の股から渡して、それから後に廻す、良いか、次に前列は左手を後に廻して廻しの下にはさむ、分ったか。そして前列は右廻りに二回まわる。後列はしっかり廻しの端を引っ張っている」  
こうして私は、初めて固い相撲褌を締められたのでした。

きっちり股間と腰に密着する巾の広いズックの粗い肌触りは、堪らない興奮感を巻き起しました。その時以来、私のその感じに対する執着と慾求は消え去りませんでした。

時間の終りに先生は「この次から実技をやるから、それ迄に各自、自分の家で締め方を練習してみて、具合良く締められる様になって置く事」と云って出て行かれました。

家へ帰ってから私は、寝る前にその廻しを母の姿見の前で締めてみました。締め終ってお尻を鏡に写して見ますと、むっちりとしたお尻の縦の割目に喰い込ませて股間に廻した巾広の黒褌は、私のほっそりした腰の肉が陰影を作っておりありと浮き上って見えしました。

私は鏡に写った自分の後姿のあまりの美しさに見とれて、蹲んだり、四つ這いになったりしては種々の映像を演出し、夢中になって興奮感に酔うのでした。その時、急に足音がして障子を開けて母が現れました。私は褌を解こうとしましたが、固い廻しはすぐ解けません。とうとう母に見られてしまいました。その時の恥しさといったら、何と申して良いやら、只、耳たぶ迄真赤にしてうなだれて居るばかりでした。



それから四、五日たって次の体操の日が参りました。廻し一本になった私達は土俵の周

ましました。何度も何度も投げられていたうちに私はその痛いしびれるような感触と、縄を引



縄をとりかこんで、次々に先生にぶつかって行きました。先生は私達を軽く抱き上げたり、又縄を掴んで投げ飛ばしたりしました。

私は恐ろしい様な気がして、隠れるように皆

の後に立って居りましたが、やがて先生に見つかってしまいま

した。そして手をとって土俵の中央に引き出さ

れると、荒々しく後縄を引き掴

むと激しく土俵の上に投げられ

ていたうちに

かれる時の緊縛の刺戟が、魔薬の様な堪らない快感となりました。そして、一週二回のその相撲の時間を待ち焦れる様になりました。或る土曜日、先生は私に明日下宿に遊びに来るように云われました。

先生は、遠縁の老婆と二人だけで町外れに住んで居りました。私が遊びに行きますと、大きな古い士族屋敷の様な家で、先生は離れの奥座敷に居られました。縁先の庭は黒土がピカ／＼光る程綺麗に掃き清められて居り、古い石燈籠が大きな樹木の陰に見えているという様な、古色蒼然とした庭でした。

私は先生の写真帳を見せて貰って居りましたが、やがて別な生徒が一人入って来ました。その子は一級上の高等二年の子でした。その子が私に向って、

「君となら訳はないさ、だが今日は型だけだから、本気で投げないでやるよ」

「何の事、それは？」

「今日は先生が僕達の相撲の写真をとるんだよ、僕この前も学校でとったんだ」

私がびっくりしている処へ先生が入って来られました。先生は体育研究会に学童相撲指導について発表する為、資料を集めて居られたのです。

私等二人は廻しを締めて庭におりました。

最初は仕切りの姿勢でした。二人は庭の土の上に四つん這になって仕切りました。先生は私の斜め後方に蹲んで、カメラのレンズを覗きながら私に向って、

「もう少し足を拡げて、お尻を上げて」と云います。私は両手を下したまゝ先生の云う通りの姿勢をとりました。それから「一寸、こっちを向いて」と云われたので、そのまゝの姿勢で顔だけ振り返りましたら、その瞬間、シャッターが切られました。

恐らくその写真には二人の少年の四つん這の禪姿が、庭の石燈籠を背景にして浮き出た様に写って居った事でしよう。

その他、私達は尚も色々な型を作っては写真をとりましたが、私達は只人形の様に先生の命ずるまゝの姿勢でじっと動かずに、シャッターの切られるのを待つて居りました。

その事があってから暫くして隣町の中学校で、郡下の高等小学校対抗相撲大会が催される事になりました。私達の学校から七人の選手が選ばれて、体操の先生が引率して行く事になりました。勿論、私は選手ではありませんが、先生は私にも一緒に見に行かないかと云われたのでついに行きました。

汽車で二つ目の城下町がその中学校の所在地でした。私達は体操場の中に荷物を置いて休んで居りました。他所の学校の選手達も皆一緒にあちこちにかたまつて坐つて居りましたが、中には大人の様な身体つきの大きな生徒もありました。

やがて入場式の時間が参りましたので、選手達は一齊に裸体になり支度を初めたのですが、私の学校の選手の一人が見えません。慌てゝ先生があちこち探しに行かれましたが、やがて元氣のない顔をしたその少年を肩に抱えて帰つて来られました。その選手は急な食当りの為に下痢を起して、到底試合に出られない様子です。先生はその子を畳の上に寝かせて毛布をかけ、薬を飲ませました。腹痛はなおった様ですが、顔色は蒼くじつとして休んで居るばかりです。先生は私に向つて、

「仕方ない、君すぐ支度して出る、人数は七人そろえなければならぬ」と云いました。「だって、僕はとても試合など出来ません」

私は必死に先生に哀願致しました。今日は郡の大会ですので、私の顔を知っている同級生の中学生や女生徒が沢山見に来て居り、その大勢の面前に、どうして恥しい姿を曝されましようか。

しかし先生は、いくら私が哀願しても聞き入れてくれず、嫌がる私のズボンを無理に取り、越中褌の紐を解くと締込みも嚴重にかたく締め上げて仕舞いました。

私達選手が教室を出て行くと、観衆の眼は一齊に私達に注がれました。私は恥しきの為に顔も上げられず、皆の後について花道を通つて土俵に上り、入場式に整列致しました。

試合は勿論、問題になりません。只、私の出場の番が来て土俵に上り、手を下して仕切つて居りますと、何時も先生が後の方からレンズを向けて居る様な気がしてそわそわし、慌てゝ立上つて行司から注意を受けたり致しました。

それから間もない或る日、先生から「この前の写真が出来たから見に來い」と云われました。私は土曜日の放課後、先生の家に行きました。顔見知りのお婆さんが出て来て、部屋で待つて居る様に云われましたので、私は先生の部屋で一人帰宅を待つておりました。

夕方近くなつてから先生は、急用が出来て遅くなつたと云いながら学校から帰つて来られました。お婆さんはお茶を持って来られると、用足しに行くから留守を頼むと云つて、出て行かれました。私は先生の出してくれた



## 『切腹と自害への希求』

兵 頭 庫 一

数々の写真を見せて貰いましたが、一番私の関心の強いのは、勿論、いつかの日曜日に撮った私自身の写真です。それを見付け出した時、私は思わず自分の肉体の美しさに見とれてしまいました。

上ない対照の美しさを現わして居ります。うっとりとして見ている私の背後に、先生の紺紺の着物の香りとコールドクリームの匂を感じました。

柔かい白い筋肉と固い黒い締込みは、この

初めて私が経験しました甘美なる陶醉が○  
○というものであるという事は、ずっと後で

知りました。そんな事が少年に出来るかと云うのですか、それは昔の小姓だって稚児だって、結構十三、四才から職務を遂行している事でもお分りでしょう。

その先生ですか？ 間もなく応召されて中支で戦死なされて、お気の毒な事をしました。

が、奇くはかくも安価にしかも堂々と楽しめる所に大きな価値があると思う。一九五三年三月号以降毎月必ず其の記事が載っているがその反響たるや実に力強いものが感ぜられるそれは読者の声である。奇くは全国津々浦々に愛読されていると思うが、その多数の愛読者の中に相当数の我党が性別を越えて存在していることが認められる。その人達の切なる叫びこそ自分がこれから書こうとする「切腹と自害への希求」に外ならない。

我等のオアシス奇くが生まれたのが終戦直後であって、切腹に関する記事が現れたのが一九五三年の三月号であるから自分の様なオールドファンにとっては全く「遅い」云々云々を得ない、然しよくまあこんな素敵

な公刊物にめぐり合ったものと随喜の涙をこぼしているのは決して自分一人ではあるまいと思う、世の中には純エロ物を極秘に楽しんでいる一群の人達があるらしいがこれは極一部の特権階級のみに限られ我々とは縁が遠い

私が切腹に興味を覚え出したのは十才前後ではなかったかと思う。私は関西の或る都会のド真中に生れたので、当時の「活動写真」を見る機会に恵まれていたことはいちもな。しかも旧劇即ち時代物にはよく切腹や自害の場面があったから、その刺激によって病さうもうに陥ったものと思われる。この事は芝居でも同様と思うが、この方はずっと後年まで見る機会がなかった。又雑誌や本等の影

響もかなりあった。今でもそうであるが忠臣蔵なら毎年必ず一回や二回は見られるから、浅野内匠頭の切腹はよく見たものである。然しこの切腹の場面は昔は相当克明に描写したものだが、後年はだん／＼省略されて行った。

何しろ古い話だから確かではないが、最初には白装束の袴を脱いで、九寸五分を左の脇腹に突立て（衣装の上から）段々右へ引廻して行く、この間苦痛をこらえる表情宜しく遂にこらえ切れなくなって前かゞみになるうとする瞬間バツサリ介錯刀が下りる所迄写してあったが、その後次第にこの仕草が端折られて遂には腹切場が全く無くなってしまふというひどい（我党から云えば）物まで出て来る仕末だ、我々にとって忠臣蔵に腹切場がない事は観覧料を半分返して欲しい様な気持である。切腹や自害の場面は色々あるが、儀式的な物が何と云っても圧巻で、他の場面では

物足りない。其の意味で、吉村れつや溝口与之が、浅野内匠頭宛らに或は其れ以上の華々しさで、見せる腹切風景こそ、我党が悩ましくも希求する最大級の物なのだが、遺憾乍ら其れは幻想の世界にのみ存するもので現実に

は望んでも見られない。忠臣蔵の外で、三十年後の今日までまだ、感銘に残っているものを拾って見ると、儀式的なものは一つもなかった——寡見にしてと云おうか……。

というのはアブレゲールの人達は別として我々の年代の人の中には相当経験を持ていられるのではなからうか、そういう人は是非同好者の為に貴重な見聞を奇ク誌上で発表して頂きたいと念願して止まない。

儀式的でない場合として記憶に残っているものに、白縫物語の若菜姫が仇討の本懐を遂げられず、代りに仇の衣装を短刀で突刺し、返す切尖を我と我が乳下へ突立てる場面。由井正雪の一角が、事露見して相次いで切腹する場面。これと似たものに天一坊の伊賀之亮の切腹等がある。昔は無論サイレントであったから、こうした旧劇（時代



淳三虫



物)では芝居で用いる鳴物や台詞を用いたもので、人を切ったり切られたり又自刃した瞬間、ガチャッ／＼と斬を入れるので、その音で思わずヒヤリとさせられて、実感を添えた「胸を躍らす」というのは通常修辭的な表現だが、私が見た中で実際心臓がドキ／＼して息をはずませた物もあった。

その一つは「死に行く妻」という栗島すみ子(大正年間の名女優)主演の新派悲劇のラストシーンで、意地の悪い姑の仕打に耐えられずに婚家を去ったが、やはり夫恋しさに、宿から手紙を出して会いに来て貰うことになっていたが、どうした手違いか夫が来て呉れないので、遂に意を決して、かねて覚悟の白無垢衣装を身にまとして純白の布団のシーツの上に坐って、両膝をかたく縛り、短刀を抜くと……という所で場面が変わるが、全く息詰る瞬間だった。ここで若しその短刀で腹一文字ということになれば、感極まって気を失ったかも知れないと思う。この記事を読む人中には、そんな馬鹿な事と思われる方もあるだろうが、私の「切腹と自害への希求」は、想像以上に強烈なもので、若しその希求が実現した瞬間、心臓麻痺で昇天してしまうだろうと考えている。

是と似たものでは昭和の初頃だったと思うが、「修羅城」と云って大阪落城を取扱った作品で、精倉の中で一人の女中が左の乳の下を突いて死ぬ場面があったが、これは自害場として特に撮ったシーンだけに時間にすれば短いのだが、その女が大写しされると左手に持った短刀の鞘を払って右手に持った刀の切尖を左の袂にまきつけ、逆手に持ちかえると左の乳の下へ当てがい、グサリと突立て、ほんの暫く苦悶する内、中腰になると口にくわえていた布片をハラリと落とすと横へ仆れてしまふ迄、完全な描写で、私はその場面見たさに数回同じものを見た程で、前記の様に儀式的でないのと白無垢姿で無い点で、大分興は殺がれはしているが、私の見た中では圧巻と云える。

「真葛ヶ原の女腹切」は絵看板を見たことは覚えていますが、どうして見なかったのか、かえす／＼も残念に思っている。其他「細川忠興の妻」「鏡山の尾上」「会津藩士西郷頼母一家数人の婦人」等史実に有名な女性の悲壮な最期をテーマにした映画や演劇はあるにはあったが、前記の様な印象的な場面は見るこゝとが出来なかつた。支那事変に突入してから、出征軍人の妻が夫を励ます意味で自害し

た例はかなりあったと思われるが、映画化された一つに「井上中尉夫人」があった。これは盛装した夫人が端坐して懷剣を咽喉へ擬すところで終るが、かなり印象的であつた。後日事変の展覧会で、その時用いられた座布団や懷剣が陳列してあつたのを見たが血の為に黒くなり悲壯感を漲らしていた。然し我党はこうした現実には寧ろ敬遠するもので、若く美しい婦人が美しく着飾って、自らの手で、自虐的な行為に依つて最期を遂げるところに無上の陶醉美を味おうとするものである。然し奇巧誌上を飾っている「女腹切八景」等に表現された悲壯美を現実に映画や演劇に見ようとしても不可能で、若しこれを可能ならしめようとするには、我々の手でそうした映画を製作し実演する外は無い。モデル写真等は我々の渴望を癒すには余りにも微力だ、もっともっと強力な企画を希望して止まない。例えば切腹愛好者のサークルを誕生せしめて、会員相互が一つ一つの力を燃り合せて素晴らしものを育成することである。同好の方の活潑なる御意見と御感想を待ちつゝ一先ずこの項を終る次第である。

(梅田淳二画)

# 縛られた八人の女

岸 本 青 柳

美くしい八人の女が、何れも後ろ手に縛られ、一ト縄めにして私の家へ送られて来た、その瞬間私は余りの驚駭と、一種異様な喜びとの感情が交錯して、昂奮と感激とに駆られて、暫らくは茫然としていた事実があった。それは私が多年の間心中秘かに画いていた空想、夢想が、事実となって眼前に展開されたからであった。

私は多年若くて綺麗な女の責めや、また自ら女装して責めの研究と実験とを行って来たが、その永い歳月の間には、唯だ一度でも可いから、縛られた美くしい女の訪ずれや、ま

た他所から江戸時代の下町風の娘の有り姿の人形や、その娘の着ている着物類などが、小包、運送便、事伝手で送られて来ないものかなアと、常日頃空想に耽っていたものだった。その真昼の夢が、突如として今日只今私の眼前に、忽然として事実となって現われたのであるから、半ば失神せんばかりに驚き且つ喜び、これを迎えたという世にも珍奇な事実もあるものだと、誇張するのも強ち狂人沙汰ではないのである。

長い長い鬱陶しい梅雨もようやく明けた日のお昼に少し間のある朝の珍事出来であっ

た。空には一点の雲影をも認められず、庭園の芝生、山々の樹々も数十日振りに、眩しい太陽の光を仰いで、心持ち清々とした朝であった。私は所用の爲め平素よりも稍々遅れて会社へ出勤しようとして、玄関先に立ち出た時分であった。その時突然、この縛られた美しい女八人が一緒に送られて来たのであった。が芝居でもなければ映画でもない、勿論寝言の余りでもない、正真正銘の縛られた八人の女であることには、全く間違いはないと念を押して置くのである。

それも活きた人間の顔、今にも物を言いたそうな唇、中には猿轡をはめられた女が三人も居る。何れを見ても私が日ごろ念頭を離れなかった主に、徳川時代風の女ばかりであった。髪のかき方、黒襟のかゝった着物、花簪帯それらの総べてのものが、晴雨先生も好んで居られる時代衣裳を用いている、ところがその人々の名前はと問えば、静御前を始めとして女スリのお艶、千姫、犬公方の侍女、八百屋お七、勤王芸者の君香、悪旗本水野十郎左衛門の腰元、華魁小紫と呼ぶ八人の女であり、何れも極度に苦悶の顔と姿態を現わしている、その上総べての色彩も至極鮮やかなそれは、三条春彦画伯力作の「時代物責絵巻」



ソックリであった、眼の錯覚ではなからうか、過去数十年の間、縛られた女の錦絵や、実物の写真などは数百葉も、私の家へ送られて来たが、今度のように一度に八人の縛られた女の美しい訪れは、前代未聞の珍事には相違ない、ソコで私はこうした縛られた女の研



「お花のお師匠さんを山の樹に吊り上げたところ」

究をするに到った動機と、実験の模様を述べて見よう。

今からザッと廿年ほど以前の或る真夏の夕暮ごろであったと記憶するが、折柄の雷鳴と共に降った激しい夕立で、私の家の前の小川が忽ち氾濫して、涼味を覚える頃であった。

上手から流れて来たボロボロになった一冊の木版刷りの古ボケた絵本を拾い上げて、何気なく濡れた紙を丁寧に一枚々々とめくって行く中に、八犬伝の犬姫らしい面長な顔付をした、美しい一人の娘が後ろ手に高手小手に緊縛されて、背後の大木に縛り付けられ、長い漆黒の髪も、絵模様の散らした長袖の袷の着物も、その衣裳も乱れて、チラチラ蹴出しが白い足元に纏まり付いて、苦痛に堪えない哀れな姿態を呈している絵面を見てからというものは、何だか少し変態的な気分が駆られて来たのであった、それ以後の私は真ッ昼間でも、家族が留守になるのを見計っては秘かに、筆箱の中の姉の着物を引ッ張り出しては女装して自縄自縛の責めの実験に耽って、何とも言えない愉快な日を送っていたのであった、それがだんだん昂じて今では妻や洋裁のお弟子、若いお花の師匠、さては心易い芸者をモデルに、盛んに責められている写真を撮ったり、絵に画いたりなどして、独り享楽感を味って来たものである、だが決してモデル女を裸体にしたり、越えてはならない第一線を踏み外したこともない、一種の唐変木漢ではある。

縛られた女を撮影する場合は四季を通じて

室内でも庭園でも山林でも、日曜祭日の公休を利用して実験するのではあるが、何時も変わった着物、それも長い袂、長襦袢を用い、帯扱帯とも何れも時代もの、髪は新蝶々、島田丸髷など、これも亦徳川幕府時代の結い方、なるべく黒襟の付いた着物で下町風の娘の装いをさせて、決まったように麻縄で後ろ手に厳しく、高手小手に縛り上げ、起たしたり、座らせたり、横向けに寝かせたり、或いは太い樹の枝に吊り下げたりしては、その美くしい女の苦悶の面持ち、発散する女の体臭、髪や着物の乱れ振り、両足の伸び縮みなど、縛られて責折檻される女の種々の姿態に、細心の注意を払って、そして詳細に観察しながら、少しでも変わった姿をバチリと撮るのであるから、多少時間を要する場合も屢々であった。

殊に私は女の着物に就いては責めている際、その袖、袂、裾襟元、帯の締まり方、髪や着物の乱れ具合などには頗る興味を以て仔細に観察を試みるので



「女装して縛られた筆者」

あるが、一昨年の夏の始めごろであったと思われるが、或る和服裁縫見習に通っていた妻の遠縁に当る廿二歳の少し肥った色白の背の高いお嬢さんに無理に頼んで室内で例の責めの実験をしたことがあった、妻の黒襟の付いた淡紫色の格子縞の袷、鹿子絞りの長襦袢、紅い蹴出しを着させて、愈々実験に入ろうとしたがその娘は俄かに逃げ出そうとしたので

私は無意識に、娘の背後から娘の帯を掴んで後ろへ引き戻し、髪の手を掴んで俯伏せに引き倒して、無我夢中で娘の雪よりも白い両手を然じ上げて、用意の麻縄で三重四重に後ろ手に強く縛り上げ、踏んだり蹴ったり転ろがしたり、恰かも娘の身体を駅仲仕が荷物を取扱うように荷物扱いにしてあらゆる虐待を加えた。その娘はお絹さんと言って、気質の極

く優しい可愛い娘ではあったが、両眼からポロポロ涙を流し、口をへの字に曲げ顔をしかめて、ジッと私を睨んでいた、それには頓着なく私は、お絹さんの縄尻を引ッ張って、高い縁から裏庭に連れ出し春日燈籠脇の松の樹に縛り付けて、ところ厭わず生垣の竹の杭を引き抜き、その竹で無茶苦茶に殴り続けた、流石の娘も耐え兼ねたものか、甲高い声を張り上げ「おじさんッ痛いッおじさんッ痛いッ、もう止めて！」と二、三度叫んだ、これには私も吃驚して早速その縛っていた縄を解き、お絹さんの身体を抱えて座敷へ上げ、平



身低頭で謝まり、茶菓子を出しなどをして、娘お絹さんを慰め漸やくにして機嫌を直して貰った大失敗の事実もあった。

その後お絹さんに逢った時、先日 of 乱暴振りを改めて陳謝すると、お絹さんはニコリ笑いながら、「最初は何をされるかも知れなかったので、恐ろしかったが身動きも出来なほどに緊く縛られた上に虐待されたので随分苦痛だったがあんなことぐらい何でもないワ」と暗に今後も責めのモデルになって見たいという気持ちを訴えたのには、私も再び驚いたのであったが、このお絹さんの場合は特別の実演であった、それもその筈でお絹さんにして見れば、縛られて責折檻されるモデルにされることを充分呑み込んで居なかったのだ、私も思わずお絹さんに暴虐行為を加えたのであるが、これなどは全く例外と申して可いのである。

こんな風にして久しい間、責めの研究実験を次から次へと繰り返しているので他人様からは、気狂いか変態者かと嘲笑されるかも知れないが、未だ嘗って一度も其の実演の場面を発見せられ赤面したということの絶無なのは、私にとっては極めて幸福であり僥倖であると思っている、斯様に世間に遠慮気兼

ねしながら、責めの研究実験を続けている私の心境は、私自身もハッキリ解らないくらいだから、尚更他人様には到底諒解出来るものではありますまい、私は私の善良な心を自ら欺いて、自らの快楽を味うことのみに駆られて、独り善がりの研究実験を進めているのである。これが別段一般社会に罪惡を与えるということでもないから、今後もこの研究を続けて行く積りである。

斯様に若い美しい娘さんをモデルに縛って虐待する時の気分は何とも言えない快味を覚えるものではあるが、娘さんを縛ることよりも、私自身の身体を自ら縛って責めの実験を試みる時の気分の方がヨリ愉快であり、ヨリ興味を持っているのである。最近では妻のいるいろの着物も殆んど着尽したので、専ら心易い芸者さん達の色々変った着物、帯、長襦袢その他附属物の衣裳を期限を定めて借りて来る、そうして深夜秘そかに女装して座敷の床柱、庭園の松の樹等に自分の両手を後ろ手に堅く縛って、種々雑多な姿態を作る、或いは太い樹の枝に別の太縄を掛けて、宙吊りや逆吊りの責めの実験を行っている、そしてかづらの乱れ方着物の乱れ具合、両足の開き方、苦痛の程度など身を以て体験している、

こんな時には必ず脳裡に浮んで来るのは、芝居で観た、番町皿屋敷のお菊の井戸吊り、祇園太閤記の雪姫の桜縛り、浦里の雪責めなどの惨虐な責め場である。茲四ヶ月ほど前の晩、友人に誘われて程近い或る劇場を覗いて見た。中幕に国定忠治一家の殴り込みの場面があった。髪を高島田に結び、淡紫色に赤い矢絰の袂の長い着物を着た八百屋の娘おつたというのが悪い博徒に捕えられ、蔵の中で両手を縛られ責め虐なまれているのを息をも継がずに観劇したが、その娘の動作は如何にも真を映していたので非常に昂奮したのであった、翌朝その俳優の泊っている旅館を訪問して、責め場の苦心談なるものを聞いたが、その俳優は元呉服屋の二男坊で矢張り芝居が好きで殊に縛られる娘が適役だとの評判が高いので、縛られる娘の演出する芸題を選んで上演するのでという、淡路島の生れで沢村幸之助と名乗っていた、お別れの際、少額な祝儀を包んで出すと、頗る恐縮していた。そして仙台で写したのだという、自分の責められている娘姿の中版形の物凄くほどよく出来た写真を一枚贈られた、これを奇縁に時々旅先から通信もあり、責め場の変わった写真も送って呉れる。女形俳優も芸上達には常に研究を重ねて

いるとのことであった。

世間はデフレだとか、不景気だとか騒ぎ廻っているのに、私もその渦中に巻き込まれては居るものゝ、責めの研究を続けられるのは

点

三

昧

## 清 川 谷 長

何よりも幸福だと思っている、その折柄美しい八人の縛られた女が一時にドツと押し寄せられたので、眼の錯覚やら精神的の錯誤やら、何だかと言ひ知れない感情が、潮の如く

或る古書展で偶然「奇ク」の旧号一揃いを入手、胸をおどらせた、と云うのは、私には少年の頃から悦虐の性癖が心の底にわだかまっていたからだ。

私の生い立った町では、科学の進んだ今日でも灸が信ぜられ、何かと云えば罰と健康法を兼ね子供に灸を据えた。一人がしっかりと動けない様に抱き締め、他の一人が艾と線香を持って後に立つと、

「あと、もう三つでおしまいや、こんなやいと何んやね」

と身柱に灸を据えてた。私はお灸の洗礼を受けたことがないので、どんなに熱いのか知らぬが、声かぎり泣き叫び、手足をばたばたさせている。大抵二人がかりであるが、母親一人で据える場合は、馬乗りに乗りかゝって据える。子供の方は声もかすれ、泣き声さえろくに出せないでいる。

又、学校で海水浴などに行つて人の背中を見ると、十人のうち五人まではなまなましい

押し寄せ驚駭と感激とが相交錯して、唯だ独り宇頂天になって居るといふのが、昨今の私の真実な心境ではある。

(終り)

灸跡があり、中にはたゞれてウミを持っていゐるのさえある。こうした光景を常日頃まのあたりに見て、胸をドキン／＼させながら、自分がすえられているような気持になつてきて或る時などは冷汗が身体中一杯に流れていった。

だけど私の優しい母は、少し位ヤンチャをしても灸罰を与えてくれなかった。二、三度続けて夜尿をはずした時、

「おちんちんの上に三つだけやいとすえてあげよう、そうしたら治る。熱くない様小さい小さいのをすえてあげるよって」

と宣告はされたが、刑の執行には入らなかった。今思うと、恐くもあつたが残念で仕方がない。それから、自慰を覚えるようになってからは、美しいやんごとなき人に取りひしがれ、灸をされている痛さ、熱さ、苦しさを夢想しては満足していた。そうして、こっそり人の灸跡を見ては自分がすえられているかのような境地に到達した。殊に綺麗な女の肌



## 灸

に、目玉のような真新しい灸の跡を見た時等は、自分でも驚く位の衝撃をうけた。

此の時に本当の灸罰の苦しさを体験していたら、或は、灸と聞いただけでもおびえていたかも知れない。こうした私が本当に灸をすえられたのは、二十才になってからのことであつた。それは大学に通うようになって、知り合いの家に下宿している間のこと、その家の夫人によって心秘かな願が達せられた。

此の家の主人というのが或る大きな土建会社の技師で、私とは句作の友であつた。一年の中三分の二は現場に出張して絶えず留守勝ちで、後は夫人と十五才になる親戚の豊子と二人きりで、女ばかりでは余り淋しいから二階を借りてくれと云う事になって、その家の家族の一人に加わったわけである。

ところが、つい半年程前に主人の技師は現

場の事故で忽然とこの世を去り、四十にはまだ手のとどかないこの夫人は、世間には隠しているが元は金沢で芸者をしていたそうで、それだけにちょっと垢ぬけのした処があつて背はやゝ高く、日本髷がよく似合つた、性格的にはヒステリックな処もあつて、それにはこんな話のある事も聞いた。

主人が出張先に女が出来て、旅先が長くなりかちだと云う話を聞きこみ、くやしいとばかり現場に乗り込み、ダイナマイトを持ち出して主人も女も妾も一緒に死んでしまうのだと飛出したが、一足さきに知らせをうけた主人は驚いて裏木戸から跣足で飛出し、間一髪ことなきを得たと云う。

平常は実にしとやかでまめ／＼しく世話をしてくれ、毎日食事がすむと長火鉢を挟んで芝居の話や芸者の話を聞かせてくれる。我々学生にとってはこういった女性は何一つ魅力的でないものではなく楽しい小半時であつた。

試験もや々と済んでホッとしていた時の事「まあ、ほんとにやつれなかつたのね。勉強が過ぎたのでしよう。疲れのとれるお灸をすえてあげましょう。ほんとにいい氣持で、スーッとしますよ」

夫人は何かという人灸をすえたがり、

豊ちゃんなどは時々被害をこうむるようであつた。主人の死後、灸点師になろうという下心があつて、その方面を専門に研究しているという事だつた。

「主人なんかも厭がる様にしていましたが、家に帰ってくるとおさえつけてすえてやりますの」と云つた風に、実に熱心で、何んだか催眠術にかゝつたような氣持になる。

「じゃあ、やってももらいますかな」

と答えると、夫人は誠に満足そうな面もちであつた。

「豊ちゃん、お前からさきにすえてあげようさ、こっちへいらっしやい、この子もつい二三日前から毎晩すえてやっていますのよ」

私がいるので氣まりが悪いのか、

「伯母さん」と逡巡している。

「何んだね、お前さん、ぐず／＼しないで早くいらっしやい」

と、夫人の前に背を向けて坐らせられ、両肌をぬがされた。成熟しようとする女の肌が如何に美しいか、見ていて、私は思わず顔が赤くなつた。

夫人は灸点師希望者であるだけになれたものである。艾を器用にひねり指をしめして背中へすえ火を点けると煙がゆらぎ、艾のなつ



かしい匂がたゞよってくる。豊ちゃんは見ると、両手で膝頭をしっかりと押え、肩にあるだけの力を入れ、目をつむって熱さを堪えている。さすがに声は立てないが、身体中をこまかく震わせている。

次の艾に火がついた。目はいよ／＼堅く閉じ、口は一文字に喰いしばっている。泣き出す一歩手前という形相である。  
「豊ちゃん、この位熱くないでしょう」

夫人は一向平気でこんなことを話しかける。豊ちゃんは返事どころかフウ／＼云っている。後に廻ってみると肩のカイラギ骨の下から、左と右に四つずつ黒豆のようにはれ上りぐるりはポツと傘を着たように真赤になっている。見るからにむごたらしく、今度は私だと思つと、二階へ

逃げて行きたい気持である。その恐ろしさの反面、子供の時から秘かにこい願っていた願望が、十数年振りでとげられるかと思うと胸が高鳴り、自分の心臓の動悸が聞えるようにで夫人にもそれが聞えるのではないかと心配した。

「豊ちゃん、あなたが余り熱がるから、家間さんまでが恐がっていらっしゃるわ。さあ、家間さんこちらへいらっしゃい。辛抱の出来

ぬような大きなお灸はすえやしませんから安心してね——」

「家間さん、本当におすえになるの、伯母さんのお灸は熱いわよ」

「さあ、肌を脱ぎなさい。豊ちゃん、いらんことを云わないで貴女もお手伝いしてね」

夫人は豊ちゃんと二人で両肌を脱がせた。「着物を着ていらっしゃるとお瘦せになっているようでも、やっぱり男ね。肥っていらっしゃるわ」

天花粉をボン／＼と背中打ち、平手でその上をなで、両手の拇指に力を入れて両肩を押す、

「こっているわ」

と、そこに黒点をつける。ひや／＼としてくすぐったい様な、何ともいえないぬ心持である。

夫人は筆を口にくわえて、背中を上から下へ押しながら、六ヶ所に点をつけた。

「さあ、はじめますよ」

新しい線香に火がつけられた。

いまか／＼と目をつむり、豊ちゃんがしていたように両手にあるだけの力を込める。豊ちゃんはいざという時、何時でも小母さんのお手伝の出来るようにすり寄って来る。

ブーンと艾の匂がしたかと思うと、ビリビ



りと、飛び上るほど熱く、「アッ」と声を立てた刹那、火が消えたらしい。

「何ですの、この位のお灸」

夫人は人さし指と中指で灸の両脇をしっかりと押してくれる。ホッと息を入れた時、又次の灸が肌に食い込むように刺す。

「伯母さん、家間さんのお灸は小さいのねえ。もっと大きなのをすえてあげなさいよ。今度のはこれ」

と、大豆位に固くひねった艾を出す。

「豊ちゃん、急に偉くなったのね。家間さんが済んだら、これを豊ちゃんにすえてあげるわ、ねえ」

「いやよ、いやよう、伯母さんのいじ悪る！ だって家間さんの余り小さいんだもの、男のくせに」

本当にすえられたら大変と思ったのであろう、逃げるようにして部屋を出て行った。

せっかくすえ出したのだから、一週間は続けなくちゃと、言われた私は毎晩食事が終わって寝るまでの一ときが、実は何より楽しく、日の暮れるのが待ちかねた。

夫人はさすがに灸をすえる名人であり、灸

穴のことも一通り心得ていた。下手な灸点師など夫人の足下にも及ばないし、又、夫人もそれだけの自信を持っている様であった。点の数も毎日増え、一日に二ヶ所ずつ新しい点

の火、二火が済むと後は余程楽で、飛び上るようなこともなかった。しかし、新しく付いた点は可成りこたえた。中でもひどかったのは足の拇指の先、爪と皮膚の間にすえられた灸で、その熱痛さといったら、これこそ本当に飛び上った。爪の皮膚の間へ木綿針をブスリと突刺されたあの痛さだ。

大分灸になれてからであったが、思わず声をあげた。そうしたときの夫人は会心の笑をもらした。火が点くと消えるまで指を強く持つて上下にこまかく動かし、熱痛をまぎらわしてくれたい「熱かったでしょう。息の



絶えた人でも、この点に小指大の灸を幾つもすえていると、息を吹きかえすと云われていますよ」

やがて暑中休暇が来て、豊ちゃんは国へ帰って行った。内の中は急にひっそりして、夫人と私の二人きりになり、灸すえもあれっきり忘れたようになっていた。私も勉強が一段落つけば国へ帰ることにしていた。

そうした或る晩、小用のため下へ降りると小母さんの部屋でウーム、ウームと呻き声がある。二階へ上ろうと思ったが余り苦しそうなので、

「小母さん、どこか悪いの？」

襖を開けると、目をつるし上げて苦しがつている。胃痙攣でも起こしているのではないかと、余りにも苦しむ方がひどいので、しばらく胸を押えてみてやったが治りそうもない。

「辛抱していらっしゃい、今お医者さんを呼んで来てあげるから、注射でも打っておもらいなさい」

立ちかけると、

「よし、いゝの……、お灸、お灸をすえて！」

半分うわごとのように呻くので、大急ぎで見覚えの灸箱を取出した。夫人は夢の中にあ

る人のように、指で「こゝ」とみぞおちの下一寸位の処を押す。さらにその左右に間をおいて二点、都合三点と、臍の下一寸位の処一点、しるしをつけさせ、少し大き目にひねった艾を「これをすえて」と出す。豊ちゃんでもいてくれたら手伝わせられるのにと、すえながら心細くなる。

「もっとよ、もっとよ」と命ぜられたまゝ、穴五十火もすえたらうか、お腹の中でグウグウツツと音を立て、それが私にも聞えた。「有難う家間さん、大分落ちついて来たわ」小母さんの目には涙が浮んでいた。

「ほんとにすみませんでした、もう一つ二つすえてね」

と云ってお臍の中を自分で押して、「こゝにねえ」と云う。

咄嗟の場合であり、私も裸に浴衣の細帯姿で、夫人も寝巻一枚で、しかもお臍の中に艾を挿し込んで火を点けるのだ。

書くわけのないようだが、そう手際よく行くものではない。私も夫人以上にあわてており、手際よくうまく点けようと思えばこそむづかしいので、大きいのを少し位ゆがんでもかまわずすえれば何んでもないが、そのかわりすえられる方は二倍にも三倍にも苦しい

わけだ。

「いゝのよ、もっと早く」

と云うので、それならばとつゞけさまにかまわずすえる。夫人は如何にも満足そうですっかり痙攣が治まったらしい。

「お臍はその位でいゝの、今度はこゝ」

と、腹巻を取って下腹部を指でおさえて「早くすえて頂戴、本当に落ちついて来ました。そこが済んだら寝かして上げるよ、いゝでしょう」

人の運命というものは思いがけない処で思いがけない結果を見るもので、夫人によって心秘かの灸すえられの願望がかなえられて、云い知れぬ悦虚の境地を味い、今また思いがけない出来事に会って、へどもどしているのである。

この機会を逃がしてはと心に鞭を打ち、云われるまゝに艾をつけた。

「駄目ねえ、そんなに恐がらないでもいゝでしょう。もっと思いついたのをすえて頂戴」この位でどうと、豆粒位に思い切りかたくひねった艾を出すと、じれったそうに、拇指程もある艾をピラミット型にもんで「これを」と出す。夫人の顔を見ると、三昧の境地にあるが如く陶然たるものがあつた。





## コレクション

(私のスクラップノートから)

佐次浩介

その後、御多分にもれず、人口二十万ばかりの中都市では、ヴァラエティ・シヨウの常打ちは不可能となり、青春地帯は、解散して座員たちは思い思いの道に、散らばって行った。私はもとく見習いであつたし、商業演劇で身をたてゝゆこうという程の、強い意志もなかったのだ、これを機会に上京し、ある私大の文学部に籍を置いて演劇、特に演出を専攻した。

そこで知ったのが小野田美子である。彼女は、同じ文学部芸術科の三年、つまり私より二つ程年長であつた。何故知ったか、という

理由は、アブの世界に生きる者のみが知る、あの眼だ。われくは、実に敏感に、相手の動作、眼の色から、彼女らが、われくの同志であるか否か、見わけける事が出来る。それは、われく異端者のみに許された、悲しい特権であるとも言えよう。しかし、直接に、私と美子とを結びつけたものは、やはり演劇のグルーブを通じて、趣味を同じくしていたからにすぎなかった。私は、彼女の特殊な性格を知ると、すぐに彼女と親しくなった。別にこうした事について、語りあうというよう

と美子とが、恋人同志であるという様に好い意味での誤解をうけ、冷かされもし、祝福もされたものであつた。しかし、実際には、私と美子とは、肉体的に、何の関係があるわけではなかつた。というのは、彼女は、私と同じサジストであり、しかも、それが同性に対してのみ作用するという、複雑な性格の持主であつたから、私たちは唯同病相憐れむの友人に過ぎなかつたのである。ところが、私はこの美子によって、その年の夏、非常に猟奇的な体験を強いられることになった。

美子は大部分のれすぼす達がそうであるように、一人のペットを持っていた。相良常代という、私と同学年の小柄な娘であつたが、

学内では、あまり目立たない存在で、実は私とも何回か話をする機会が、それ以前にあったのだが、うかつながら、私は、彼女が小野田美子のペットとして、十分な資格をそなえたマゾヒストであるという事に、その時まで気がつかなかった——。私達三人の間では、勿論美子が最年長であったから、何事についても独裁的な立場にたっていた。美子は、その日、私に対して、午後四時半に、自分のアパートを訪れる様に命じた。そのころの私は以前述べたように、サジストとしてもごく不馴れな、そして貧しい経験しか持っていないかったから、易々として、彼女の申出に、高円寺にある美子のアパートを定刻、ノックしたのである。が、中から開かれた室内には、何の変ったこともなく、美子が一人で書物を読んでいたらしい気配だった。

「少しおくれたわ」

と美子が言った。

「始めから男の人がいると、あの子が怖がるからね、半時間ばかり、お茶でも飲んで来て

——」

彼女のそういう言葉に、何も知らされていなかった私も、今、この部屋で何か美子になくらしみがあるのだという事だけは、察するこ

とが出来た。

小一時間たって、私が美子の部屋に戻った時には、ドアに鍵がかけられていた。

「だれ」

ノックの音に、彼女の声が、多少上ずって応えた。

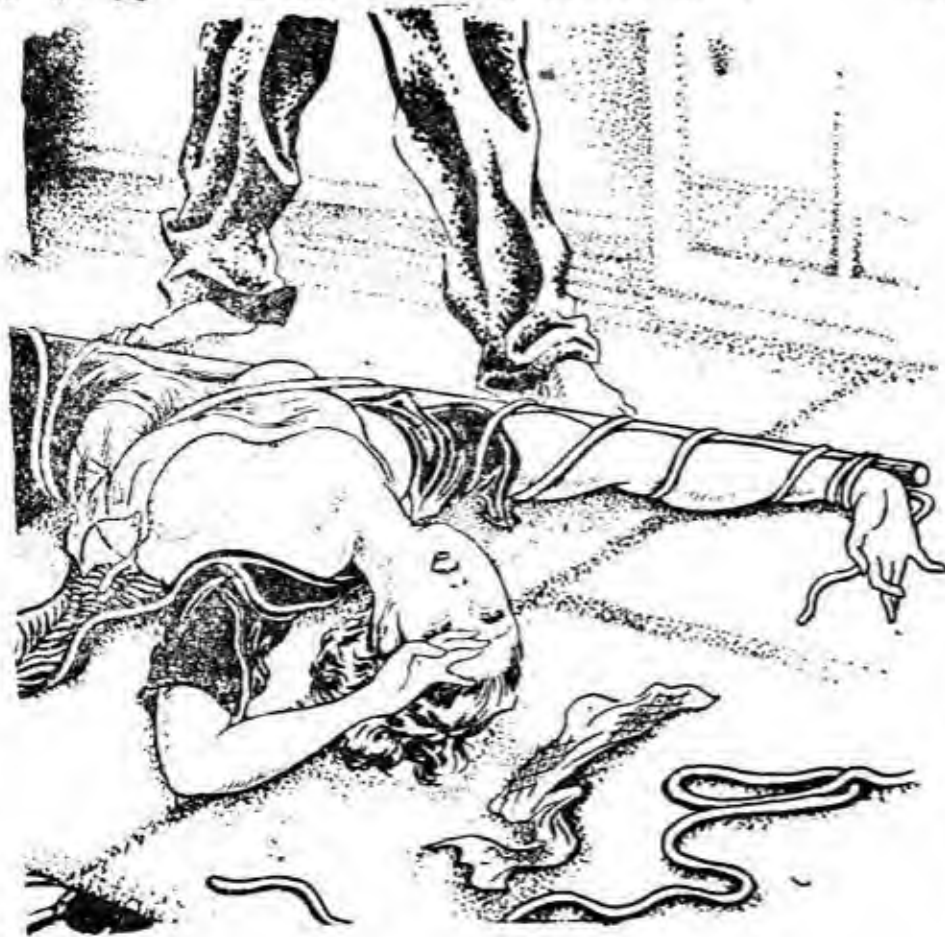
「僕ですよ」

それから、暫くの間部屋の中では何か言い争う気配が続いて、ドアが開かれると、私はアツと息をのんで戸口に立ちすくんだ。

「早く……、中へ入って」

美子は小声でさゝやくと大急ぎでドアを閉めた。そこには、いつも学校で顔を合わせる相良常代が、ブラウスの胸を半びらきにはだけ、横たわっていたのだ。私を驚かせたのはその事ではなく、彼女の一風変わった縛られ方なのである。

常代は、片手を思うさま上にのぼし、その手首を、真直な竹の先端にくくりつけられていた。それから、肘、肩、胸、腰、膝、足首と、丁度キウリのつるが、支え竹にくくりつけられる様に、順々にとりつけられ、その



右半身は、全くのび切って、一直線に固定されていった。そして、左半身は、全く自由なのだ。常代は、自由な方の掌で、顔を覆い、向うを向いて、動かなかった。彼女にとっても私の出現は意外なものであったらしい、その身体の様子から、激しい羞恥に、身を委せているのが、よく解った。

「常ちゃん、お客さまよ」

美子は冷やかに言った。彼女は、自分でし



かけた芝居が、筋書通り進行するのに満足し合せて、自分のベットの秘密の姿を、他人の前にさらすという、不思議な嫉妬に、サデイズティックな感情の湧き起るのを、じっと耐えているらしかった。それから、その部屋で何がおこったかは書き記すことは不可能であるが、私は、美子の監視の中で、常代に最大の羞恥心を味わせ、その短く、チリチリとまき上った彼女の腋毛を手に入れた事だけは記しておきたい。美子は、自ら求めた嫉妬に身を焼き、常代は、泣きじやくりながらも、マゾとして最大の法悦を味ったようであった。

私は、この事があってから、意識的に美子をさせた。私の様な、雰囲気重視したい者にとって、人格も感情も犠牲にする美子の態度が、極めて厭わしいものに思えたからである。常代は、相変らず、目立たぬ存在で、校内の片隅に、時々見かける事もあった。学生時代の私の経験は、前に述べた生活の影響で好子以外の女性に対しては、この程度のものであった。そして私にとっては、一生忘れられないドキッとした体験である。今にして思えば何と幼く、純情なサジストであった事だろうか――。

東京での生活は、やがて、終りを告げ、私は郷里に引こんだ。そしてある商事会社に勤めるようになって始めて私も一人前？ のサジストに成長したのである。それ以前は、もうお解りの様に、サジストとしても非常に消極的な、むしろマゾとサジとをつき合わせた様な生活が続いた（この事については、前に沼先生の両者の関係についてお尋ねした事でありましたが、マゾとかサジというものは、生来的なもので、混同される事などあり得ないものでしょうか……）

しかし、この頃から、私の生活は、全く本来のサジストとして、確立されてしまったのであった。

昭和二十八年、八月十日、佐藤絹子、二十六才、この欄には、一寸珍らしい位、太く長い腋毛が集められている。これは昨年の夏数人の仲間がすぐ近くの海に、一日遊んだ時の記録である。私は、泳ぎにかけては一応の水準に達しているつもりで、一寸自慢出来る、



腕前であるから、この日はまず、分不相応に英雄的であった。というのは、女の社員達の大部分は泳ぎを知らない者が多く、私が、彼女等のコーチ役という仕事を、自然受持つ事になったからである。私は得意になって泳ぎまわり、時には彼女等の手をとって水中をバシヤ／＼とやりながら引きまわしたり、急に手を離して、悲鳴を上げさせたりして、適当に楽しんだ。その中に佐藤絹子もいたのでは



ったが、彼女も又金槌組で、一寸手を離すとたちまち手足をもちき沈んでしまう。こんな所は案外サジストの秘かなよろこびがひそんでいるものだ。

私は、絹子の両手をとって、巧みに沖へ沖へと誘導した。彼女は一生懸命足をバタバタ動かしながら、

「嫌よ嫌よ、あんまり沖へ出ちゃ、怖いわよ、危いからさ」

夢中になって、顔に水をかぶっては、息苦しうに叫んだ。一入、豊かな頭髮が、ベツトリと頬にはりつき、海面にゆらゆらと流れて、日頃見られぬ凄惨美が一種のユーモラスな雰囲気と溶けあって私はそく／＼する位、面白かった。背の高い方で

「あらッ」

一瞬、ブクリと沈んだ絹子は、大急ぎで、私にとりすがろうとするのだが、私は三米ばかり沖に立ち泳ぎをしながら、彼女の様子を見

守って、手は触れさせなかった。真直に立つと、それは丁度絹子の身長と同じ位の深さである。彼女は、手を高くのぼし、ぶく／＼と沈んでは、水底を足で蹴り上げ、危く呼吸する事が出来る。

「た、助けてよ、うっ／＼早く……助けて……」

絹子は、潮水にむせび、せきこんでは又沈み、手で無茶苦茶に水面をかきまわした。

私は水中に潜り、彼女の横腹を抱いて岸の方に泳いだ。私の腕の中で暴れる絹子の、水中で引締った肉体の感触はコリ／＼とした弾力があり、身体をもちく度に、私の腕に、ぐん、ぐん、と独特なあの重みを感じられた。やっ／＼と、浅瀬につくと、絹子は、顔面一杯にべったりとへばりついた髪の毛をかきあげ「ひどいわ、私もう……」

うらめしうに私をにらみつける。

「あゝしなくちや、いつまでも泳げる様になりやしないよ」

私は無難作に言って、そのまゝ再び沖の方に泳ぎ出してしまった。

その後、絹子は、泳げる様になりたいという希望をあきらめたらしく、一日中水辺でバシャ／＼やっていたが、それからう／＼私



には口をきかなくなった。しかし女の気持と  
いうのは、全く解らないもので、あれ程私を  
うらんでいた絹子が、一月程すると、何かに  
つけ私に近づいてくる様になり、二度ばかり  
人目をしのぶ交情を交わした事もあった。

彼女、ミカ・ミズといつても、所謂

小姑型ではなくその不身持のために、婚期を  
逸したというタイプであつたから、同僚達の

## 【読者通信】

(投稿歓迎)

初めてお便り致します。昨年の  
七月号から秘かにK誌を愛読致し  
ておりましたが、とうとう恥も外  
聞も忘れて書かせて頂きました。の  
ぜひ貴誌に載せて下さい。私、子  
供の時からマゾの傾向を持ってお  
りました。この種の映画とか本  
だとかに夢中になります。いけな  
女です。今、或るキャバレーのダ  
ンサーをしています。時々お  
客様に頼んで縛って頂くこともあ  
ります。ですからK誌を読んでは  
るとたまらなくなります。でも  
色々とも足りない所がございま  
すので、我儘でしようがお願い聞  
いて下さい。御写真については、  
とってもうらやましい程御立派な  
モデルの方が、色々の形で縛られ  
ておられるのを見て驚いています

間でも、彼女の肉体を知っている者も二三あ  
った位で、私にとっては、何の魅力も感じら  
れなかった。

その彼女も、二十六才の冬、どうしたわけ  
か、貧しい年少の工員と不気味で恋愛して、結  
婚に到達してしまった。聞くところによれば

何でも、秋の祭りに、その男から凌辱された  
のが、キツカケであつたとか、或は、彼女も

私も志願したいのです。少し恥  
しい気もします。一度、モデル全  
部の方に出て頂いて、Kオンパレ  
ードのみにたいな事をやって頂きた  
いのです。自分でも猿轡をして頂くと  
すの、自分でも猿轡をして頂くと  
何んとも云えない気持になります  
ですから、出来るだけ色々の猿轡  
の御写真を載せて下さい。それか  
ら、私が女だからかも知れません  
けど全裸はなんともないやです。

やはりブラジャー、パンティ姿の  
方がいゝと思います。私も縛って  
頂く時はいつもその姿です。又、  
夏のドレスにサンダル姿で縛られ  
るのも、自分が本当に囚われた  
// っていう感じが出ていゝもので  
す。男の方が縛られたり、打たれ  
たりしているお写真はいやらしい  
感じがします。男の方はやはり//  
縛る方// になって下さい。前には

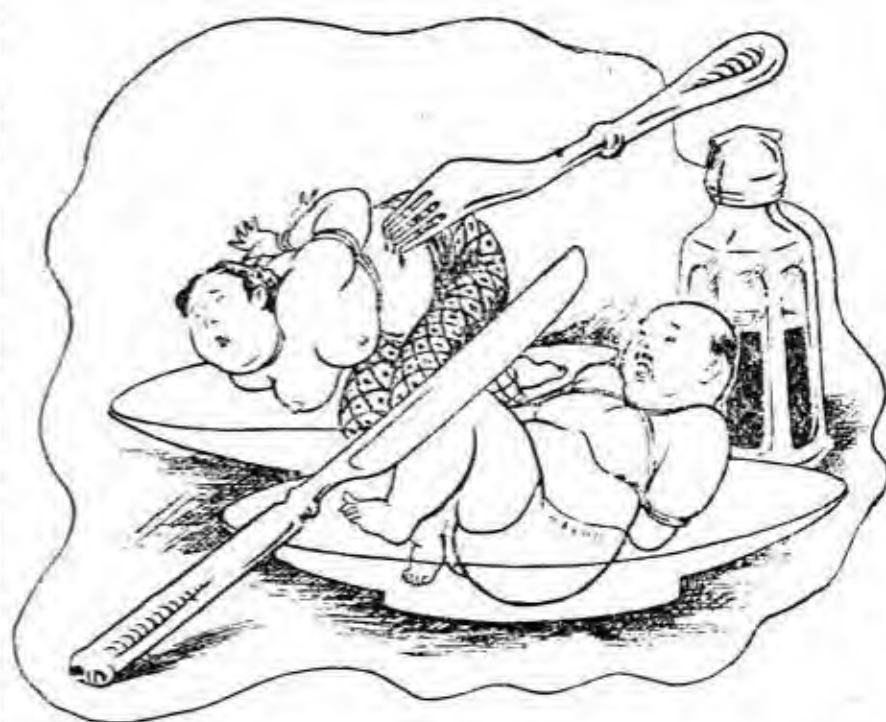
アブの一人だったかもしれないが、私にとっ  
ては、もう不要な女であつた。

しかし、私のスクラップ、ブックには、佐  
藤絹子の名前がいつまでも残り、私はその頁  
をひらく度に、何かほろ苦い微笑を禁じ得  
ないのであつた。  
(終)

よくありました。外国の女の縛  
られた写真が少なくなつてとても淋  
しい気持がします。今後どんな  
載せて下さい。御写真はなるべく  
沢山女の方が縛られていゝところ  
をお願い致します。記事の方もマゾ  
(男の方からはサド)の方をお願  
いします。それから、これはぜひ  
載せて頂きたいのですが、一ヶ月  
間の間に上映される映画の中で、  
女の人が縛られたり、猿轡をはめ  
られる場面の出てくるものを紹介  
して頂けませんかしら、いつも映  
画雑誌や、スチール写真で想像し  
て見るのですけれど、期待はずれ  
が多くてがっかりします。先日  
もお客様におねだりして見せても  
らいましたけど、かんじんな所が  
とても短くてがっかりしました。  
洋画、邦画どちらでも説明をお願  
いしたいのです。ちよつとした紹

介欄でも作って頂ければいゝので  
す。是非お願い致します。私、と  
てもたまらなくなつた時は、夜お  
そく帰って来てから鏡の前で自分  
の身体を縛ることにしています。  
先日お友達の方—その方は未亡人  
なので—に教えて頂いた縛  
り方で手足を縛って自分の口にネ  
ツカチーフで猿轡してお床の上で  
横になつていゝととてもいゝ気持  
です。この縛り方は本当に人に縛  
って頂いたように、きつく後手に  
縛ることが出来るのです。う  
っかりすると自分ではどけなくな  
って困ることがあります。その縛  
り方を発表したいのですがよろし  
いでしょうか、我儘な色々な願  
いお許し下さい。(東京伏屋春江)

○是非お送り下さい。お待ちしま  
(編集部)



## 第七天国の夢想家

麻生和夫

### (1)、曰く、「肥豚願望の男の

寝言」かくの如し、

天の邪鬼の私は、既に御承知の通り肥満したる男性及び女性、少くとも中肉中背以上の隆々たる、又は豊満なる肉づきの持主こそ私の恋い慕うイメージ。そして私自身も豚の如

き存在をこそ願うマゾヒスト並に露出狂。そして臭い鼻で犠牲者の裸体をさぐり、汚い舌で哀れな犠牲を弄ぶサジスト。肥満した中年の男性なら、男性もふいに詰滞という贅沢な私が、奇クに夢中になってうつゝをぬかすのも故あるかな。

肥豚は私の代名詞。食欲で穢汚で好色で、そして鈍感でのろまで人々に嫌われ、目をそ

むけられる獣。雄獣の手記の「豹兵」の如く「クリスチーヌの受難」のポールクルメルモン氏の如し。豚よ……そのくせにハムと来たら、お前の豊かなお尻りの肉は素晴らしい味なんだから、全く。……

現在、私は五尺三寸の短軀ながら十七歳、多少共ふくらんだお腹を撫でさすりながら人知れずほそく笑む身。奇クのモデルに応募し



て見るかな、いや本気ですよ。しかし、あんまり効果のある良いモデルでもないな。……チエツ、私の思いのまゝにロマンチックな豊かな肉体をくねらせてうめく女性もなし、私を縛りあげて鞭打ってくれる人もいない。こうなうなうは、いくら笑つても多量な……より他なし。

(2)、曰く、「何を見ても倒錯

のプリズムを通して見る奇

クの大信者」と、

去る五月三日、久し振りに大阪へ出た。退屈な汽車の中で、私の座席の前に坐っていたある夫人。その身だしなみや装飾品から見て相当な富豪の夫人といったタイプ、しかも未だ若く三十四、五か。勿論、何処の人か知る由もないが、実にいゝ肉づき、豊かな頬にはんのりと紅をはき、眼は鳩の如くクルクルと可愛い。普通の人なら「何だ肥っちゃよやないか」と笑うだろう。肥っていて結構。白い豚の如く肥えた夫人、豚にしては上品なその柔くむちりした手首にはめた金時計の鎖が、私の眼には……その夫人の両手首をき

ちりと繋ぎ合せた手錠の鎖と見える。そして私のムズ／＼と動き出した触手がこの肥満夫人を襲い、見る／＼夫人の見事な衣裳をむきあげて、一条まとわぬ丸裸にして、すました肉体の隅々迄くまなく探り、ところ／＼まわす／＼／＼しめ付けを、尚も探り、つねり、鞭打ち……。

私は、時々チラッチラッと夫人のふくらんだ下腹のあたりに目を注ぎ、和歌山市駅へ着く迄楽しんでいた。

それから南海電車に乗替え、満員の人の中で座席を得た私の隣前の紳士、でぶりと肥った重役タイプ、電車の振動でゆれる人波にその紳士の便々たる太鼓腹がいやが上にもつき出され、そのむちりした感じの下腹部から股のあたり、私の眼は無遠慮にその服を透視してむき出しの肉体を想像する。まるで女の如く、厭なと思いつゝも止められぬその盗視。表面済ましかえったこの男が、そんな淫らな心をもつて見られているとはつゆ知らぬ顔の紳士。全く、知らぬが仏とはこの事か、誰が知るだろう人の心……。それが幸でもあり、又不幸でもあるのだ。

堺が近づいた。おゝ、我々の聖地？ ともいうべき奇クの発祥地。思えば不思議なもの

である。奇クを知る迄、堺市は別に何の好奇心な印象を持つ町でもなかったのだ。唯、思い出の浜寺の海水浴場が堺市の南の端にあるのだけが心に残っていただけだが、現在、奇クの熱烈な愛読者の一人が傍をすぎて行く、整然とした舗装道路を歩む人々、恐らくその人々の中に奇クの特別会員も一人位いるかも知れぬ。この電車の中の人々にもいるかも知れないのだ。奇クの編集部の人々は何をしていることだろうか、私の便りみたいな全国からの読者の便りに欠伸を催されている方もあるだろう。併し表面は何のこともない、思えば不思議な人間の欲望……。こんな妄想に私は過ぎて行く堺市を見ていた。

大阪……。私は知らず／＼の中に新世界に出て、あのロータリーの彼方に群がる人々にまじり、パチンコの響とめしの看板の中に、騒がしいジャズの音に渦巻く新世界のなつかしさ……。それというのも、あの「淫火」の魅力がそのまゝこの新世界の魅力……。

私は、ぼんやりとその魅力をゆっくりと追い求め、松井女史を偲び、小百合夫人をした、私自身貴船一郎、又村山の如き、あてもなき焦燥と欲望が交錯する淡い苦悩を抱いて新世界の騒音の中をさまよった。恐らくあの

日、奇クの読者の中に私とすれ違った人は必ずいるだろう。ぼんやりした田舎者丸出しの私と……。

しかし、あのバラック建の興行小屋の中の荒々しい板にベタ／＼はられた絵は、あまりにも殺風景の幻滅。周囲があまり卑屈に灰色に沈んでいるからだ。私達は、あそこにはられた数々の写真の如き、犯罪的な残酷な陰險なサジズム、マゾヒズムは敬遠したいものである。私は、いつもそのくせあそこを覗くのだが、いつも変らぬ失望……。もっと何かを期待しているのだ、我々の期待する、近代的感覚を満足させてくれるから行く場所がほしい。自由なる憩の場所を奇クの特別会員が自由に利用し、自由に疲れた心とさすらえる肉体を休める場所が欲しいと、望むのは私一人ではなからう。

### (3)、曰く、「少女趣味のセンチメンタリズム」と、

私の過去の夢の如き、心の悶えを常に抱いて、それがためにとう／＼人生の第一歩を過りかけた古き私の存在を「肥満体への郷愁」(廿八年四月号)でお伝え致しましたが……。

私は、古き殻の捨て場所を奇クに求め、新しいこの道の希望に立ち上った。昨今も、矢張り私のセンチな少女趣味は拭い去ることは出来ない。

私は逞しい男性の裸体を夢に見るのも、私の少女趣味の現われであると思う。確かに弱々しい女にも等しい消極的な去勢されたような男。そんな一面もあるのだ。即ち、柄にもなく不細工な自分の容姿を忘れ果て、逞しい中年の男性に縛りあげられて責められてみたいと、しかも、ロマンチックに考えてみるのもその現われであろう。だから、かつてこんな詩を作ってみたこともある。

#### 初夏の夜、十時。

私は窓辺によって、ソと恋人の名を呼ぶ人目をはばかる、そのおののき。

重なり合って、茂みの奥の、

茂みの奥の重なり合った、若葉の中に、

夜の十時のくらやみの、若葉の中に、

浮び上る、私の恋人の肉体。おゝそれは人に言えない。私の恋しき……。

初夏の若葉の奥にのみ、隠れている。

いつ迄もあらわれない、茂みの奥で。

(昭和十七年)

赤面の至りだが、勿論、こゝでいう私のイ

メージは到底、友にも両親にも分ることのない私独特のイメージ。肥え太った男性、又気高く優しい豊満なる婦人であった。私にとつて、初夏から真夏にかけては大好きな季節。

私は、私の愛する紀の川の畔を何処迄も辿って行く。この清流のほとりに佇む時、去りし日の少年時代の夢が浮び上る。Y氏よ、あの遅ましく肥え太った隆々たる体軀、さんさんと輝く真夏の太陽の光を全裸の巨軀に受けてビチビチはね返るような筋肉の赤黒く陽焼けした輝きが、青い青い淵のほとりに仁王立ちになって水に写るその面影、たくましい引緊った顔に黒い美しい髭……。あゝ、その臉に灼きついた氏の全裸体を、私は忘れることは出来ない。

又、思い出は遠く浜名湖の岸の恐怖と虚無の世界。軍隊生活の中に別れたO氏の柔かい温顔にたゞえた微笑に飛ぶ……。私の思い出の絵巻は、私を尚もぐいぐいと夢の如き境地に誘う。去年の夏、チャリと見た思慕の情抑え難き某氏夫人の豊満なる肉体。そうだ、あの日は蝙蝠の飛び交う夕刻、私は白い夕顔の咲いている皮女の家の傍を通りかゝった、常々こゝの夫人の面影に、私の好みに相通ずるものが漂っていた。それがあの日であった。



偶然にも、その時の彼女は入浴が済んで流し場へ降り立ったところであったか、その浴場の窓は珍らしく開け放たれ、もうもうたる湯煙にぼんやり煙った電灯の明るさの中に浮び上った、一条まとわぬ夫人の裸像。私は思わぬ一瞬でしかなかった。

私は、そのチラッと見た一瞬に、夫人の頗る肥満した臀部の白さと、輝かしいばかりの脂ぎった全身の肉つきを……はつきりと、眼の奥に映画のフィルムの様にやきつけて、今に至る迄、その臉の裏のその一瞬の映像を時々浮び上らせては、ゆっくりと楽しむのだ。

三十五、六の肥満した人妻……「何だ、そんなおばあちゃんか」と言われる人が大部分であろう。しかし私は……私にはそういう人が私の心の糧に必要なのだ。

あゝ、私は、いつまでも儚い映像と夢想のみを抱きしめていなければならぬのだろうが、明るい地上で、数時間で命を失う蟬の如く。

#### (4)、曰く、「第七天国の住人」

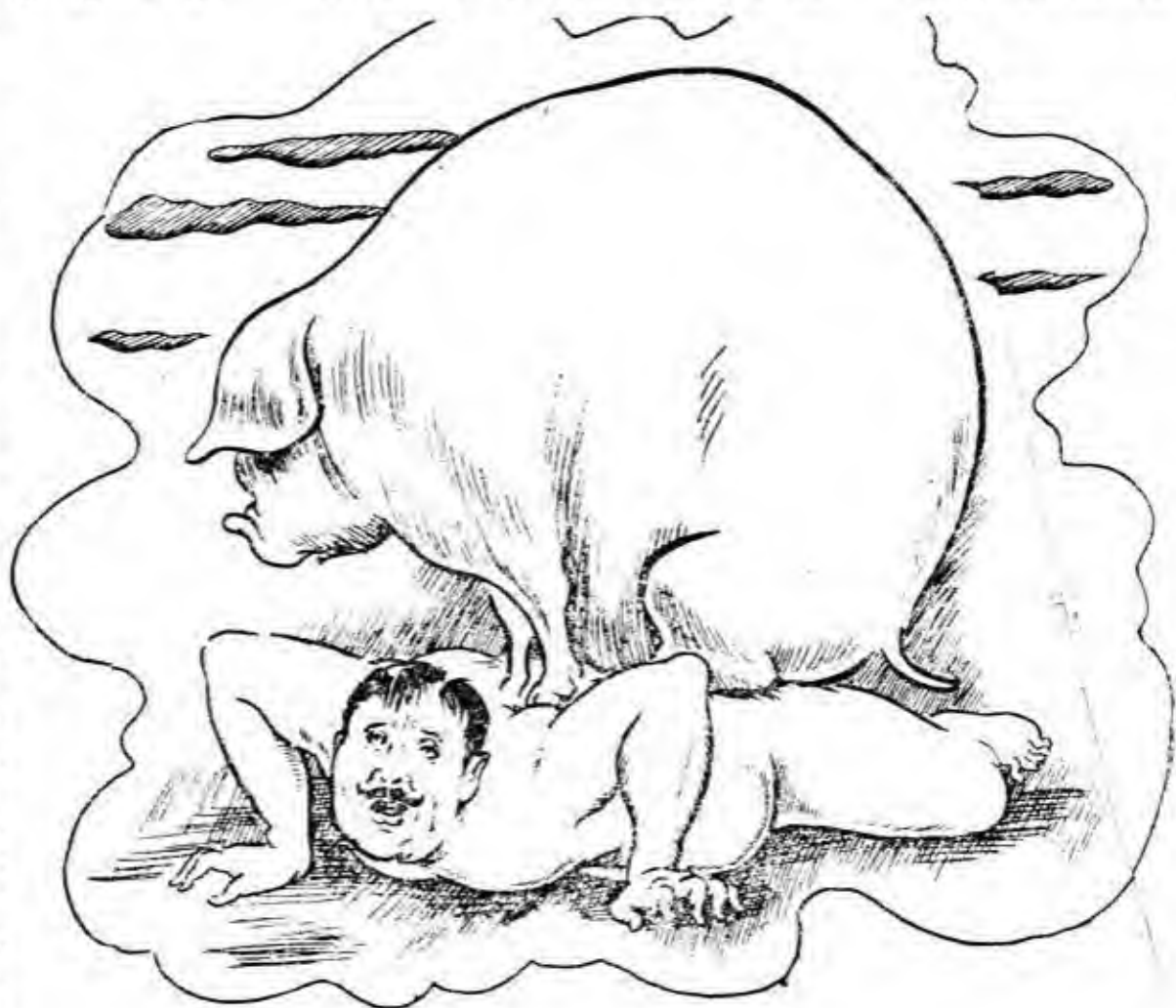
と

これこそ私の語る？夢想家ならではの境地。夢想家を冷笑される方があがるが、しかし私の夢に描く奇抜なる構想は、到底見えないからだ。

因みに、奇クに現われた告白の中で、最も身につまされこれなら実現しても私として満足すると思われるのは、唯一つ、嶽取一氏の一連の告白物であるが、私の以下描く夢は大政治家に於ても、どの様な富豪でも、会社々長にも到底なし得るものではないからだ。

私は第七天国。又の名を肥豚王国ともいう。私は決してその王様ではない。私はあく迄、日本から派遣されて客観的にこの国を探訪する特派員である。私自身名乗りたいたいののは、奇クの出現により奇クの特派員たらんことを。――

この国は聯邦みたいなもの。私は政治や法律に就いて詳しいことを知らないから、出鱈



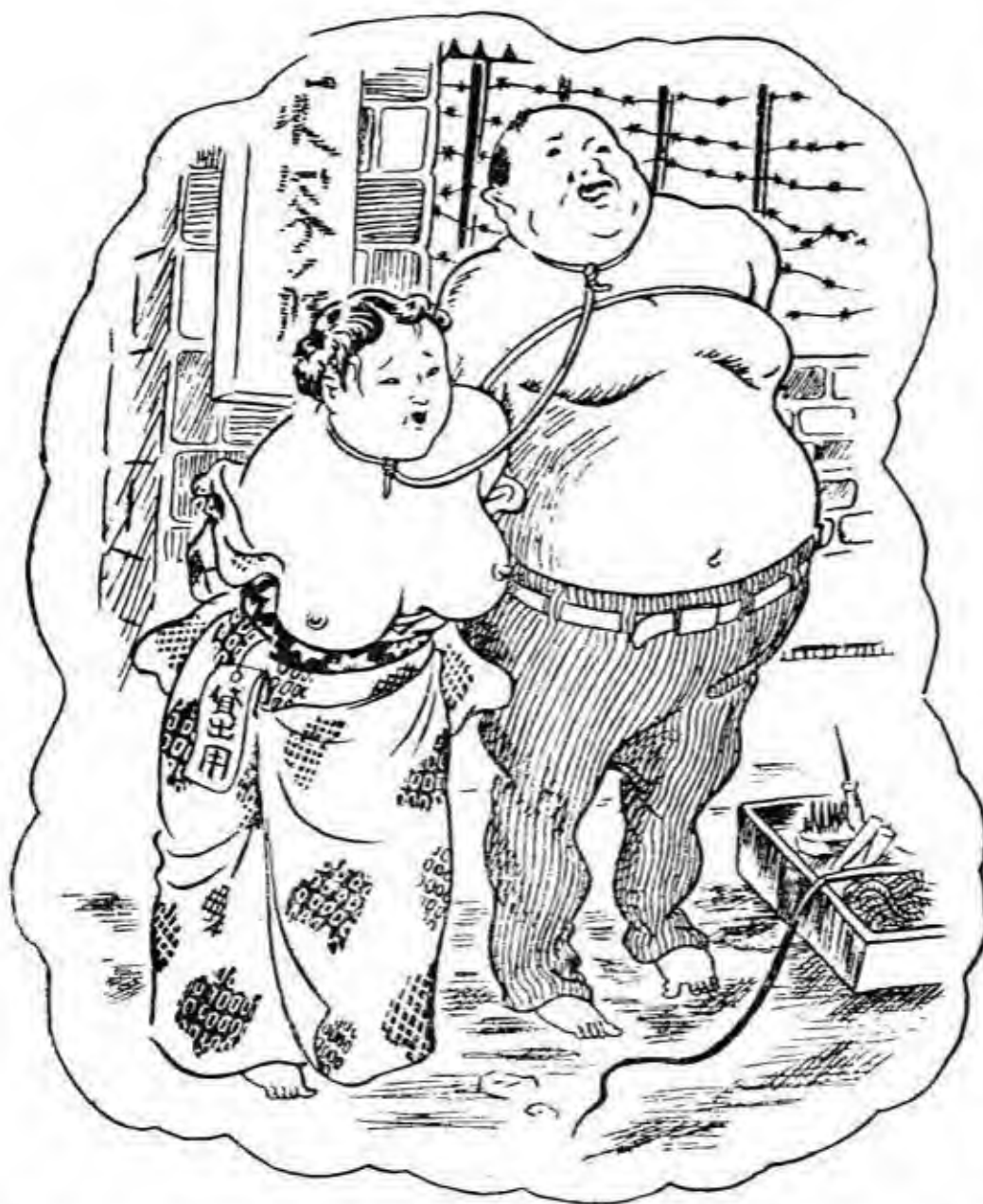
目極まるものであるかも知れないが、兎に角その出鱈目が取柄なんだから、二十六の区（区は県に相当する）に別れ、それぞれ特殊な特異性の政治法律によって、自治制が完全に行われている。或は江戸時代の様な封建的な

区、或は雑多な人種の入れ交る国際都市みたいな所等々。

私は所謂、私の本社である奇クの内容にふさわしい数々の倒錯？（この国では倒錯ではあり得ないのだが）的な催しや特異風俗やその他を訪れるのだ。昨年の四月号で一寸述べたように、偉大なる幻想王国では検閲もな

ければ軽犯罪もなく、それでいながら適當の秩序が保たれる。どの様な催しも、奇抜なグループも、趣向も自由自在。そして堂々と公開される。

それこそ、第七天国こそその妙味。如何ですか？大量虐殺も、どれ程残酷な刑罰も（これは私自身好まないのですが）お好み次第。人



権蹂躪もしたい放題。

中でも前に迷べたような隣国の捕虜達。それは、かつては強国を楯にこの王国を圧迫し、肥豚民族をあらゆる方法で迫害しおごり高ぶっていた国の人々。それが今や地位転倒して

哀れなる捕虜として、この国のある区に数十の收容所が設けられて、あらゆる凌辱と虐待と拷問に終始し、豚よりみじめなる終身奴隸として苦悶する、元大臣や会社々長、そして元高級将校……。或はその夫人達の豐満な肉体、又その娘達等々……。その毎日々々の收容所の日課の素晴らしさは、全く以って我知らず宇頂天になる程である。

申し込みによりその捕虜達を自由に借出す事が出来、この国の住民が誰でもその捕虜達を凌辱し拷問にかける事が出来たり、その捕虜達を使って種々の実験が行われ、又映画スターにしたてゝエロ映画を作ったり、激しい肉体労働に酷使して産業開発に寄与したり、動物以下の扱いにて或は全裸に、或は褌一つに、或は特殊なきもので、そしてその豚よりみじめな捕虜達は、ある特殊な方法によってでっけり肥り、男は立派な口髭をいつも奇麗に蓄え、夫人や令嬢の肌はあくまで美しく輝いているのが面白い処……。

その他、言いだせばきりがないので、今日はこれ位でおくけれども、その熱を冷ましておき、見れば他愛もない誇大妄想狂のたわ言かも知れないが、私には捨て切る事の出来ないユートピア。こせこせした不自由なデモク



ラシーなんて、もうあきあきしている。誰方が同行の士はありませんか、この新王国へ手を携えて船出する同志よ、来たらんことを。……又いずれ。

(5)、曰く、「のんきなマゾヒ

スト」と

昨年十月頃の事であった。小春日和のある日の午後、私は珍らしく温かさと留守と時間と三拍子揃った絶好のチャンスに恵まれて、平生から想像していたある行動にうつった。勿論、私にはパートナーのいない身、唯一人手にはKK通信第二号と幾条もの荒縄、鏡、これだけ言えば私は何をするのかお分りの事と思う。

私はムーンとするかび臭く、湿気のためこめる納屋の隅の一区切りの中へ、ぼろぼろの荒縄を敷いて丸裸になり、禪もとってしまつて坐り込み、光線と鏡を考えて漸くふてぶてしくなつて来た全裸に暫し見とれる。

さて、手を後に廻し幾重にも縄をかけ、足首へも太股にも、又股間にも丁度禪をしめる様に荒縄を巻きつける。KK通信の「責めと私」を読み乍ら、うなづきつゝやってみるがどうもうまくゆかぬ。C図迄はよかったがA

図の×印の場所に頭が入って、首へはまると折角の高手小手の手首がだらりと腰のあたり迄下つてしまい、何だかだらしのない上に手が勝手にほどいてしまえる。変だなと何回もやり直して見たが駄目。ボカンと丸裸であぐらをかいて、グルグル肉に食い込んでいる縄をみつめる。

改めて次は、丁度KK通信第六号の土山氏の如く天井よりぶら下る事にする。納屋の事故天井の梁はそのままロープを吊り下げられる。かくして私の場合は、全裸に荒縄で禪状にした後のみつの部分に、太い綱を使って作った手錠用の輪を結びぶら下ると、そのくさりの部分にあたるところが締め上げられる仕組み。台の上へ乗り、これからいよいよ責められる哀れな犠牲と観念の眼を閉じ、私を責める肥満紳士を空想し、鏡の中に哀れなる豊満な婦人のお尻——それにしても色の黒いお尻だな——の肉づきに食込む荒縄、なんていゝ気持ちになり、思い切つて「エイッ」とブラリンコンと大きくゆれたと思つた途端、ドスンとものゝ見事に私の全裸体は埃っぽい土の上へ叩きつけられ、後手の為ガンと顎を打ちつけて、眼といわず鼻といわず土の中へめりこみ、こいつはしまったわいと亀の子みた

いにもがくが締つた手錠は中々ゆるまない。芋虫みたいにごろごろと全身砂まみれ、口の中はザラザラ、これこそマゾヒズムの極致の筈だが、うろたえてしまふ情ない恰好であるチエツ、結び工合が悪かったらしい。

改めて今度は慎重にかまえて、漸くぶら下り目的を達したが、こいつは苦しい、ウンウンうなされてくるが一寸いける。鏡の中では肥満した紳士或は夫人が、自分の重量を天井のロープで手首と腹から股を通して締めつけた荒縄の禪に食い込ませて、ヒイヒイとうめく。苦しいのは承知の上だが一寸痛い。マゾヒストも楽じゃないわいと当り前の事を感心したが、とても辛抱しきれず放々の態で一休み。手首を撫で、やれやれマゾヒストの修業も並大抵じゃないわいと、真裸のまま煙草を一ぷくのんきなものなり。立派なパートナーがあつてじわじわ責めてほしいものだ。辛抱しきれないかもしれないが、そんな事は有無をいわさぬ人があれば仕方がない。

(6)、曰く、「サジストの小説

家」と

私は勿論小説みたいなものを作っている。

第七天国の方はルポルタージュ、こちらはフイクションの小説。勝手極まる違い方だがお分りでしょうか。舞台はあくまで日本内地である事がミソ。黒井珍平氏の言われた如く自分で書いたものはどうもあき足らない。段々と強烈になり詩的な形容詞はもどかしく、直感的な刺激の強い言葉を用いる様になり、血なまぐさくなると書く氣力を失って、全部話の本筋迄到着しない中に未完となってしまうのだから、始めの紹介や人物の証明なんてもどかしくなり、一氣呵成に本筋へと突込むのが特色となる。御退屈でしょうが一つ紹介させて貰いましょう。

或る会社の社長（言わずと知れた肥満していて立派な髭をたくわえている）が、下男として使っている男に欺かれてある所へ監禁され、種々の拷問を加えられて、夫人（やはり肥った三十三、四位の頗る肌の美しい上品なる夫人）をおびき寄せられてしまう。

そこで汚い野卑な毛むくじやらない不具者の仲間三人に、夫人は夫の目の前で憎まれ口を聞きながら真裸にむかれて、あらゆる汚辱と苦痛をこの夫婦が味う。そして自由にさせる道具として二人の間の可愛い子供をつかわれては、親の情愛としてこの肥満した親達は悪

人の言うまゝに、氣狂い踊りを踊り変な恰好をしてはすかしめられる。

これでは普通の筋書きだが、私はこの光景を、その卑しい恐らく梅毒性の赤黒い吹出物を身体中にブツブツと出している男達の言葉ばかりで表現したい。題して「憎まれ口」。しかし文才のない私にはとても充分なる表現が書けないのが残念。以下は自分一人の淋しい自己満足。

「へへへ、大変いきのいい奥さんだな、そう大きなお尻を振って暴れられちゃ堪えられねえや。どうでえ、旦那さん、え、口髭の大将社長さん、え、口惜しいかい、大事な奥さんを手込めにされて、目の前で、ホラこの通り桃色のお腰一つにむかれて、これから氣持よさそうにゆさぶるのを黙って見てなきゃならねえのは……」

「へッへッへ、奥さん、あまりモジ／＼するんじやねえよ、ホラ、腰巻の中から真白い太股がチラ／＼、へッへッへ……」（中略）

「さ、御馳走のお代りをしましょう、へへへホラ、こんどは何だと思う？ あっし等の禪と申すもの、ホラ、お口をあけて、今日は奥さんの為に特別念入りに、醬油で煮めた様な垢まみれのやつに糞と小便、奥さん等の仲間

じや何と言うんだい、お小水、え？ おしっこ？ えゝそいつをこってり包んで栄養満点だ、あっし等は食べ物が悪いから臭も悪いが、味は又格別だぜ、へッへッへ、こいつを口一杯に頬張ってじく／＼噛みしめてごらん一寸いけるぜ、フッフ、さ、お口をアーンと出来るだけ大きく開けて厭がっても駄目さ、フッフ、ホラ、お嬢ちゃんのを又聞かせましょうか、ヒイツってやつを、それが厭なら、ホラ、このツーンと鼻へしみ込むやつを奥様どうぞ、旦那さんはそれからだよ、うんいゝ子だ、フッフッフ、中々よく入るお口じやないか、ホレ、ホレ」（中略）

「さ、いよいよ除幕式を行うとするか、さ、辰公、三公、いゝか、見事な肉づきの奥の奥を拝ませてやるぜ、へッへッへ、ホラ／＼、一寸めくりあげて見ろ、たまらねえぜ、さ、奥さん、いよいよ最後の一枚とおさらばするかね……ハッハッハ、いくら股をすぼめても駄目だぜ、おい辰公、もう少し滑車を廻しな、そうだ、奥さんが爪先でお立ちになる位、そう／＼、フッフ、苦しいし恥しいし……旦那さんが可哀想に赤くなったり青くなったり、鼻をヒク／＼させてらあ、目をつむりたけれどつむれない悲しさ、フッフ……、お



嬢さん、おかあさんの豚みたいに肥った大きい美しいお尻を見せてあげるよ、いゝかい、おかあちゃんとお父ちゃんが二人でいゝ事をした罰に、おかあちゃんを今ヒイ／＼と泣かせてあげるよ、ね、おかあちゃんの顔泣きかゝっているだろう……さ、現われ出ますは、見事なるお尻、この紐をゆっくりほどこいて、さ、見ていなよ、皆……ソラ／＼ズルズルスル／＼、ハハハ、もがくと余計に落ちるのが早いぜ、ハハハ、どうだい、えゝ、こゝん処よ、凄えじやねえか、嬉しくってゾクゾクするぜ、えゝワツハツハツハ（中略）

「どうだい旦那さん、ハハハ、分ったかい、よく御覧になってましたかい、フッフ、奥さんしっかりしなせい、まだ／＼面白い事は山程残ってるんだぜ、これ位の事で喜んじまっちゃ、へへへ、嬉しかったかい奥さん、三公、何だだらしがねえな、いつまでも……、さあ一寸休憩するか、それから次は何をして遊ぶかな、二人お尻を並べて皮の鞭でビシビシ、どちらが早く破けるかくらべるか、それとも蠟燭の火で綺麗な肉を所々あぶってあげようか、それとも二人の氣狂い踊りをヘト／＼になる迄真裸で踊らせてあげようか、楽しみだね、フッフ、まあゆっくり次々とやっ

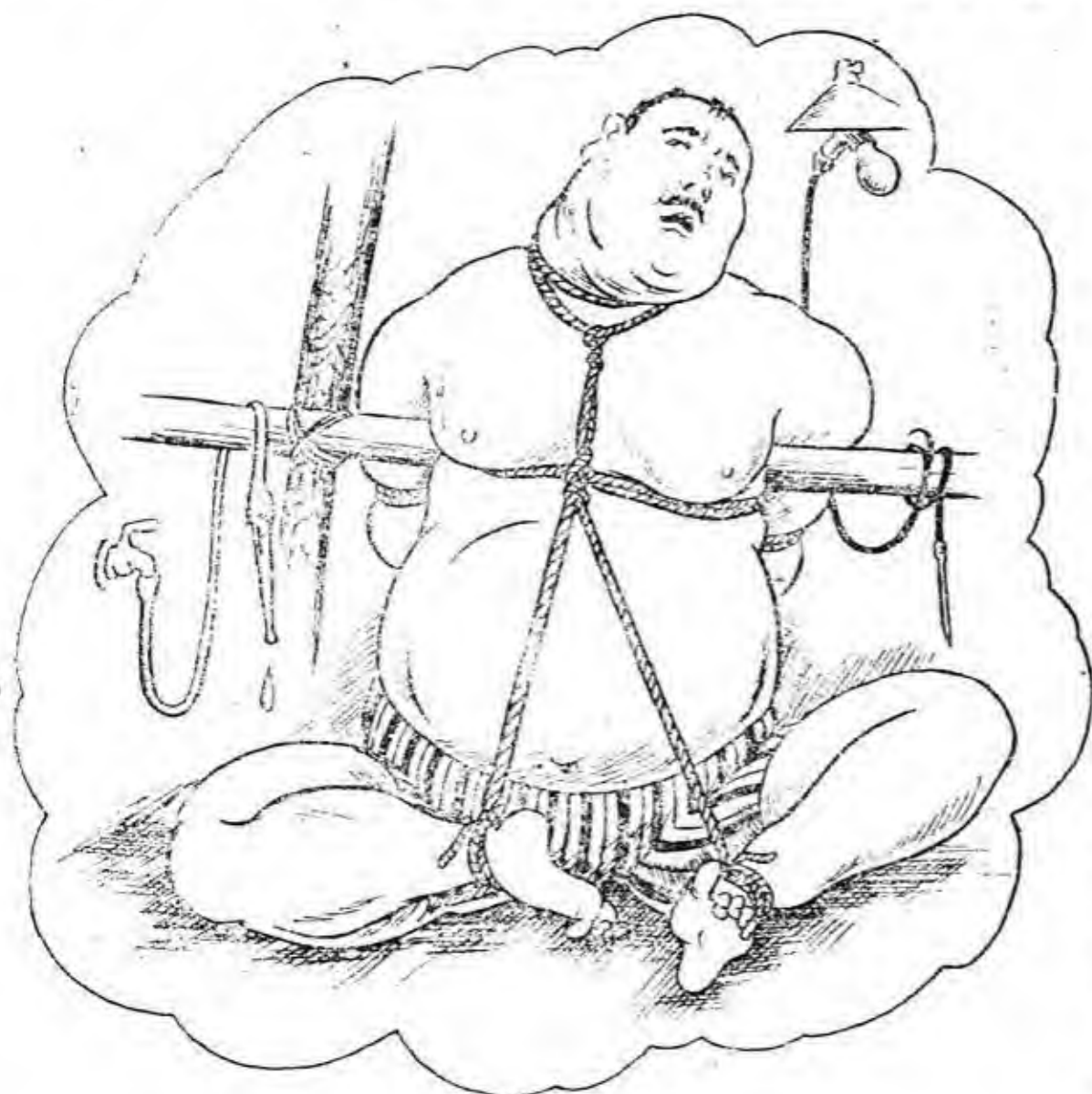
てあげるからな、なあに、中々殺しやしないよ、殺すには勿体ないお二人だからな、殺すにしても存分もてあそんだ上、なぶり殺したな、指を一本／＼切り取ってあげるよ、御夫婦の身体中の毛という毛を一本／＼むしってな、……フッフ、

奥さんのその大腿の裏の柔かい白い肉はスキヤキにしたら旨かろうな、フッフ……」以下略。

如何でしたか、どうもとりとめもなく失礼致しました、悪しからず。

(7)、曰く、「私は真面目な人好みである」と人がいうこと

私は多少甲斐性がないながらも、



よき夫であり、よきパパであり、よき下役であり、よき先輩であり、世間の人は真面目だといってくれるし、頗る人が好いそうだ。人の善いのは本当らしく、こんな恥しい告白をヌケ／＼と並べたてる処を見ると、頗る

世間知らずのお人好しである事がお分りでしょう。それでいいのです。私が若し、もっと気が強くて甲斐性があったて人が悪ければ、きつとある犯罪と迄はゆかずとも、私は世の人に白眼視される立派な悪人になったてでありましょう。偽善者。そうです私こそ偽善者であり、いわゆる七重人格者なんです。しかし、それを苦にして煩悶の日を送ったのは過去の事、私は今或る程度安らかな気分を抱えています。だからこそ臆面もなく以上の告白が出来たのでしよう。

これから未来、どのような事が起り、どのような事件が展開するか非常に興味のある課題です。又私が幾才で死ぬかそれも分らないながら覚悟を決めねばなりません。大きく出ましたが、私は死ぬ迄自分の内心に燃える情慾の炎、淫火と言わせて頂きますが、この淫火を愛してゆくつもりです。決して消そうとは致しません。その様な偉い努力よりも、人間はそれをどうして利用？ するか、自己を焼き切ってしまう様子を深い思慮の下に、その淫火により冷たい人生を温くほのく、と明るいものにしてゆけないかを考えるべきであると私は思います。

私は始めに言った様に七という字を愛し、

私のよき先生であり、私のよき恋人であり、私の保護者である人の出現を必ず待っています。私の目の前にでっぴり肥った肉体を露わに微笑を以て現われる人の必ずある事を。それは空しい夢であるかも知れませんが、この世の中にそういう人がいないとするならばそれは致し方のない事です。しかし埋もれている宝を掘出す様に、私はあてもない漂泊の心の旅を続けるのです。どうか、いゝ年をしてまだ少年少女の夢みたいなき事を云わずに居られない私をお笑い下さい。

そして私は舞台が一廻転した時、私の如き倒錯の心理を抱き悶える青少年があると聞けば、私は自分に出来得る限りの事をしてやりたい。私自身おかしい憧れかもしれませんが、数年後尚健康であるならば、私は何んとかしてでっぴり肥り、鼻下に立派な髭を貯えた自分をつくりたい。多少でも満たされぬ思いを自分自身によって慰める為に、そして奇人と言われ、変人と言われようとお構いなしに、私は私の日常をスリルと変化に満ちた変った生活をして見たい。これが念願です。私の残されたたった一つの望みの綱で、私は今からその心の準備を整えています。

現在、又過去の私の抱いていた心理に似た

欲望を抱く若い人達の為に、私自身の経験からしてそのリーダー的役割は墮落でもなく、反道徳的なものでなく、寧ろその反対だと信ずるからです。私はその少年の為に喜んで裸体になり、縛られもし、又鞭打たれも致しましょう。私はその少女の為にずかしめも苦痛も喜んで辛抱しましょう。又私はその少年少女の為に、勉めて明るい正常な心理の推移と知識を広めて安心感を与える為に、現在の奇クの先輩諸氏の豊富なる経験、知識を教え、頂いて我が心の糧とし、又次の世代の若人の為に尽さんことを……。

## 告知板

前号の告知板にて本誌の寄稿家

投稿者、の住所の照会は固く御断りする旨御願ひしておきましたが、其の後もそういう照会が多数参って一々御断りするのに困惑しております。今後、そういう御問合せは絶対下さらないように御願ひすると共に、若し再びそういう通信がありましても御返事は差し上げないことをこゝに申し上げておきます。  
(読者係)



# 女<sup>メ</sup> 闘<sup>ト</sup> 美<sup>ミ</sup> 考<sup>コ</sup> 現<sup>ゲン</sup>

## 土 俵 四 股 平

### メトミフエース

メトミフエース、そんなものがあるのだろうか？ ある、大いにある。如何に美貌であつても、メトミ顔でない女性は一見してわれ／＼鑑賞者の感興を失わしめるのだ、雑誌の口絵や挿画に於ても同断である。

吉祥天や弁財天の相撲も面白いであろう。

ヴィナスや、マドンナのレスリングも悪くない。だがソレがメトミの珠玉であるといえるか、いえないかは疑問である、美女や美顔が必ずしもメトミと一致しないからだ。

頭髮については、前号で語ったから省略はするが、髪を無視して顔は論ぜられない故に今一度、頭髮は黒色、古典版では、相撲髷か観音髷と題を定め、現代版では、黒髪のパーマでセット無用の断髪と限定する。

先ず上から筆をすゝめるとして、前額即ちオデコの問題であるが、俗に猫ビタエと称するものは不向きである、といって高峰秀子君のようなのもチョット困るが、やゝ広い方がよろしい、突出しているということが意識されないもの、スロープ型もいけない。

### 尻 上 り の 眉 毛

眉は強い個性をあらわすもので、これもやや尻上りがよいが、笑った場合に柔和なものにならないような、アノ病的な眉はダメだ、発毛状態は密で太いめがよい、眉墨の御厄介にならなくてもよいのが最高である。

その下の眼は、マブタの肉付がよくて、一重の方が精悍でよろしい。目尻はやゝ釣ったもの、ただし狐サンはいやだ、黒眼勝ちで、光沢があつて、清浄な眼を第一位とする。発

情によって色相の変化を示すのはこのましいが、平常から血走ったり、黄色く濁っているモノは落第である。

### ツケ睫は不可

次ぎに睫だが、歌劇女優や、レビューのツケ睫のようなのは感心しない、演技上大切な眼の感覚を、かえってにぶらす結果となるから普通でよい。眉間にカンシャクの縦シワのある顔もさけない、マブタの肉の薄い奥眼やアイシャドウを入れたもの、金魚のような出眼も排斥する。日本の女性の眼は、マブタの肉の豊なところに長所がある、だがお多福の面や、能面の小面のようなはいけない。

第三は鼻である。鼻は高いものも、鋭いのも面白くない、重厚な方がよろしい、ダンゴ鼻や獅子鼻も困るが、鷲鼻やカギ鼻など最悪である、鼻翼其他が可愛くて肉のある曲線的なのが望まれる。

### やゝ受口が最上

第四に口だが、唇の薄いのはイケナイ、土人のように厚いのも問題だが、やゝ受口で、口を閉じると、口角がやや上り気味なのがよく、全体からいうと「へ」の字形がアクセシ

トが強く出ていゝ、ルーシユはウスく塗るこ  
と、自然色に近いものを選ぶがよい、歯は勿  
論皓歯で、血色のよい唇、光沢のあるものは  
ど紅白の配色が結構である。

第五は顔だが、ウナギ骨の張ったのも好ま  
ぬが、逆に三角形の頬のおちこけた顔で、鋸  
いのは一番いけない、こゝで頬のことにふ  
れるが、豊頬で、血色がよくエクボが入って  
(片エクボの方が印象的でよい) うっとうし  
くない程度のタレ頬がよろしい、肉がたるん  
でいて、相撲の際に頬が目立ってゆれるのは  
よくない、顔のない顔も大嫌いの一つである。  
首を少々下げると二重顔になるといった肉付  
が理想である。

最後は耳であるが、これは肉のゆたかな円  
弧に近いものが最上である、耳輪の外上方に  
ターイン氏結節(耳介結節)のあるのは不可、  
耳垂の豊満な、俗に「福耳」と称するものを  
可としたい。

### 鎖骨が見えない

顔の話から胸へ飛んでは早過ぎるが、頭に  
首はつきものだから、首の段もついでに申し  
ておく、首に筋が見えるのなど真平御免であ  
る。鎖骨の存在が不明瞭だといった肉体が干

高のもので、僧帽筋の発達したのがよ  
い、長い首も短いのも共によろしくな  
い、まだ短い方がましで細いのは絶対  
にいけない、見ていてもたのもしくな  
いからである、職業レスラーのように  
顔の巾と同じというのも愛嬌がないが  
折れるケネンの皆目ないことが第一条  
件である。ドイツ女にはそんなのが沢  
山いるが、日本の女にはそんなのはあ  
まりいない、求めれば海女からであ  
る、彼女達のグループからなら困難  
ではない。

### 挑発的な斗力美

以上クドクと顔について並べあげ  
たが、結論は？というところ、一見して闘  
志の盛上った闘力美が挑発的にあふれ  
ている顔をメトミの女王座にすえたい  
ということだ。禪をしめさせなくても  
四股を踏ませなくても、彼女達二人を  
対坐させれば、その必要もないかも知  
れぬほど、眉宇に、口もとに、眼光に  
頭髮に、イヤ顔一パイに、戦事中流行  
したあの「ウチテシヤマン」の魂、メ  
トミの上からは「組まんぞ」闘力が、





喰りをひそめている、そういった顔をメトミ  
フエースというのである。

## 大映の京マチ子

映画女優の中から、それに近いモノを撰ん  
で……といった人があるが、プロマイドから  
探しても、ソナのはそう容易に出て来ない  
ッ京マチ子一人位がその撰に入るように思  
うが、素顔を並べて審査するのではないから  
外にアルともナイとも確答が出来ない。かえ  
って市電や市バスに乗っていて、フトこれは  
イイナと思う女性を発見することがある、外  
国映画の女優中にもないことはないが、私と  
しては食指が動きかねるのである。

## 黄金座は仕切

メトミとして顔がものいう場面はいろ／＼  
あるが、何といってもソノ黄金座は、女相撲  
の仕切にあるといふたい。左右に別れた東西  
の両女力士即ちメトマーズが、両手を下して  
睨合った時、その四ツの眼を主役とする大ド  
ラマは、なまじ組合って、花火線香のように  
はね廻っている際より幾倍か深刻である。  
本人同志も息が止まりそうだというが、鑑  
賞者も同じ思いである。かって八重桜ッこ

と北海千珠子に、女相撲に勝つ「虎の巻」を  
尋ねたら、「仕切った時、どんなに苦しくて、  
も、相手の女から決して視線を外さないこと  
です」と答えた。八重桜と名乗り、その四股  
名のごとくケンランと咲き誇った彼女だけあ  
って、不敗の勇婦北海千珠子は、けなげにも  
必勝の急所を、多年の苦しい経験から発見し  
ていたのであった。彼女は言葉をついでこう  
もいった。「もし仕切の際、相手から視線を  
そらせたら、出足はにぶるし、力量や技は自  
分の方が多少上位にあっても、苦戦は覚悟せ  
ねばなりませんわ、気負なんですもの、一勝  
負中は受身で闘わねばなりませんもの……」

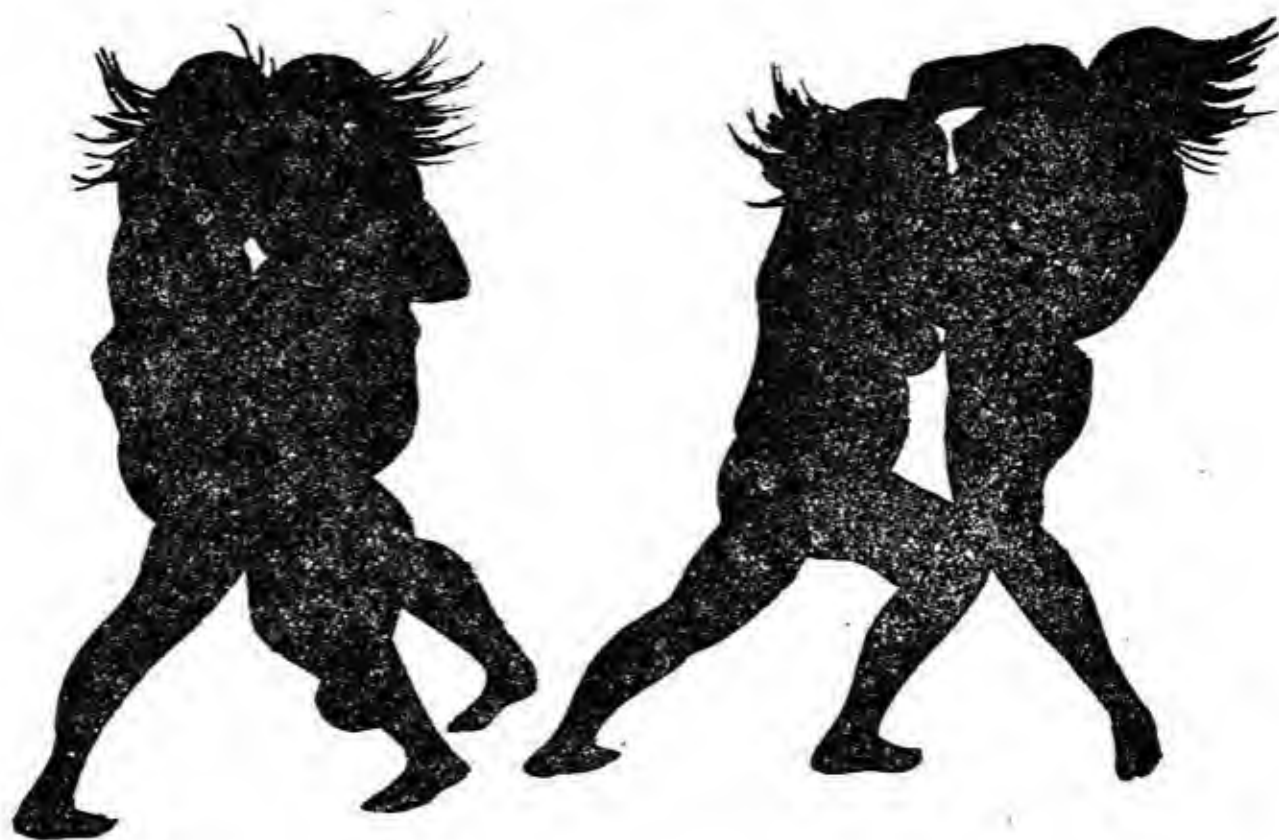
## 乳房を狙う女

そこで筆者が「じゃ双方が睨合ったまゝ立  
ったら五分かね？」ときいたら「五分とは限  
りませんが、気負けがないだけ楽に取れます  
わ、相手が突いて立つか、フトコロを狙って  
組んで来るか、およその予想がつかますもの  
双方が立つ気になる迄に、チラ／＼と眼を動  
かせていますから、相手の作戦はその視線の  
動きと目色でほぼ分りますもの」「じゃ立合  
に、相手が張手を使うとかいったことがかい  
？」「えゝ勿論ですわ、女同志ですもの乳房

を狙っている女など、ヤハリ乳房へ視線を投  
げますものね、左か右か？、どちらへ来るか  
分っていれば、モウこっちのものです、ど  
んな相手でも、双の乳房へかゝって来ること  
はありません、両手で突いて来てもキツト左  
右に強弱の差があります、掴んで来る時は片  
方に限ります、左右どちらかの手を差して、  
あいた手で掴むんですからね」「君の第六感  
で左右どつちかへ来ると分ればドウ出るんだ  
い？」分ったら私の方で作戦をしますもの、  
反対に相手の乳房を襲ってやります、大抵は  
右を差して左手を胸へかけてきますもの、こ  
っちは左四つに寝込んで、ガツキと四つ相撲  
に組んで、腰がすわれば先手をうって、右手  
で素早く相手の左乳房を掴上げて氣勢をくじ  
きます、乳房は右より左が弱いんですものね  
……」「そこまで研究しているとは知らなかつ  
た私は、「北海、君はスゴイんだな、何でも  
知ってる」といって笑ったことがある。

## 相手の乳がにくい

リーダーとして私もいろ／＼なことを教え  
てやるが、女は女で真面目に苦勞して研究し  
ているのかと思うと、可愛くもいじらしくも  
感じた。「何故ソナ乳房へ目をつけるんだ



い？」ときくと、北海はチラツと私を睨むようにしながら、「何故ってことはありません

けど、相手のソレが憎らしいんですわ  
一番目立って自慢そうに張っているん  
ですもの……相手の乳首が立っている  
のが分ると、無精に腹が立つのです  
……」  
「今迄君が相手にとった中で誰  
の眼が一番苦手だったかい？」と質問  
を戻せば、「そうね、誰かしら……  
そうね佐々木さんの眼かしら……」  
佐々木というのは、二年前まで街娼を  
したりドサ廻りの芸人になったりして  
いた十九才の娘で、身丈も北海より一  
寸は高く、体重も十六貫を越え、喧嘩  
なれた度胸のすわった横浜育ちの女だ  
った、私に柔道や空手を教えてくれと  
ひつこくせがんでいた事を思い出した  
精悍なエネルギーのあふれた肉体の持  
主で、乳房なども北海より立派だった  
し、彼女のマル／＼と発達した腰と、  
たくましい腿は何よりも印象的だった  
其上に勝利に対して飢えている娘だと  
いうことが、その眼光から燃えるよう  
に感じとられた。佐々木は私の門下生  
じやないから四股名はやらなかったが  
比較的よく均齊のとれた肉体は美事だと思っ  
た。八重桜千珠子が、彼女を強敵として警戒

し、好敵手として作戦対象として注目してい  
たことは宜なるかなといふたい。二人が四つ  
に組むと、五尺三寸余の佐々木の乳房が、北  
海のソレを組織くように上から抑えるので、  
北海は口惜しがって或日北海から掴みかゝっ  
たことがあり、双方共相手の左乳房を驚掴み  
にして相責めの大相撲を取ったことがあった  
爪は切ってあるとはいふものゝ、互に相手の  
乳首へ拇指の爪をかけるので、「水だ／＼」  
と引分けたものゝ佐々木は二十五才の女にな  
りきった北海を相手に廻しながら、泣声一つ  
たてずに、相手の手荒い乳責めへの奇襲に  
たえ、もし筆者の引分けが手間だったなら、  
局面は一転して北海の方が苦戦となって、土  
俵上で大喧嘩になったかもしれない、引分け  
た八重桜の乳房をあらためると、二条の蚯蚓  
ばれと、紫色の爪あとが無惨にものこされて  
いた。

### 勝に飢えた娘

縷々述べてきたが、メトミフェイスについ  
て四股平がいわんとすることは、どうも筆舌  
ではつくせない感がある。といって幾度も似  
たことを繰返しても、読まれる方々に迷惑と  
なろうから、まず当らずといえども遠からぬ



## 告白と手記と体験

## 懸賞募集

## ★賞金★

|    |       |     |     |
|----|-------|-----|-----|
| 優作 | 一篇に付き | 三千円 | 若干篇 |
| 秀作 | 一篇に付き | 二千円 | 若干篇 |
| 佳作 | 一篇に付き | 一千円 | 若干篇 |

## 規定

- 一、枚数は一篇十枚から三十枚程度まで
- 一、必ず未発表のものたること。
- 一、原稿第一頁に懸賞告白と朱記のこと、原稿の返却は致しかねます。
- 一、締切は定めませんが入選作品は最近号に発表します
- 一、賞金は入賞作品発表と同時に御送りします。

## ◆告白記の募集◆

- 一、上記の懸賞とは別に月例通り皆様の真実あふれた告白記を募っておりますから、どしどしお寄せ下さい
- 一、文章の巧拙や長短、用紙、書き方等一切御自由です
- 一、投稿者の本名や其の他一切の個人的秘密に関する事は厳重に秘匿いたします。誌上への発表は匿名で結構です。
- 一、誌上へ掲載した分は掲載後相当謝礼を差し上げます
- 一、原稿は御返戻申し上げかねますが、係よりの連絡は差し上げます。
- 一、原稿の御送付には開封の上第五種郵便(百瓦迄八円)にて御願います。

(編集部)

簡潔な言葉でソレを表現しておこう。幸にも私のペンは前述の中にその字句を見出していた。曰くメトミフェースとは「勝利に飢えた娘の顔」というところへ落着くように思うのだ。浴衣がけの娘二人をつれて歩いていても風にゆれ無心にふれた筈の袖と袖にも、何となく互にからみ合い隙あらばムンズと組まざるの下心、組んだ袖と袖には、その縫糸が千切れんばかりに、上下を争わんとする閨魂が浴衣を形ずくる一本／＼の糸のはしにまで、いやその浴衣を染めている色目にまでニジム

がように感じられるのである。ソコに娘の持つ闘志、メトミ娘の敢闘精神がほとばしるのである。昔は女の黒髪に妬心を盛って、黒蛇となつて噛合うと見たであろうが、考現のメトミに於ては、静坐し相對する二女の閨魂は病的な黒髪や、そのような繊弱な部分にはなくて、大地のように動かない、アノ健康な筋肉の盛上った腰部や腹にあるといえる。そうだが眼と眼の挑戦に答えて、おうといつても立上れる原動力は、たしかに二女の腰間に蓄積されたエネルギーに相違あるまい、この巨砲

堅塁ありてこそ、互に落着きはらつて、美しい笑顔を見せあつて話しあえるのではあるまいか、勇力あつての平和であり優美なのである。女といえどもメトミの城を主宰する一城の主であるのだ。メトミフェースは、たゞ単に顔ばかりにあるのではなくて、ブラウスの内、ブラジャーの下に息づく乳房の顔に、大海の如く静かな女腹の顔に、神祕を守るデルタの顔にも「勝利に飢えた顔」はあるのだ。

次号は乳房の巻



春

天和三年八月、松本領は未曾有の凶作に襲われ、百姓の疲弊困憊はその極に達していた。灼けつくような日照りが、二ヶ月来一滴の雨も寄せつけず、みる／＼領内の田畑を灼き尽した。村々の百姓共の絶え入るばかりの祈りも外に、青く澄み切った空は鮮かな色を見せて、何時雲を呼ぶとも知れなかった。田は乾き切って到る所深い亀裂を生じ、道端の雑草も赤茶けた葉を力なくたらしめていた。その中を時折、熱風が黄色い砂塵を捲き上げて通り過ぎた。人の影は無かった。死に絶えた様な静寂が村々を包み、僅かに瘦せ衰えた野犬が、よるめき／＼してあてどもなく徘徊した。

封建制度の圧政下、しいたげられた民が団結して、はかない反抗を試みた百姓一揆、その庶民の生活の裏にかくされた女体嗜虐の歴史は、又、赤裸々な人間本能の露呈でもあつた。

片 矢 薫

一

揆

の

花



松本領の南端、その被害の最も大きい上萱村では、今日も大勢の村人達が名主の善助の家に集っていた。庭の涸れた泉水の見える座敷で名主の善助は、村人達を前に撫然と手をおいた儘、一言も発しなかった。夏の暑気は簾越しにこの部屋にも、むん／＼する熱気を送り込み、集った人々の生気を失せた生蒼い顔に、脂汗を絶えずふき上がらせていた。



「一体、どうなるこった」

「そうだ、この日照り続きはお上でもとっくに御承知の筈、それなのに、上租米は平年通りとは、血も涙もないお仕打ちじや」

「然も、今年に限り、額踏み三斗五升。わし達はもう飢え死にするのを待つばかりじや」

「喃、名主様、なんとかしなけりや、わし達は、もう生きる元氣も失せてしもうた」

村人達は口々にこう言いつのり乍ら、お互いに顔を見合わせて歎息した。善助にすがってみたとして、どうしようもない事は判っている。乍ら、言わずに居られない憤りを村人達は感じているのだった。

これより先、松本領では打ちつゝ凶作のため、上租米の恩赦を願ひ出る者は、領主松平家の門前に跡を絶たぬ有様であった。収穫のない百姓にとって、平年通りの収納は、自分達の糊口をつなぐ食糧を上租しても尚、負い切れない負担であった。平年通りの上租は言わば、百姓達の命取りであるとも言えた。それだけに、必死の歎願は夜と昼となく、一つの大きな叫びとなって松本領の隅々にまで響き渡った。

上萱村でも勿論、毎日／＼妻や子の不安な眼差しに送られて、郡奉行所へ詰めかける百姓達の姿は絶えず、奉行所の門前には、垢に汚れた手拭を首にまきつけ、血の氣のない素足をなげ出した儘、坐り込んで動かぬ者が次第に数を増した。

郡奉行、山形仁兵衛は、つい先頃、この地に赴任した許りであった。新しい奉行に一縷の望みをかけていた村人達も、やがてそれが全くの徒勞であることを知らねばならなかった。奉行仁兵衛は決して村人達に逢おうとせぬ許りか、配下の者達に命じて、門前に力尽

きて坐り込む百姓達を邪慳に追い立て、猶従わぬ者には容赦なく杖を振り下した。瘦せて骨ばかりとなった百姓達は、頑丈な杖の前に、微かな悲鳴を上げてのたうち、逃げ散った。その中には、真向から杖を肋骨にうけて一瞬に絶命するという犠牲者まで出る始末であった。

やがて村人達の怨嗟の声をよそに、村の辻々には郡奉行の名になる高札が立ち、道行く人々の眼を奪った。

一、収納の事、平年通り申しつける。

一、当年は特に額を踏み磨き置くこと。

一、期日厳守のこと。

寅八月五日、領内百姓中へ

山形仁兵衛判

従来、上納していた額は、額を着けたまゝ収めるのが普通であった。それが、特に当年に限り額を踏み磨かなければならぬということとは、それだけ百姓の負担が加重されることであつた。然も、額をつけたまゝの一俵と、踏み磨いた一俵とは、凡そ三、四升のひらきがあつた。勿論、それを見込んでの仁兵衛の計算であつたのだが、平年通りの上納さえ絶望的な百姓にとって、この新しい負担はたゞ苛酷という外はなかつた。

高札は人々の驚きと悲しみを嘲笑い、荒れた田畑を傲然と見下す様につゝ立っていた。村人達は最初自分達の眼を疑っていた。然し、それがどうにもならぬ現実と判ると、それが一つの大きな憤り、悲しみ、絶望、憎悪の織り交つた一つの感情の塊となつて体内を激しく駆け廻るのを感じた。

高札の前に立ち止って歎息する老婆。何時迄もその場を立ち去る

うとしない若者。群衆は口々に奉行仁兵衛に罵りの言葉を投げかけてやまなかつた。

「何が仁兵衛じや、仁兵衛どころか、鬼兵衛じや、悪兵衛じや」

「黙っていては殺される」

「そうだ、鬼兵衛をやっつける」

村人達は口々にこう言い乍ら、然し、唯一人として動く者はなかつた。長年封建政治の鉄鎖の下で虐げられて来た百姓達には、それに対して真正面から打当って行く勇氣は、勿論、あろう筈はなかつた。唯、口々に罵り合い、心ゆくまで憎むだけが精一杯の許された反抗であつた。

善助はそういう村人達の顔から目を背けるようにしたまゝ、心の中は重い暗澹としたものに閉ざされていた。善助の家は、代々名主の役を継いで来た由緒ある家柄である。先祖の中幾人かは、こういう事態に打当っているかも知れない。今こゝで自分が、何等なす所もなくこの儘目をつぶって過せば、先祖に対しても一言の申し開きも許されまい。名主の役を退き、一介の百姓として世を逃れねばならぬ。然も、百姓達の苦しみは文字通り塗炭の苦しみである。これを救うには身を捨てゝかゝらねばならない。

善助は、くらくと眩暈を感じ乍ら、眼の中に入り込んで来る汗を拭いて空を見上げた。碧壁の空は、憎い迄に澄んで雲一つ浮いていなかった。

その日も暮れて、次第にのめり込んで来る絶望に、村人達が帰つて行つた後、善助は独り居間にとじ籠つた。先祖の名誉にかけても村人達を救わねばならぬという氣持が、何となく善助を軽い昂奮に追い込んだ。そして、行燈の下でそつと短刀を抜いてみた。冷く砥



ぎすまされた短刀は、何かしら善助の心をゆさぶるようにキラ／＼と光をはね返した。じっと見つめたまゝ善助は、何時の間にか入って来た娘の千絵にも気がつかぬ程、気を奪われていた。

「お父様」

この千絵は、十九という年令にそぐわない落ち着いた娘であった。

善助が妻を失って以来、ことに善助の相談相手となり、又一方、多忙な家事一般も一人で切り廻した。それが、早く千絵を成人した女らしい落着と、思慮を与えているのだった。

そう呼ばれて善助は我に返り、刀を収めて事もなげに笑った。

「この刀を見ていると、心が安らんじゃってな」

「ねえ、お父様、この村人達の急場をどう切り抜ける、お心算ですか」

それに構わず、千絵は父親の苦悩の中に刺刀のように入り込んで行った。娘として、父親の立場を案ずるのは勿論であったが、それより以上に、千絵の血の中には、代々の名主の血が音を立て、沸き返っているのだった。

「百姓衆は、このまゝ泣寝入りしては、あまりにもみじめでございます。わたしは、それを黙って見ているには耐えられません。お父様のお考えを仰言って下さいませ」

爪実の白い顔にぼっと血の氣を浮き上がらせて、千絵は次第に昂って来る氣持を押えきれず、言い続けた。

「力を合わせるのです。百姓衆の力を合わせて、奉行所に当るのです。この苛酷な収納を廃し、村人衆を救うのです」

善助は一言も洩らさず、苦しげに千絵の眼から逃れるようにその席を立ちながら、

「千絵、判っておる」

と、思慮に思いあまった声を残しながら部屋を出ていった。嘗ては、あれ程飛び交っていた螢も、今は何処にいるやら。無情な月影が庭の植込みを煌々と照らし出して、くっきりと孤を描き出していた。

## 二

奉行所ではその日、何時もと変わらず朝からの酒であった。奉行の仁兵衛を囲んで配下の納手代達が揃って、口々に仁兵衛に対して阿諛の言葉を連ね乍ら盃をくみ交していた。だがその日の仁兵衛は、最初から不機嫌であった。仁兵衛の手許には、上宣村百姓一同の連署による免租の歎願状が入っていた。そればかりか、仁兵衛の許に集る情報は、日に日に不穏な百姓達の動きを聞くばかりであった。

仁兵衛は、始めにうんとときつく言っておけば一寸の身動きもなると、早のみにしていた百姓達の案外の粘り強さに少なからず意外であった。と同時に、得体の知れない不安に締めつけられるような焦りをも感じ始めていた。仁兵衛は一座に並んだ納手代達の顔を、不快げに一わたり見廻してから言った。

「百姓共は一揆を企んで居る由じや、領主松平侯御出府中の折柄、このようにかゝる不祥時を起しては、お前達は勿論、このわしも申し開き一つ出来ない。留守家老大井殿には、かゝる時こそ、百姓達の忠節の尽し時と、収納にはきついお達し、今こゝで百姓達に不穩に動かれては、この腹切っても申訳が立たぬ、お前達、一層百姓共の監視を厳重にして、みだりに騒ぐ者はすぐ引っ捕え窮命せい」

顎から耳にかけての毛深い顔、無氣味にくずれる尖った頬のゆが

み、陰險な尖を帯びて睨まれると誰もが背筋に刃を当てられた様にすくむのだった。

その中、一座の一人が言った。

「その張本人は、名主の善助かと思われませんが、早速きやつめを取り押えて、処罰なされては——」

小者らしい単純な言い方であった。仁兵衛はその男を嘲笑う如く眉をひそめると、

「たわけたことを、歎願状は穩便な言い条じや、これしきのことで善助を捕える口実にはならぬ。又、徒党を組むとは言え、何等の証拠もなきこと、徒らに人を縛るわけにはいかぬのじや、善助を捕えるには動かぬ証拠が要る。証拠がな」

何かを含んだ言い方であった。

「皆、百姓達の動きに氣を配るのじや、分ったな」

納手代達は一樣に頭を下げた。仁兵衛が奥へ入った後は、又酒であった。溺れるばかりに浴びて歌い、民百姓の悲憤とは、まるで別個の世界の様に贅に満ちた場所であった。然る納手代達の心の中には、こうした現在の満足な境遇にひきを入れようとする百姓達への腹立たしさが一樣に芽生えて来るのだった。

こうして八月も漸く初旬を過ぎた頃の或る夜、血氣盛りの若者達の一団が奉行所の門前で、仁兵衛に悪口を叩くという事件が持ち上った。その夜は、何処で手に入れたか儀衛門という百姓の家で酒を飲み、村の若い連中が酔った勢いで奉行所の門前に集り、口々に

「鬼兵衛、悪兵衛」

「早くくたばれ」

などとはやし立てた。



その声を聞きつけて、門の外へ飛び出した一人の納手代は、棒を振って若者達を追い散らそうとした。だが、手に手に鋤、鍬、天秤棒などを持っていた百姓達は、

「お上の権勢を笠に着て、役人くんと、何が役人だ」

「百姓を干乾しにする敵だ」

「懲らしめてやれ、やれ——」

と、よってたかつてその納手代に襲いかかった。百姓達は勢いのつて、納手代の頭といわず背中といわず所嫌わず力任せに打ち据えた。暫くして、百姓達が吻と手を引いてみると地面の上に口から血を流してぐったりしている納手代の息はもうなかった。

「死んだ——」

その中の一人が言うのと、皆は一瞬、酒の酔いも覚めて俄かに浮足



立った。同時に、広場にかけてつけた外の手代達の姿を見ると、一齊に踵を返してちり／＼に逃げ去った。勿論、若者達であつただけに逃げ足も早く、手代達が追掛けたが、勝手知った村人にはかなうはずがなかった。

その中、若者達を追掛けた手代が次第に帰って来て、仲間の死骸を挟んで口惜しげに佇んでいると、山の方に走った二人の手代が一人の女を連れて帰って来た。

「この女は、仲間の一人に違いない」

「この女に聞けば、犯人も判る筈じや」

手代が言つて、両脇から抱え込んでいた女を突き放した。女はよろ／＼とよろめくと、崩れる様に膝を折った。

人妻と見える三十余りの、髪を無造作に束ねた痩せぎすな女であつた。

「お主は何処の者じや、名は何と言ふ」

女はそれに応えず、白い眼で手代達を見、役人への憎悪がこびりついているのであろうが、

「放して」

と言ひ放つと、さつと逃げかけ様とした。手代の一人が慌てゝ襟首を掴まえると、

「仁兵衛様に申し上げてこの女を窮命しろ」

と、門の中へ連れ込んだ。

この女は、奉行仁兵衛にとってよいきっかけとなつた。仁兵衛はこの女を責めてみれば、案外百姓達の動静も分り、意外な収穫となるかも知れぬと思つた。

女は、ただ木の実を探しに山へ行つていただけで、決して若者達



の中には交つていなかったと力説した。仁兵衛も、この女の言う事が嘘でないことを次第に認めねばならなかったが、仁兵衛としては絶対に逃がしてはならない四であり、一つの手がかりであつた。

「嘘もいゝ加減にしろ、お前があゝの連中の中にいた事を見た者が何人もいる。あゝの連中の名を全部白状するがいゝ」

仁兵衛は早速、翌日から女の噂にかゝつた。女はこの村の中農

である甚三という百姓の女房で、とせという名前であった。甚三といえは村の重立った百姓の一人である。仁兵衛は収穫の大きいのも満足であった。

仁兵衛は、今迄の経験からして、生易しい吟味では仲々思う通りの白状を得られないことを知っていた。然も何となく焦立っている気持が、仁兵衛のとせに対する取調べを一層苛酷なものにした。

とせを裏の土蔵へ入れた。外見は土蔵であったが、この建物は、いわば拷問部屋であった。仁兵衛と、それにとせを捕えた二人の手代が入って、土蔵の扉を締めてしまうと、いきなりとせは着物を剥がれた。とせは氣丈な女であった。

「何、するんだ」

と暴れたが、男二人の力にはかなわず、そこに組伏せられ、襦袢まで剥がれた。手代は上半身を裸にすると、荒々しく後手に縄をかけた。

「このわたしを、どうするんだ」

「うるさい！」

仁兵衛は形相凄まじく怒鳴った。仁兵衛のそうした時の顔は、ひきつったように凄味があり、残忍な性質が脂ぎった顔ににじみ出てくるのであった。氣丈とはいえ、そこは女だけに、とせはすくんだように口をつぐむと、急に恐怖を面に表して身震いした。

仁兵衛はとせには一言も訊かず、手代に命じて腰巻一枚のとせを吊り下げた。次第に事の残酷さに驚いたとせは、下肢をふるわせておのゝいた。仁兵衛は更に命じて、足を縛っていた片足の縄だけを解かせた。とせは片方の足一本だけで吊り下げられるという恰好になった。全身の重みを片足にかけて、更に片足は宙に浮いてもがく

ばかりであった。

とせは、あゝっ、あゝっ、あゝっ、と言いつら、必死にそれでも足を並べようと努力した。仁兵衛は平然とそれを眺めていた。時が次第に経つにつれてとせの片足は、だらりと下り氣味になった。高い声で呻き乍ら、腿のつけ根からはり裂ける許りに片足を下げた疲れ切ったとせは、羞恥も忘れて片足の安定にあがいているのだ。た。やがて仁兵衛は手にしていた乗馬用の革鞭を、発止とその体に振り下した。

「ひえっ」と、とせは絶叫して足を上げた。仁兵衛は落着いてそれを見た。又、片足が下る。再び革鞭が容赦なく皮肉に喰い込む。何度か繰返す中に、片足は次第に動きが鈍くなり、打下される鞭にふりしほるような悲鳴だけが答えた。

何時迄も平然としている仁兵衛に、とせはあるだけの力をしばって言った。

「何が聞きたい、何でも言う。おろして……」

仁兵衛は待っていたとばかりに、にやりと薄笑いを浮べると、

「一揆の張本人は誰だ」

と聞いた。

とせは答えなかった。というよりは応えられなかったのである。一揆は何処にもなかった、従って張本人もいない。とせは

「そんなものは——」

ない、と言う心算であったが、もう物を言う力もなくなっていた。頭へ集った血が逆流して、今にも耳から血をふきそうであった。

「村の寄り合いに出ている、重立った者の名を聞きたいのじや」

仁兵衛は更に言った。そして眼の前にぶら下っている白いむき出



しの肉塊が、すべての鍵であると信じている仁兵衛は、追求の手をゆるめなかった。  
黙っていると、せの下腹部に再び革鞭が躍った。柔い肉に喰い込む



☆

鞭は悲痛な音をたてゝ鳴った。

手代達は眼を背けていた。手段とはいえ余りにむごたらしい有様であったからである。もっと奇麗に色気たっぷりに責める手もあるのに、と、その一人は考えていた。

とせが気を失ってしまうと、仁兵衛は苦り切つて土蔵を出て行った。手代はとせの身体を降すと水をかけ女の肌を舐めるようにして眺めつくしていた。

勿論、とせの拷問はその日一日では終らなかつた。翌日も翌々日も、土蔵の中からはとせの絹を裂くような苦痛の音が、高い明り窓から洩れ流れた。

三

この事件をきっかけに、百姓達と奉行所との対立は明瞭化し、具体化された。とせを救え、という声が期せずして全村の百姓達を一同に結びつけた。勿論、奉行所の前で罵言をはいた若者達が行方も村人達を勇気づけた。

善助は、役人達と村民との軋轢には絶望していた。出来ることなら事をあらげなく済ましたいと思っていたが、もう穏かに済む道は塞がったのである。そして、これまで来た以上はとことんまで斗い抜いて、そして勝つより外に方法はないと思った。手代達の善助に対する監視も日毎に嚴重になっ

た。従って、善助の気持も次第に落着いて行った。

或る日、娘の千絵に言った。

「わしは、もう覚悟を決めた。若しものがあっても歎かないだけの覚悟はあるうな」

すると、千絵は冷いばかりに愕然として、

「出来ております。御心配なく村人達のために斗って下さいませ」

と答えた。が、その後で眼を伏せると、

「とせの身の上が案じられます」

流石女らしく、とせの身の上を心配するのだった。

「とせは今にきつと救われる。村人達さえ力を合わせれば、もうすぐだ」

善助は口だけでなく、心からそう思っていた。そして、本当に奉行所と対立して完全に勝を収めるには、もっとく強い組織と力を養わなければならぬと思っていた。今迄の百姓根性から離脱して、身を捨て、大勢を救う精神を叩き込んでおくのが、何よりも先決問題であった。それが單に小さな上租米の問題に止らず、百姓対武家の相互関係を改善し、将来の礎を築く機会でなければならぬはずであった。

善助は閉じていた眼を開くと、目の前に坐っている千絵を見た。

二十年近く手塩にかけて育てた娘の顔がそこにあった。肌の細かい瓜実の、艶々として立派に成長した女であった。教えた事もないのに、何時しか先祖の血を受け継いで、女にあり勝ちな執着もなく、村人達のために全力を傾けている千絵が、善助には、はっとする程眩しく見えるのだった。

それだけに、又格別の未練もあったが、善助はそれを振り切るよ

うにして立ち上ると、

「村の主だった衆に連絡を頼む」

と言い捨て、居間の方へ歩いて行った。

その夜、善助を中心に村人達の会合が、ひっそりと開かれた。納手代達の眼をくらすために、会合は村外れの汚い廃屋で行われ、その席上、善助は、

「こうなった以上は、もうわし達も決心するより外あるまい」

と、村人達の決意をうながした。

破れた屋根から洩れ入る月光が、一座の人々の顔を蒼白く照らし出した。

「勿論、わし達は命を投げてかゝらねば事の成就是望めまい。捨石じや、捨石になるのじや」

善助の声も悲痛であったが、聞く人々の顔も悲痛であった。善助の考えとして、禁を犯して直訴するか、奉行所に焼打ちをかけて百姓達の気持を示し、藩に対して反省を促すか等々の事を述べた。

すると一座の長老が、善助についておもむろに言った。

「留守家老大井は、今度の納租の親玉じや、藩に対して直訴などしたら大死も同じこと、それよりは、一刻も早く江戸へ上り、江戸在勤中の松平侯に直訴すれば、万が一つにも望みがあるというものじや」

長老の言い分は尤もであった。藩主松平忠直は、性温順にして憐み深い名声があった。然もその留守中、家老大井主馬がその権力を利用して、政治を壟断しているとの噂が専らであった。

善助も長老の言葉に肯いた。

「江戸へはわしが上ろう」



と、善助は言った。

「わしも行こう」

「わしも連れて行ってくれ、わしはこの年じや、今となつては何か皆の衆のためになることもして置きたいのじや」

長老も言った。

夜は更けていた。山鳥の声が訝して怪しく夜気を貫いて響いた。

詳細の打ち合せを次回に約して皆が帰途についたのは、刻限も四つを既に回った頃であつた。

その間、名主善助の娘千絵は専ら村人達の間の連絡に當つていた。黒々しい千絵の姿は村人達の感激の的であり、勇気の根源にさへなつた。

「お嬢さんの姿を見ていると、わし等もこの儘じつとしていられなくなりすわい」

と、一人の村人が洩らす程であつた。

その夜も、千絵は善助の言いつけで隣村の上萱村へ出掛ける途中であつた。村外れの土手を歩いて千絵は、後に人の足音を聞いて立ち止つた。

嘉左衛門という納手代と、もう一人連れがいた。この嘉左衛門は嘗て、千絵にしつこく言い寄つて手きびしくはねられた覚えがある男で、千絵はその人の出現に胸をしめつけられた。

「千絵さん」

嘉左衛門は慣れ／＼しくそう呼ぶと、にやにや笑い乍ら近づいた。

「何処へ行きなさん」

「あなたの知つたことではありません」

「そうでござんしょう。この夜道を女一人、誰が見たって、忍ぶ恋

路と寸法は決つていますぞ」

どうやら、嘉左衛門は思い違いをしているらしいと判ると、千絵は、心の隅にあるほつとしたものを感じたが、別に新しい不安がどつとわいてきた。

「構わないで、そこをどいて下さい」

前に立ちふさがつた嘉左衛門を押しつけるように歩き出そうとすると、嘉左衛門は千絵の袖をしっかりと掴むと、

「誰に逢うのも同じこと、いっそ、あつしじやどうでござんすかね」

「いやらしいことを」

千絵は袖を払つた。血の気がぼつと頭に浮んで、夜目にもあてやかな白さで揺れた。それがどつと嘉左衛門の官能を刺戟したのであるうか、嘉左衛門はいきなり羽交締めに千絵を抱き込んだ。

「慰んでやれ、おい、足を持て」

と、もう一人の手代にせき込んで言った。

それまで、にや／＼そばで見つていた手代は嘉左衛門の手に、横／＼千絵の前に廻つた。が、その途端、その手代は額を抱えて、

「わーっ」

と、のけぞつた。

千絵の手には何時の間にか懐剣が握られ、帯の間から鞘を覗かせていた。眉間を押えた手から血を滴らした手代は、地の上を這い廻つて、声高に何事かを喚んでいたが、次第に動かなくなると、失神したのかぐったり木根の根元に額を埋めてしまった。

だが嘉左衛門の方は、少し許り剣術のたしなみを持っており、千絵の細腕を取ると、懐剣を奪い取り、暫く争つた後、千絵をそこに押し倒した。仲間が斬られてみると嘉左衛門は、色恋どころでなく

なつたものか、その儘千絵を奉行所へ引き立てた。千絵は自分の犯した罪よりも、果せなかった今日の役目を氣にかけるだけの余裕を未だ持っていた。

素足の儘、ざら／＼する砂を感じ乍ら、お父様、御免なさい。と、心の中で呟いた。

四

奉行仁兵衛にとって、千絵は第二の餌であった。どれ程責めてもとせからは何も聞き出せないと判ると、後は、女の白い身体を苛む興味だけでとせを折檻した。とせはあれからまる十日、仁兵衛の手で責められ通した。

だが、千絵は名主の娘である。これは大物だ、と仁兵衛は勢い込んだ。然も、上役人を傷つけた罪人である。仁兵衛は舌をなめずりするような氣持で、そこに引き据えられた千絵を見下した。

「名主善助の娘、千絵とはその方か」

千絵はついと顔を外らした。軽蔑した色が目の中にみえた。こうした女こそ手応えがある。今に泣き言を吐かせてみせる。

「千絵と申したな」

仁兵衛は重ねて言った。

千絵はそっぽ向いたまゝであった。

「この夜更けに、何処へ何しに参った」

仁兵衛は流石奉行である。百姓達の企みとこの娘とに一つの繋りのあることを、何となく嗅いでいるのだった。

「有態に申せばよし、隠し立てすると、思わぬ目にあうが」  
低めた声で言った。





「お前が、百姓共の不穩な企みに一役買っておることは、当奉行所には明白な事じや」

真向から押えかぶせて、千絵の顔を見すくめた。千絵は心持ち顔色を変えた。仁兵衛がこれを見逃す筈はなかった。

「身に覚えのないこと——」

「言うな！」

と、一喝して、

「いゝものを見せてやろう」

と、千絵を引き立てると、裏の土蔵へ入って行った。千絵は一瞬とせの事を思った。何の関連もなしにふと思ったのであった。

土蔵の中は暗かった。がしばらくすると薄ぼんやり白いものが見えた。そして、それがとせの肉体であることを知るまでに、しばらくの時間があつた。

「あっ、むごたらしい！」

千絵は思わず叫んだ。

既に腰巻も取られて、丸裸にされたとせは荒縄で足と首とをつながれて、丸くなって転がされていた。

全身いたる処みゝず腫れに腫れ上って、全体が紫色に変わっていた。

「これが強情なとせのなれの果てじや、よく見る」

仁兵衛は手にした杖でとせを打った。とせはかすかに呻いて転がった。続いて二つ三つ打つと、顔を掩っている千絵に、

「こんな態になりたいか」

と言つて、千絵の顔を覗き込んだ。

その時、千絵は不思議な感情に襲われた。

「えゝ、お奉行様の思うようになさって下さい、でも、とせはもう」

許しておやりなさいませ、とせ、とせは本当に何も知らないのですから」

その言葉に仁兵衛は顔をゆがめると、

「いゝ覚悟だ」

と、吐き出すように言った。

その日から千絵に対する拷問が始まった。勿論、とせも許しては貰えなかった。とせには千絵の拷問を見せ、千絵にはとせの拷問を見せるといふ残忍な方法を取った。

千絵の為に新しい道具が作られた。それは机を裏返したような奇妙な台であつた。

その台に千絵を乗せる前に、仁兵衛は配下の手代に千絵を裸にさせ乍ら、

「いゝ身体だ、矢張り名主の娘は身に不自由はないらしい。この分だと、百姓共はまだまだ食糧を持っておるな」

と嘲笑した。千絵は二十年間、誰にも見せなかった裸身を獣のような男の前に曝し乍ら、神に祈る気持であつた。

村民のためだ。と祈った。

千絵の折檻の役を、嘉左衛門が買って出たことは、千絵にとって二重の屈辱であつた。今や嘉左衛門は思う儘に千絵の裸を楽しみ、弄ぶ立場にありついた。

千絵は裸にされると、その台の上に連れて行かれ、髪の毛をつかんで四つ這いの姿にされると、四本の木の脚に、手足をがっしり結えつけられた。膝を折ることも出来ず、身体を倒すことも出来ない。固定した四つ這いといった恰好になった。

覚悟はしていたものの、千絵は自分の姿を想像すると羞恥にか

と全身が火照った。犬畜生のように四つ這いにさせられ、次にはどんな凌辱が待ち受けているのであろうか。

仁兵衛はそうした千絵の後に廻ると、そこに将児を据えて坐った。千絵は思わず足をすくめようと思ったが、足は開いたまま微動だもしない。仁兵衛の視線がそこ／＼と近くに感ぜられて来るのである。

千絵は眼をつむった。恐怖が募って来た。何の防禦もない、自由を奪われた裸身、大声を上げて駆け出したい衝動がわあっと押し寄せてくるのだった。それを歯を喰いしばって耐えた。これだけでも千絵には額に汗する責め苦であった。

「善助の娘、千絵は謀叛に加わった村人の名前を知っている」  
仁兵衛の独り言のような声が、後から低く聞えた。身体を突き抜けて通って来るようでもあった。一種の催眠術かも知れなかった。つい何か言おうとして、千絵ははっとした。芋虫のように転がっていると、せの身じろぎする気配を感じたのだった。

「言わねば打つ、嘉左衛門、打て」

嘉左衛門は血走った眼で、例の革鞭を手にすると、丸く盛り上げて待ち受けるかのような千絵の裸の臀に振り下した。

鮮かな色を残して革鞭は白い肉体にからみついた。千絵は苦痛にもがく間もなく、次の鞭が鳴った。革鞭は一分の隙もなく千絵の臀を刻んだ。引締った音を立て、鞭は空間を切り、肉体の上で止った。

千絵の呼吸は次第に荒くなった。声を立てまいとする気持が更に苦痛を強めた。が、それも暫くであった。一打ち毎に千絵は何もかも忘れて鞭の苦痛のみに思いついた。忍び泣くような悲痛な声が、喰いしばった齒の間から洩れ始めると、その声は加速度的に大きくな

った。嘉左衛門は犠牲の円い肉体を打ち続け乍ら、長年、千絵に込めていた想いが、鞭を通して伝って行くように思った。

千絵は四つ這いのまま、氣を失った。

どれ程経ったのか、一日かも知れない。或はほんの一刻位かも知れない。ふと正氣に返った千絵は、全身に誰を差し込まれたような痛みを覚えた。打たれた所の意識は全くなかった。むしろ打たれない個所が痛んだ。

首を上げることも出来ない。

千絵は何かを求める気味で呼んだ。

「とせ、とせ」

返事はなかったが、僅かに何処かの隅の方で微かに呻き声がした。とせは死ぬかも知れない。ふとそういう気が、千絵の頭の中に浮んだ。

翌日も又拷問はつづいた。

勿論、千絵の気持は乱れていなかった。恐れおののき乍らも口を喰いしばっていたが、何かしら昨日とはめっきり気が弱くなったと思つた。この儘、二、三日したら白状するかも知れない。千絵は叫んだ。

「殺して！」

「殺しはしない。ゆっくり言う迄待つ」

仁兵衛は針を含めた声でそう答え、不気味に笑った。仁兵衛は千絵の白状を待つ前に、残酷な方法で女を責めさいなむことに心の底から揺り動かされるような衝動を感じるのだった。これは、とせを責め乍ら発見した心の陰気な喜びであった。千絵には、とせとは違つた一つの喜びがあった。



「蠟燭を持て」

仁兵衛が嘉左衛門に命じた。

千絵は慄然とした。汚れた床以外何も見えず、然も見えない所で自分を虐む準備がされている。狂おしい程の恐怖感であった。

「殺して、早く」

それに応えず仁兵衛は、嘉左衛門から蠟燭を受取ると火をつけた。蠟燭の灯りが暗い土蔵の中をぼつと照らし出した。とせは呆けたような顔でこちらを見ていたが、蠟燭を持った手が千絵の方に動いて行くと、

「きやあッ」

と叫んで顔を伏せた。何時か自分にも加えられた時の苦しみが、地獄絵のように思い出されたのである。

千絵は新たに加えられた苦しみに、殆んど失神せん許りであった。固着した台の上から逃れようとして必死に手足に全力を込めてもがいた。当てられている熱さから逃れたいのだ。逃れねばならぬのだ。

だが、台は微動だもせず、蠟燭の炎も動かない。土蔵の中に反響する千絵の悲鳴だけが動くものであった。

間もなく千絵は失神した。

それから二、三日して、何処からともなく仁兵衛のとせと千絵に対する拷問の様子が村民達の間に伝えられた。見るに見かねた納手代の誰かが喋ったのかも知らない。

「千絵様は、毎日／＼仁兵衛の気狂いのような手で、むごい／＼拷問を受けていらつしやる。とせも、もう死にそうだよ。それはもう非道な仕置きじやそうな」

村人達の口から耳へ、耳から口へ伝った。そして村人達は、次第にこの仕置を聞いて狂暴になって行った。この世では許されぬ行為に対する憎悪が、最早奉行へでもなく、鬼畜の仁兵衛に対して一丸となって燃え上った。

千絵様をとせを、仁兵衛の手から救い出せと、村内の一つの声やがて村全体の声となり、もう見境いはなかった。そして、一つの流れが奉行所へ向けて殺到した。

これが世にいう〇〇〇〇農民一揆で、遂に奉行所を焼き払い、奉行山形仁兵衛を殺し、松本領を延焼で蔽ったのは、天和三年八月の末のことであった。

### 編集方針について

読者の皆さまの御意向を最も迅速に誌面に反映させたいため、皆様のお意見を求めています。毎月、真面目な御便り頂き厚く感謝すると共に、誌上又は直接の回答を行っておりますが、今後共更に御熱心なる御意見を以て編集者の啓発、鞭撻に資せられるよう期待いたしております。

### 御願

寄稿家の住所の照会や文通幹旋、或は雑誌や編集部を直接御訪問下さらないよう、毎月本誌にて御願ひしておりますが、相変らず訪問者があるとを絶たず困惑しております。何卒、文書を以て御注文又は御照会下さるよう御願ひ致します。編集者に対しての面会は、必ず事前に文書で打合せの上にして頂きたく、突然の御訪問は困くお断り致します。

Das Grausame Weib

Dr. Yohannes R. Birlinger

# △ 残虐なる女性達 △

—1901年刊行の独文絵入単行本より—

森 本 愛 造・訳

## 第三章 教育者としての女性

### 第三章 前 説

訳者は本書の翻譯に當って余り訳者の言葉が入って来すぎるのはどうかと思うのではあるが本章に於ては、我國の教育が多く男性教師によって行われる為、女性教師の教育というものの、及び女性教師そのものに対する考え方は不明確なのである。私達は女性教師の我が国に於ける最高の典型として村岡花子女史を挙げる事が出来る。彼女の持つ、母性的な味は方法上だけの物かも知れないが、我國に於て、最も完成された、日本的な女性教師の一人であつて、同時に女史は女性教育者を代表するものと考えてよいのである。然し、私達が之からビルリッゲル博士によって紹介される西欧の女性教師はそういった性格のものではない場合が多い。本書の最後に書いてある言葉を引用するならば「亜米利加に於て青年達は幼少の頃より、同国の教育界で圧倒的多数を示す女性教師によって教育をうけるのである。そこで、彼等はかよい、華奢な文性の手が、如何に力強く鞭を扱い、如何に強制的な力をもって、青年達の身体に振り下されるかについて充分に学ぶのである。我々が

亜米利加の男性が其故にすべてマゾヒスティックであると考える事は尚早であるが、其等の体験は益々外見的にはマゾヒズムと考えられる程のフェミニスト的な態度となつて現れるのである。又、エドヴグルト・フックスとアルフレッド・キントの共著になる古典的な研究書(註1)「女天下」の一節にも「王位についてから後まで、王の尻に鞭を当てる女教師に関する仏蘭西王の話」(註2)が出て居たと思う。

とにかく残虐な女性達の一節として登場する女性教師達や、母親達だけでなく、一般に西欧では教育する者(母親達をも含めて)は厳密な意味では訓練者(Dresseur.)と考えてよいのである。

註① Edward Fuchs, —Alfred Kind; "Die Weiber Herrschaft".

邦訳抄訳あり、世界奇書異聞類聚全二卷中第一一巻、村山知義訳、大正一五年五月二〇日、国際文献刊行会刊行。

②右の文献邦訳第一八四—五頁、但し、村山氏訳は誤訳多し又伏字も多々有、併し現在古書店で購求比較的容易である。同書中特に「フランスのハイリッヒ・四世云々」は珍訳、ヘンリツク・イブセンは伊太利で



はエンリコ・イブセンになり、ウィリアム・

テルは仏国でギユイヨム・テルになる事を考えれば、アンリ四世とすべきである。

而も、ハインリツヒ四世などというのは独逸侯国の王にはよく居る。特に注意すべき手落ちである。 [(G) HEINRICH=(F) HENRI=(E) (A) HENRY=(I) ENRI-

CO. (E) (A) WILLIAM=(F) GUILLA-

UME=(I) GUILLIERMO] 猶本引用文

はフックスやキントの著も引用してあるの  
で原文はアルドウアン・ド・ペレフィース  
の書である。

一体、子供というものは母体から出て来るのであるから、母が子供に対する愛情ほど当然であり、自然なものはない。それ故、人によっては、全ての芸術のジャンルが今迄に努力を重ねてきた母性愛の讃美は判り切った事の再確認にすぎないとする説も有るのである。所謂母性愛というものに、特殊な例外的な発展を惹起させる条件が世の中に存在しないならば (訳者註「性慾の事」) スの説も亦成立つのであろう。併し、母性の愛情は全ゆる段階に別れ、全ての方向に発現するのである。それは些細な本能的な保護の意識から自己否定の犠牲的な働きまでの種々の発想を起して

来て居る。

一般的には「非母性愛的な行為」は大衆の前へ提供される場合、新聞の一部分や、書物の極く一部分であるので広く大衆の中に母性が屢々残忍な行為をする事は知られて居ない。多くの芸術作品は既成道徳觀念に基いた最良の状態に置かれた理想的な母性愛を描いているのである。(訳者註「西欧に於て之はマリアによって象徴されて居る様である」) 然し乍ら、この大衆の觀念は誤りである。諸種の実例が母性が父性よりも遙かに多くの場合子供に対する残虐の動機であり、責任を負うて居る事を物語って居る。

(著者註、此の部分は左記より引用、Ferrari: Entartete mütter, 135Page. フエラーニ著、母、一三五頁)

ウルフエンの説、「女性、母親が子供に対する残虐行為の主要な責任者である」という説は正しい。(著者註「此の部分は左記よりの引用 Die Sexual verbrecher 325Page.」)

一見此の事は納得し難い事ではあるが、よく事実を眺めてみると、殆んど何時も簡単に諒解出来る事である。ウルフエンは更に「母と子は父と子よりも、更にずっと密接な肉体的、内的な関係を持って居る。子は母の血と

肉であり、母は子を腹に持ち、苦痛の下で生み、屢々乳を吸わせ、子の生涯の最初の数年の間、殆んど一人で養育する。そこで母性愛という強い愛着と保護と、情愛の現象が説明されるのである。併し、愛着と同様に或る定まった条件の下では、前述の同じ理由で母の子に対する憎悪も亦、父の子に対する其よりも遙かに強い。そしてその憎悪は容易に発現する。父はむしろ、無関心のまゝで居る事が多いのである。母は子供と内的に大變近似する故に、子供が感じ、又感じると思われる、快、不快の感覚に対して極めて敏感なのである」と述べて居る。

更に彼は「児童虐待の主要な根拠が「性的なもの」である事から母親は父親に比して、より残酷な傾向を有して居る事を示している」と云う。

此の説は全く、一寸の疑いもなく、是認さるべき事である。何となればすでに序説に述べた様に (訳者註「序説は、本文終了後訳出の予定なる為め、その概要をこゝに書いておく」) 女性に於て特に性生活の完遂の可能な時期に於ては、すべての行為が性的な觀念と結合している。其の故に、女性の善き行為も悪い行為もすべて性的な思性に基いている( )

女性の性的思性の影響は決定的であるからである。

旧約聖書的な考え方、即ち「愛する者を懲しめる」という考えが、実際に子供の教育の唯一の方法として行われた時代には、教育に於て、現代の觀念からすれば正しく虐待と考えられる厳格さが支配していた。(訳者註)此の方法を革命的に改めたのがベスタロツチである。彼の基に刻まれた感動的な言葉はセンチメンタリズムの愛の詩句として我々の胸を打つ。) )

仏蘭西の国王、アンリ四世(HENRI IV)の二度目の妻であるマリア・デイ・メデイチ(MARIA DI MEDICI)はサデイズテークな女性であった。彼女は後に仏蘭西の支配者として君臨したが、その同情無き心、残酷無比な性格によって有名である。例えば本書第七章を参照せよ。そこに彼女の様々の心的なサデイズムの発露がある。(訳者註、本書第七章は「女性の空想的加虐」と題されて想像加虐の諸例が描かれている) マリアは彼女の侍女に命じて、皇太子——後のルイ十三世——を毎日、血が出るまで鞭打たせた。皇太子が懲戒の間に失神するまで、女官は鞭打たねばならなかった。マリアは、後に十歳にな

った皇太子が、王位についた時も、又その後もこの新しい仏蘭西王を鞭打たせる事を続けたのである。

又、前記アンリ四世の母、ジャンヌ・ダルベエル(JEANNE D'ALBERT)は若い頃、婚約者、クレヴ公(MARQUIS CREVE)との結婚を拒んだ為、その母は家庭教師を通じて死ぬまで革鞭で尻を打ち据えるがよろしいかと脅かした事が歴史に残って居る。(著者註)左の引用は次の文献による。

CABANES; *moeur intimes du Passeur* 290. カバーネス著「過去に於ける精神的品行」(二九〇頁)

モンターグ夫人についての諸記録が、我々に、彼女が実子を如何に虐待し、懲戒したかを物語って居る。

(著者註)左の引用は下の文献による。

Corvin; *Die Greibler*. カルヴィン著、「麦を賣ぐ人々」)

純粹にサデイズムが表面に表われた場合の一例を引用してみよう。英京ロンドン在住のチオルジニア夫人(Lady Georgina N) (著者註)引用は左記の文献より。Berlin 1861. 「書名不詳、柏林版一八六一年刊行のもの」この文献は、或る女教育家によって記

されたものである。著者は次の様に書いて居る。『私との交際で、この夫人は愛すべき女性であった。只、娘を扱う時の彼女は全く氣儘な別の性格を持って居た。併し、平常の彼女を知って居るだけに、私には初め夫人の娘が朝、母親の寝室から泣き乍ら出て来るのを何故か不思議に思つた。而も其の娘は明かにじつと立っている事も出来ない程、答打たれている事が判ったから尚更の事であった。此の場合、私が不思議な嫌悪感を感じなかったとしたら、私は石の様に冷い心を持って居ると評されても仕方がないのだらう。多くの場合、娘達はそれ程のお仕置をうける過ちを犯して居なかったからである。私の判然とした氣持はずい分永い間続いた。この疑問は夫人が害の後で、直ちに娘に愛撫と御褒美とを何時も与える習慣を知ってから益々深くなつて行つた。併し、疑の永解する時が来た。

或る日、娘のシオルチアナの部屋付女中、Mは私の所へ来て、(娘の名はシオルチアナ、母夫人はシオルチニア——間違えないで下さい) (訳者) 或る大変嫌な問題について、夫人が私に相談する様に云つたと告げた。

夫人は私に、シオルチアナと彼女の娘全部を最も厳しく監視してくれる様に頼んでき



た。夫人の意見では、娘達は肉体と、遂には精神までも腐らしてしまふ様な罪に耽って居るというのである。〃一体どんな罪なのですか？〃と私は緊張した態度で、夫人にきいてみた。何となれば私は何時もデオルチアナの動作を見ている、何一つ不正がなかったからである。女中が横から突然私に云った。

「まあ、貴女はお信じになろうとしないのですね。あの子達がどんなに墮落しているか、御存じないのですね！ あの人達は一日も缺さず罪を犯して居るのです。奥様と私とはあの子達の目付ですぐ判るのです。そうして子供達は洪々白状するので、私達は何時も鞭を使つて、白状を判つきりしたものにするので。強情なので私達は鞭を持つ手が痺れてしまつて、どうにもならない事だつてあるのですよ。その辛さといつたら、貴女にはきつとお判りになりませんね」

私は驚いて目の前が真暗になつてしまつた。無意識に私は叫んだのだつた。

「いや、そんな事は有り得ない事です。母が子をそんなに拷問するなんて！ 貴女方は子供が判つきり事細かに白状するまで打つと仰言いましたね。それは正に拷問です。そんな事は現在では全文明社会で重い罪人に対し

ても行われていない事です。彼女は一体、どんな風に子供部屋に入るのですか。この可哀そうな子供達が負っている罪とは、一体何ですか？」

夫人は、宗教裁判官の様な怒りを浮べて、デオルチアナが手淫に耽つて居るのだという事を話した。私が一応それを疑つたとき、女中は烈しい口調で〃奥様はお怒りになりますよ〃と私を嚇かした。そこで私はそれ以後、デオルチアナに充分目をつけていて、観察したが、一向に淫靡な断片すらうかゞい得なかつた。

毎朝、女中のMはデオルチアナとシャルロット (CHARLOTTE) を夫人の部屋へ引きずり込んだ。そこで彼女等が血が出るまで打たれない日は少なかった。私はきこえてくる彼女等の恐怖と苦痛の叫びをどうする事も出来ないで、きいている他なかつた。二番目の男の子ゲオルク (GEORG) の上にも残酷な鞭は容赦なく打ち下された。只、最年長のラヴィニア (LAVINIA) だけは打たれる事はなかつた。私が或る時、夫人に〃ラヴィニアは一寸も悪い事をしないのですね〃ときいたとき、夫人は憎々しげに答えたものである。〃あの娘は憎らしくて、余り悪いので手を下

すのも嫌になつてしまひますよ〃

やがて、Mは夫人の命令で、全く荒唐無稽な機械をオックスフォード市内の (Oxford) 或る機械技師に作らせねばならなかつた。秋になつて私が再びロンドンに呼ばれてから、私と子供達の言語に絶する苦痛が始まつたのだつた。子供達は確実に毎日折檻された。想像を絶する事であるが、女中のMは鞭で打たれて血のにじんでいる娘達の傷口へ、夫人の命令で胡椒と塩をすり込んだのである。夫人は子供達を不自然な行為 (手淫) から解放し是正するという口実の下に、全ゆる悪魔的な考えを實現して行つた。夫人の拷問は日を追つて悪質になつて行つた。子供達は夜、手足を柱に縛りつけられた。そうして夫人は全ゆる種類の新しい残酷行為を考案した。又、同時に夫人は私を同じく拷問者に仕込もうとして、すべての手段をつくしたのだつた。その計画がみごとに失敗したので、彼女は復讐を考えた。

私は或る朝、夫人に呼ばれて彼女の寝室に入つた。室の中には夫人の寝台の上にシャルロットが手と足を縛られ、全裸で、身体中、鞭の痕で血が流れて転がっているのだつた。シャルロットは入ってきた私を見詰めたが、

私は一生その眼を忘れる事が出来ないのである。而も、母親は私に一本の革鞭を渡して、一度は教師の義務を実行する様に要求するのだった。革鞭はすでに先端がさくらになり、娘の血がしたって居るのだった。

この独乙人の女教師の引用はこれだけにしておこう。彼女はこの経験を卒直に、真実のまゝ述べて居るので報告の真実性については疑う余地はないのである。猶、この回想録の他の部分には性的な部分は一つもないのである。然し、この記述を真実として解釈するならば、英国や米国の新聞や雑誌にまで大きく取扱われている、女性の折檻愛好についての信頼性は確固としたものである。事実、女性の児童鞭打の実際は世に考えられるより遙かに深刻なものを含んで居る。一八〇〇年前後に行われた次の様な教育上の残忍な行為も、その実施に当っての計画性と冷血に於て、特色的なものである。

某陸軍大尉の未亡人、シャルロッテ・テューゲントライヒ・フォン・ライブニッツ

(Charlotte Tugendreich Von Reibnitz.) はデッペの生れで (Deppe) 二十七歳であった。彼女は児童虐待の科で要塞に終身禁錮の刑を宣告された。彼女は娘が生後六ヶ月にな

ったときから娘の腰を握り拳と棒で打った。

彼女は又、最愛の長男をも時々余りひどくはなかつたが棒や笞で打った。娘が十九歳頃、娘を一日に三度宛、一五分に涉って白樺の笞で折檻した。此の時はいつも白樺三本位ずつ折れたのであった。同家の女中タンキンネ (Tankinne.) の告白に依れば女中は折檻の際、子供を押えつけさせられた。時々、尻から流れ出た血が一鞭毎に女中の顔に跳ねたという。(著者註、右の敘述は次の文献による)

Annalen der Gesetzgebung und Rechtsgelahrtheit in den Preu Bischen Staaten, III

「プロシア王家に於ける、法制と訴訟上の年代順記録、第三部」

次にハンセン (Hansen) の著書 (著者註) Stock und Peitsche, Dresden. 1902.

「棒杖と鞭笞について、ードレスデン版一九〇二年刊行」から引用する実例は更に母親の鞭打懲を判つきりと認識せしめよう。

「無用の刑を避ける為に黒板が備え付けられている。黒板には子供達のイニシアル——此の場合は男子四人 M・J・L・H、女子二人 O・F——が書いてある。何か過失がある」と、其らの軽重に応じて点、又は線が引かれ

る。そして賞められるべき行為に対しては◇印が書き込まれる。唯、甚だしい不従順、破廉恥な行為、生意気な挙動及罰の急速な実施が必要である場合等は、直ちに刑罰が行われる。刑は K1. (Kleisehe 平手打ち) Bi (Birkenrute 樺笞) R (= Rohr stock 藤鞭) 等の記号で名前の下に記入される。毎月一回「決済」が行われ、良い行為と悪い行為は相殺される。此の家の主婦は教養の高い、聡明な女性であるが子供達の悪い性質と、罰と賞とに於て、誠実に記録を残している。」

この特色ある実例は二つの重要な個所がある。第一はこの計画的、且怒りの感情なく、冷静に行われる懲戒は母親の先天的なサディズムを暗示している事。

第二に母親は自分の鞭打懲を巧みに両親の懲戒の権利の範囲内で行う事によって、刑法上の如何なる条項にも抵触しない事である。

(訳者註) 右の例は少々サディズムの域を外れて、鞭打愛好者から鞭崇拜症 (Peitschen fetisch.) の傾向が在る様に思われる)

次の報告は甚だ興味深い。というのは母親のサディズムとマゾヒズムが合併して現れるのであるから。



(著者註=Wulfen; sexual-erbrecher; Berlin 1910. ヴルフエン著「性的偏執者」柏林一九一〇年刊行より)

「一人の若い未亡人。彼女には一四才と一二才の美しい娘があった。更に一五才の息子が居た。良人の死後、若い夫人は極度の性的不満を感じて、其の為に彼女はサディスティックな感情を誘発したと云っている。彼女は年頃の、分別のある一人の青年(独身)と性的交渉を持つ様になった。間もなく青年を家庭内に誘い入れて相談役にした。彼女はやがて青年に二人の娘と一人の息子が悪い事を覚えさせた。つまり、三人共手淫の常習者である。息子は妹達の全裸を盗視している。等と訴えたので、青年は彼女の希望に応じて無実の子供達を懲戒した。事実青年は夫人の云う事を真実であると思い込んで居たのである。最初は男の子であったが彼女は其の場で、息子の懲らしめられるのを見ていた。そして其の後も彼女は娘や息子達の懲戒の場に常に立会ったのである。青年が依頼に応じたのですっかり喜んだ彼女はせっせとステッキ(写真参照)、乗馬用革鞭、及笞を買求めた。息子は之等の本格的な責道具の下で全裸になり、ソファの上で臥せる事を要求された。次いで夫人は娘

達の鞭打をも求めた。青年は之等年少者の鞭打に当って……するのを感じたので、興味を以て最初に妹を打った。母親は自ら娘の衣服を脱がせた。そうして姉も勿論、全裸の身体をソファのひじかけの上に倚りかゝらせて鞭打を受けねばならなかった。残酷にも之等の柔かい肌に彼女は二二本の長い革紐のついた鞭(Klappeitche mit 22 Riemen)を使用したものであった。娘達の体格は良く、早熟であった。最初に姉が全裸になる様母から命ぜられたとき娘は一応拒んだので赤い子供用のパジャマのズボンをつける事を許された。それは辛うじて陰部を掩うに足るものであった。勿論鞭打の間中、母親は娘の身体を押さえつけていたのだが、時折仰向けに寝せて、足を頭の方へ水平に折り曲げる形——即ちUの字を横にした形——を命じた。そうしておいて鞭の痛さを娘により強く味わさせる為に、彼女は態々ズボンを下げて最も敏感な場所に鞭の革紐を喰込ませる様にした。青年が性的興奮を感じたのは当然である。夫人は娘達や息子に鞭を与えたいとなると、いつも青年に手紙を書いた。

「ヴァレリイ(Vareilly)息子の子」は今日も鞭が必要です。浴用ズボンを取ったまゝで」

彼女は常に刺戟を多くする方法を考えた。その結果子供達は二人一緒に裸にされて鞭をうけねばならなかった。その上、母親は三人がみゝずばれで身体中を掩われてしまった後で、自らソファの上で革の鞭を以て「懲戒」してくる様に青年に願った。勿論、彼女は息子や娘達と同じ様にみゝず脹れで血塗れになって喜んだ。」

次の場合は母親の鞭打慾は明らかに仕事の熟達と良心の欠除が平行していると思われる。

(著者註=Herrmann Ernst; Berlin Massagen und maniküren, Leipzig. 1.57-58 ヘルマン・エルンスト著、「柏林の按摩と美爪師」ライプツヒ版第一部五七—八頁より)

「彼女はマッサージュ師であった、彼女には三人のきれいな娘があった。(五才、一二才、一四才)彼等を征服慾の材料に用いた事は恥ずべき事であり、良心にもとる事である。娘達は高等学校に通っており、午後はフランス人の女家庭教師によって監督されていたが、母親の極度に厳しい教育の意図については全然知らなかった。家庭内でも校内でも如何に些細な過失も鞭や笞によってのみ償われるの

であった。判らない乍ら娘達は鞭打教育に対しては慣れて居たので、母の命令次第、直ちに母の許へゆき、処罰の言葉をきき、ソファの上にかきんで、母が充分に鞭を使える姿勢を取るのだった。例えば一人の娘が悪いノートを取ってきた様な重い罪に対しては如何なる時も無条件に馬を打つ為の長い革鞭が用いられた。如何に鞭が痛くとも娘達は涙すら見せなかった。如何に小さな反抗、涙を見せる

事すらも鞭数が増える理由になったからである。併し之等の懲戒が単に純粹な教育上の目的の爲になされたのならば、大きな非難はなされないのであるが、この場合母親は一定の金額と引替に、好色な人々をのぞき穴から覗く事を許し、娘達の尻の上に巧妙な技術によって打ち下される革鞭が赤いみみずばれを描いてゆくを充分に観覧させたのであった。

(著者註「Lydia von wolfring: Die Kir-

dermiBandlungen, ihre Ursachen und die mittel zu ihrer Abhilfe; Wien 1907. 46p.

リディア・フォン・ウオルフリング著「児童虐待の原因と懲戒の方法」ウイーン版一九〇七年—四六頁より)

(以下続)



## 『ブローズ・マニア』

## の手記

吉次一平

私は福岡市のある産業会社に勤めている一サラリーマンです。二十三才で独身ですが、はからずも奇クク九月号読者通信欄で、ち

る読者より各種マニア用品の取次販売—例えば女性の下着、ハイヒール、ブラジャー、ズ

販売してはくれぬだろうかという御相談を讀みまして同じフエチシストとして全く同感であります。こゝに告白をしようという私は中



学の頃よりズロースマニアとしてこれまでもんなにその対象の入手に苦心し焦燥し、あるいは空しく涙をのんでいたかということをつりかえってみて、いろいろと懐かしい思い出がございます。私がもっと気の強い悪党か又は環境的に女性と接近した身であったのならズロースの一枚や二枚はわけなく手に入れることは出来たでしょうが、何よりも生来の臆病と、一人息子という悲運は、現在生活している所が、独身寮というおよそ色気なしの殺風景な——物干台にゆれているのは薄汚れた褌か猿股という位の環境であってみれば私の夢は全くの夢にすぎず、それ故ます／＼強く私の欲望はズロースにむかっていったのは仕方ないことなのです。

ズロース。腰の周りと両裾口にピッタリとゴムがしまって褶をつくっているあの優美な女性の肌の最も神秘的な部分をおもって飽くことなくその体臭を吸っているズロース。しかし私の求めているものはそんな芳しい香に満ちていなくても、女性に穿き汚されていなくても結構なのです。たゞズロースを自分に穿いた時の太腿に感じるあの何ともいわれぬ緊迫感と、たっぷりふくらんで裾の褶の波うっている美しいリズムを眺めるだけで充分満た

される私でした。とくに私が好きだというのは、普通、女学生あたりが用いるズロースでブルマースに似ている幾分ゆったりした型のものです。

私は夜更けの街角をさまよっては雑貨屋、衣料品店の店先をのぞいて歩く男なのです。私には他所の物干台に登って干し忘れてあるズロースを一寸失敬してくるとか、暗がりで女をおどしてズロースを捲きあげるとかいう芸当は絶対に出来ません。女の尻を追うという言葉はありますが私の場合は衣料品店の店頭、ズロースを追いまわすというみじめな男なのです。終戦後、糸へん景氣にのって繊維類は市場に溢れ、大小の衣料品店は軒を並べて店頭私の垂涎をさそう白、黒、メリヤスキヤラコの類をかゝけています。そして皮肉にもそれらの幾百幾千かのズロース屋の無限のズロースの中にあつて私の手に入ることは何という困難なことなのでしょう。『奇ク』の読者の云われた通り、男がいきなり店に這入って、「ズロースを呉れ」など云えるものではありません。気の弱いだけでなく又、ある程度は理性の強さをもっている私にしてみれば人の前でズロースという言葉すらうまく云えないほどでした。

たゞ私は町角から町角へ野良犬の様に歩きまわり、買いやすい店を求めて足を棒の様にしていました。人通りの少い、他の客のいない、しかも店には老人か子供が番をしているというチャンス！ しかし仲々困難なことなのです。それも店にはいつて物色しているうちに奥から苦手の若い女店員とか男が出て来たりして空しく出てくるということも屢々でした。全く馬鹿らしいことなのです。それはど欲しいズロースを目の前にして、しかもそれを買うという正当な合法的な方法によつてすらも私という男には恥しくて出来ないことなのです。相手の目の中に侮蔑、嘲笑という心理的な流れを感じることが全くやりきれない苦痛だったのです。あきらめて帰途につく日が多かったのですが、そんな時の空虚な心は焦燥にかわりどうしようもなく、一人もだえていました。

でもうまく見出した店で無事にズロースを手に入れることの出来た時の歓喜、躍る心で帰途につき、あとは私だけのやり方でそれを倦くまで楽しむのです。このことについてはこゝでのべる暇はありませんので次の機会にゆづりますが、ともかくこうして過去に私は幾十枚のズロースを穿きすてゝきました。

こういう事は段々強い刺戟が欲しくなってくるものなのでしょうが、私はいつのまにか単にこれらのズロースを相手に眺め、穿き、弄んだところで何となくものたりなくなってきたのです。してみると私のフエチズムというものは一つの方法であって、本来はマゾヒズムから出発しているのでしょうか、ズロースマニアである自分を人に露出する時の苦痛とすれすれの快感をむさぼるようになって来たのです。

六月のある夜でした。私はいつもの様に欲望のとりこになってズロースの幻影に憑かれて夢遊病者みたいにならうと町はずれの通りをさまよっていました。軒並に横目でチラチラと店の中を物色しては、私のほしいズロースの影を敏感に読みとっていました。頭は熱っぽく顔はほてっています。すると、やっと運よく老婆が一人眠そうに坐りこんでいる間口一間位の店にゆきあたりました。老婆は私の求めに応じてゆる／＼とそこいらの箱の中から二三種のズロースをとり出しては私の前に拡げてみせていた時でした。奥から二十二三の派手な若い女が頭を出しました。

「あゝ、それは女物ですよ。男の方のパンツ

ならこちらですわ」

と気をきかしたつもりで老婆をおしのける様にして出て来たのです。失敗った！私の胸はどきんと自分でもわかる位打ちました。老婆も困惑した恰好で一寸私の顔をみました。「お客さんは女物がいい」といわれたんで」と云いました。娘の好奇の視線はパツと私の顔を射て、私はその中に彼女の私に対する憐みと軽蔑の色をかぎとりました。シーンと

全身が羞恥に赤くなり舌の根がから／＼に乾いたのです。いつもならうまくごま化して逃げるのですが、その時はあまりの突然さと商売下手な女の高圧さに、いすくめられてたじ／＼だったのです。

「えっ？ 女物の方を……」

マア！ 男のくせにズロース買って！ 女の複雑な表情が、消え入るばかりの私の全神経にビリ／＼と感じられました。私は今この





女から侮蔑と憐みと受けている。女は赤くなっている私の顔をまじくとみているのです。私はわく／＼とふるえる手で老婆から渡された包みを抱えると、逃げるようにその店先を出ました。アンダーシャツの背中は汗でびっしりになっていました。

町はずれの暗闇で私はほっとして息をのみました。その時に至って初めて私は女のその時の表情が全神経がしびれた様な無限の陶醉感を与えたことを知ったのです。いや、何故女が大声で私を嗤わなかったのか、とさえ思ったくらいです。若し、彼女が、私のふるえる手をビシリと叩いたとしたら、私はもう感極って泣いていた事でしよう。

そのズロースは白い平凡ないつものズロースなのに、私には特別に女だけしか穿くことを許されていない女物であり之を穿く自分は女にすら嘲笑される種族なのだという意識にとらわれて、しかしそれは一種の快感でした。私の心の中でその日を無意識に期待していた快感だったのです。

そんな事があってから私は少しずつ大胆になっていきました。わざと事情のゆるす限り（知った人に見咎められることだけはいくらなんでも出来ませんでした）みんなの面前

でズロースを買うようになり、そばの主婦や女店員達が妙な表情をしているのも、好奇と憐みの目つきでだまってみつめることもみな私を満足させました。ある時など私に聞えよがしにうしろで「あの男はズロース買って……」と嗤っているのをきいたこともあるのです。自己凌辱の快感！ 相手が女の場合など

わざと自分からサイズをあわせるようにしてズロースを腰にあてゝみたりして相手を驚かせ、次の瞬間には心理的な侮蔑をうけるように自分でしむけていったのです。それと同時にこれらのズロースを実際に自分で穿いているところを人にみられて恥しめをうけてみたという願望を抱くようになるのも当然かもしれせん。といってまだその機会を持ったこともなく大抵は勝手な空想を弄んでいるだけなのですが。例えば、先日封切られた乙羽信子主演の「どぶ」という映画の中で、彼女が山道で四、五人の村の不良にとりかこまれ風呂敷包をとりあげられるところがありま

ら無理じいにズロースを穿かされ、その妙な恰好のまゝ人目にふれて嗤われる、という空想、ズロースを盗みに女学校の寄宿舎に入りつかまってしばらく、大勢の前でズロース一枚の姿で立たされていたり、私の夢は尽きません。

(註) 代理部に於て、女性の下着類を斡旋しては、との事です。が、差し当り、萩千恵子嬢作成のモデル嬢着用済の下着類(ズロース、ブラジャー、水着、腰巻、ストッキング、パンティ、バタフライ等)の中、不要になったものを御希望の方々へお譲りします。数に限りがありますから、詳細は希望の趣を御記入の上、一応御照会(返券封入)下さい。

尚、萩千恵子嬢が、若し読者の方々の中で「女性の下着類」の特別な趣向のものを調製してほしいというような御希望があれば作製してあげてもいいと申しておられますので、編集部宛(返券同封の上)布地、種類等御申出られれば、御取次いたします。価格、送料等について御返事差し上げます。